

源氏物語評釈

帚木

二

第二帖 帚木 評釈

〔旧注〕此巻を帚木と号する事は、源氏の君、中川のやどりへ方たがへになずらへておはしましたりしに、空蟬のつれなくて逢奉らずなりしかば、源氏へはき木の心をしらでそのはらの道にあやなくまどひぬるかな、とよみ給ひしに、空せみへかずならぬふせやにおふる名のうさにあるにもあらずきゆるははきぎ、と返しに奉りし歌にて付たる名なり。これ坂上是則が、その原やふせ屋におふるははき木の有とは見えてあはぬ君かな、といへる歌をとれる也。帚木とは、美濃信濃両国の境に、其原ふせやといふ所ある木なり。遠くてみれば帚をたてたるやうにて、近くてみればそれに似たる木もなし。然れば、有とは見れどあはぬ心にたとへ侍り云々。

〔新凡〕此物語の始終の様、かの品さだめにこもれり。然れば、桐壺巻は系譜のごとく、此品定は序の如くにて、その系譜につづく品定の中の事は、専ら巻の名を負すべからず。されば、源氏の女を懸想し給ふ始は、かのうつせみの君にあれば、名とせしにやあらん。或説に、此物語は作り事ながら、又昔有し事をおもかげにして書り。五十四帖も、有ものかと見ればなく、なき物かとすれば有ものなれば、此ははき木の一部の名と、夢のうきはしといふ名にて始終せりといふは、物の例にはかかはらで、みだりに故ありがましき工夫をなせし物にてぞ侍る。惣て此物語の巻々の名ども、いとかるき事よりつけたるを、此巻など一つ二つの名にのみふかき意あらんやは。古きふみどもの名のやうも、みなやすらかにのみからもやまとも有けるをおもふべし。又儒仏の書を引ていふなどは、例のいふにもたらず。さるいと心ありげに古言によれるなどの説は、皆々

よしあり。しかれども、たしかに思ひ定めたる説もなければ、しばらく旧注のままにものしつ。顕昭の袖中抄十九の巻にも説ども多く出されたれど、いづれもげにとおぼゆるもなし。其中に、綺語抄を引て、二つの義を挙げられたるうち、〔帚木のある杜のある也。其杜いとしげくて、もりの中にははき木をおひたり。それを遠くしてみればあるやうにて、杜の下に行て見れば木のしげりて見えぬなり〕とあるや、事の情に近かるべからん。さて品定をもととせずして、空蟬の事もて巻名につけたりといふことの説は、大かた新釈のごとくならんか。されど、きはめてはいひがたし。

○発端の語の事は、玉小櫛にいはれたるごとく、源氏君の一世のうちにありし事共を先ッ評じたるにて、げに此語一部にわたれり。さて此語を結びたる所は、夕顔巻の末に、〔かやうのくだくだしき事は、あながちにかくろへしのび給ひしも、いとほしくて、みなもらしとどめたるを、などみかどの御子ならんからに、見ん人さへかたほならずものほめがちなる、とつくりごとめきてとりなす人、ものし給ひければなん。あまりものいひさがなきつみ、さりどころなく〕といふ所なり。されば、此巻より夕顔巻の末までは一つづきなる文なるを、かりに三巻となしたるもの也。そのよしは、夕顔巻に、ここの語と引合せてくはしく注せるを見るべし。さて此語どもによりて猶考ふるに、発端にかかるすぎごとといひ、しのび給ひけるかくろへ事といへるは、源氏君の一代のうちの好色事をさしたるやうには聞ゆるものから、又この空蟬夕顔の事をさしていへるにはあらじかと思ふよしあり。さるは、かかるすぎ事としもいへる、かかるの詞も、巻々すべてのこととしてはあまりに広きに過て聞えたるに、かろびたる名をやながさんとあるも、帝の御子として受領ばかりの分際なる女に心をつくして、あらぬ所にまどひありき給ふを、かろびと

そへたる意なり。もとよりの此文の意は、さる事を専らとしてかけるにはあらで、別に此御世のみだりがはしきを、いかで上一人の御ころつけかし、女のころざし用意などのためにもとて書るは、記者の意にぞ侍るべき。

〔玉源氏〕君十七歳の夏の事也。此時官は中将也。但し中将に任ぜられし事は、桐つぼと此巻との間に有べし。さて諸抄に此巻を十六歳とせられたるは、誤なり。そもそも源氏君の齡は、桐壺巻に十二といへるより後藤末葉巻に三十九歳のよし見えたる、其あひだには、すべて齡をいへることなければ、此巻を十六歳とせられたるも、ただかの藤末葉巻より、逆にかぞへて定めたるものなるを、諸抄の説、其間に一年の違ひ有故に、此巻は十七歳也。その一年たがへるよしは、玉かつらの巻のところにいふべし。

○此発端の語は、見るに心得べきやうある也。まづ此帚木巻は、細流にもしるされたるごとく、此物語一部の序のごとくなるを、此発端の語も又一部にわたりて、序の如くにて、源氏君の壮年のほどの事を、まづとりすべて一つに評じたるもの也。此巻のはじめのころの事にはあらず。いひけたれ給ふとがの多きといふも、かかるすぎ事といふも、皆これより後の巻々にある事共をさしていへる也。これより前、桐壺巻にはいまださることなし。かたりつたへけむといへる、すなはち此物語此後の巻巻の事ども也。かくてまだ中将などに物し給ひし時といふより、其始へ立かへりて、その有しやうをつぎつぎに語るよし也。

〔新〕帚木と名づけたる事は、旧注のごとし。さて此名にことごとしきゆゑよしのあるやうにいはれたることどもは、新釈に弁へられたるごとくなるべければ、今ははぶきたり。さて又此巻のはき木の歌は、かの是則の歌によりたることは論なきを、その本歌のころ、猶うたがはしき

はいへりと聞ゆれば也。結びの語に、夕顔の事を書はてたる後に、かやうのくだくだしき事は、あながちにかくろへしのび給ひしもといへるも、此空蟬夕顔をさしたりと聞ゆるをも引合せておもふべし。若紫より次々の巻に見えたる人々は、さばかりに賤しきもあらず、大かた源氏君のよばひ給ふべきほどの人なれば、さしてかろびたるすぢにはあらず。此巻の末に空蟬の君の思ふ心を書たる所などにも、夫ある身にて逢奉りし事をばさしもいはずして、ただ身のほどの賤しきを恥らひたる事をのみむねといへるも、貴き賤きかけはなれたるけぢめありし故なるべく見ゆるをも考へ合すべし。かくて此巻より夕顔巻までの事どもは、其もと兩夜の品定に馬頭がいへりしことより御心つきて、さるくまぐままでおもほしかけたるさまなる事は、その脈を次々に引出たる詞どもの中に著く見えたる中に、夕顔巻に、かやうのなみなみまではおもほしかからざりけるを、ありし兩夜の品定ののち、いぶかしくおもほしなるなどいへるをも考ふべし。然れば、此一つづきの文には、受領ばかりの中の事をまづとり出あらはして、品定のなごりをあやなしたる条とすべし。かくして見る時は、いひけたれ給ふ咎といへる咎も好色の外の事にはあらで、この空蟬夕顔の外の好色事をさしたりとすべし。されど暫く本文には先達の説のままにとりて注しつ。見ん人猶よく考ふべし。

○此巻より夕顔巻までは一つづきの文なるを、三巻に分られたるさま、いとめづらか也。さるはいかなるぞといふことは、今知るべきにはあらざれど、かいなでの筆ならば、先ッ桐壺巻に源氏君の伝をかき、次に此巻に品定の事をいひ、さて中川の段をひとつにすべて空蟬巻とすべきことなるを、さはあらずして、品定につづけて中川の段をあらはし、さて其事の末を截てべちに空蟬巻をたて、さて夕顔巻をかきてとぢめられたるは、いと案外なるこちするにつきておしはかりに考れば、例の事を

きはきはしくせずして、さりげなく書まぎらはされたるにやとぞおぼゆる。さるは、此品定は、あるが中にも心をいれて世にあらゆる女のさかどもをくまなく論じあかしたる所なれば、先達のいはれけんやうに、実の一部の序のごときものにて、ふかく心をこめられたる物から、こればかりを別にはなちて某の論某の序などやうにものしては、余りけざやかにて、女の手してはかなくなつたしく書たる物のさまならねば、わざとかくまぎらはして何となく物語のうちにこめたる物なるべし。さればそのさまも、兩夜に源氏君の御とのゐ所のつれづれなるに、頭中将・左馬頭・藤式部丞などの何となく来つどひて、うちとけ物がたりすることのやうにとりなし、猶桐壺の脈をとり出て其前後を大殿の事もてあやなされたるなど、物語といふもののやうあることを蛸巻に源氏君と玉かづらの君との打とけ言の中にあらはしたると、同じ筆つきなればなり。さて、其大殿の事より中川の段を引出られたるに、俄にはかかずして御方違へにとりなして空蟬君をあらはし出、その事をばかたりはてずしてなかばにてたちきりてとちめたるなど、わざとしどけなく書まぎらはしたる物とおぼえて、かの品定のきはきはしからむことをかいけちて、おしつみたる筆つかひめきたり。

○品定のくだりのいみじきことは諸抄にいはれたること多ければ、いふもさらなる事ながら、実に此物語のむねとある所なる故にや、殊に作りぬしのざえのほどあらはれてかへすがへすめでたし。それが中にも、初に長雨のはれまなきをいひおこして、物語のしめやかなるべきしたくみをなしおき、さて源氏君と頭中将と殊さらにむつれ給ふよしをとぎ出てうちとけ言のたまふべきくさはひとし、次に又雨の脈をあらはしていよいよのどかにつれづれなることをいひ、つひに御厨子のふみどもを引出てたはぶれ給ふより此論のはしをおこされたるに、左馬頭・藤式部丞参

んとて、これかれ事をあやなして、さてあだなると美なるとぞ、相たのむべき所の大むねなるよしをしめしたるものなり。さてその次に、人々の昔ありし事を語るやうにして、さがなきとあだなるとの女を対へ挙て、そのあるやうを馬頭にいはせてことわり、次にはかなき女のためしを頭中将にかたらせ、ざえがりてこちこちしき女のさまを藤式部にいはせて、興としたるなり。これはた此二ツを反対としたる也。さてそのざえがる女のこのついでに、すべて女の才学だてし、或は世間の事を弁へがほするくせの、いたくけにくくよからぬ事をいひてをはりたる、これこの作りぬしの日比の心しらひにて、その世の女のざえがりたるをかたはらいたく思ひていましめたるなり。これらの事は、猶其所々に評ずるを考へ合せてさとするべし。かかれば、此一段にて、世中の男女のなからひの有さまをば大かたに書つくされたりと見ゆめれば、つらつら委しく見ん人は、教とも戒ともなさばなること多かるべしかし。さはいへ、作りぬしの心は、しかひたむきに教ぞ戒ぞなどきははしう書たるにはあらで、なかなかさる筆つきをかくさんとして、さまざまにまぎらはしたる物なれば、旧注のごとく、教戒にとりなし、儒道にいひよせ、仏法にしひつげなどせんことはいとあちきなく、さりとてまたおしなべたる昔ばなしのつらにいひなして、さばかり作りぬしの心をこめられたる事を、ただだめきめなれたる打つけのすき事せん媒となるやうに評したらんは、いともれいたくあたらしきこと也。見ん人ふかく心してあぢはふべし。○昔よりの注どもに、品定にいへる女のくせを巻々に見えたる人々にあてて、藤壺にあたり、葵上にあたりなど注せられたるは、一わたりいはれなきにもあらざれど、しかさしつけて此事はそれにあてん、此人は彼にあてんとてかかれたるさまには見えざれば、かたそばあたりたるやうなるも、いひもてゆけば又かたはらあたらしめ所ありて、みながらか

りあひて、ますます物語のさかりになりゆくさまなど、つゆばかりもすきまなきものなり。さて物語する当夜のさまの脈をうしなはしがために、一段ごとのきる所に人々のありさま・いふ言・思ふ心などを挟みあらはされたる、まさしくその人をうち見るがごとくにして、いはんかたなくめでたし。されば其所にいたるごとに、当夜のさまをあらはしたる第幾段也、とて評ぜり。心をつけて見るべし。此脈十二段にして、つひに其論竟たるに、藤式部一人をまづ下させて省かれたるなどは、殊に心きたる書さま也といふべし。さてまた、此品定の大かたのすぢは、はじめに人の種姓につきて上中下の品ある事をいひ、次に女の本上につきてさまざまの心ばへある事をいふうちに、しか何事もたらひてめでたき女はよに有まじきよしをことわりて、よろづ男の見ゆるしてすぐすべき事を何となく挿みていましめられたり。さて其次にさまざま女の難ある事どもを挙て、あだだしきとさがなきとの女のやうをとり出て、かたみによきあしき事あるよしをあげつらふ中に、すべては種姓にもよらず、かたちをいはず、ただまめやかにしづかなる心のおもふきなるを竟のたのみ所に思ふべきよしをいひて、よにたらひたることはなかるべき事をふかくしめされたり。次に、しふねき女のくせをいふ事のついでに、女の男に對する心しらひをそれとなくいひ出ていましめられたる所、殊にめでたし。さて其次に、三ツの事のたとへを引いでて、うはへのけしきだちたる女としめやかにまことある女とをくらべいひて、なほじちになんよりけるとある所、すべて此論のおちゐたる所なり。そもそも女の本上につきたるわるきくせをおしくるめていはば、ただこのあだだしきとさがなきとしふねきとの三ツにて、これを一つもぐせざる女は大かた世中にあることなし。されば、女はとにかくにこれをつつしみ、男はこれを見忍びんより外に、男女のなからひの心もちぬはなきよしをいは

なへりで見ゆるはひとつもなし。されば、大かたはいたづらめきたれば、今はさるすぢどもをば皆はぶきたり。しかれども、まづかくさまざまの女のさがを論らひたるは、これをおしひろめて源氏君にさまざまの人々を相對へて、その心ばへのあるやうを見すべきくさはひとし見えれば、その原因とはみるべきなり。さてまた、これに一段二段三段としるしもてゆきて、つひに十八段にいたりて、十八段の品定などいふ事、ふるくよりいはれたることなれど、これはた一条のおちゐる所々、かの段のちやうのやうには見えぬうへに、上にいふがごとく、事のすぢも段ごとにかはれれば、さばかりくはしくいふべくもあらず。されば今は又それをも省けり。但し一事のきる所には、例の標をつけて、彼此はなれたる事のさまのみをかりそめに示しつ。

○品定と空蟬・夕顔の事とは、いたくもてはなれたるごとく見ゆれど、さにはあらず。かの馬頭がいへりしことより、源氏君の御心つきて、さるあやしき所にもあくがれ給ふさまに書なしたる物なる故に、所々にそのつなぎの詞を挟みて、品定の段とかけはなれぬやうにかかれたり。されば、くだくだしけれど、その所々にて其脈なることを評じあらはせり。其中に、夕顔君の事は、品定の時頭中将のかたり出られたる事なれば、品定の次にまづかき出べきことなるを、さはあらずして、先空蟬君をあらはし、次にゆくりなきさまに夕顔をあらはされたる筆づかひ、さらにめでたし。大よそつくり物がたりは、打見るよりかかるおもふきぞと、ただうどの目にも末のさまの見えしらるるは、いとあさはかなるものなるを、かくとりかへて思ひかけぬさまに物するにてこそ、其書のめづらしさもいどいみじくはおぼゆるなれ。見ん人、さる意して、作りぬしのよにぬけいでたるかどかしさをあぢはひしるべし。かかる事ども、猶他にもおほし。

○空蟬と夕顔とは同じほどの人なるを、相對へて拏たる中に、一人は用意いどこまやかにふかくして、わろかめるかたちをもさるかたにとりなし、世中のありさまをもふかく思ひしりて物のあはれもいみじきに、心のみさをもただならぬさまにとりなし、一人はかたちをかしくおほどかに打とけて、さしたる用意もなくだはかなげにこめきたるさまにかかれたるは、反對の法なり。さて、いづれも同じ夏の事なる故に空蟬といひ夕顔といへるも、心あるに似たり。さて又、これらの人々は物語のむねとある人々にもあらざるからに、空蟬は国へくだりたるよしにて事をたちきり、夕顔はうせて玉かづらを残しとどめたるさまにして、末の物語の伏案とせられたり。さて空蟬は、関屋巻に其終をかかれたるは、源氏君の須磨よりかへり給ひて、人々をもらさずとふらひ給ふ事のついでに其末をとぢめたるなり。夕顔は、玉かづらの巻にいたりて、かの頭中将のいどみの末の脈をとり出べきためばかりにして終れるなど、皆とくはぶきて、むねとある人の事をかたらんとて也。これらまづよく心得おくべし。

○桐壺巻と此巻の品定とは、この物語の一部の発端なるよしは、先達もいはれたるがごとし。其中に、桐つぼは経、品定は緯のごとし。さるは、桐壺は、むねと源氏君の伝にて、そのはじめよりの事を年月にそへて語るなれば、経也。品定は、専ら人事のうへをかたるなれば、これ緯なり。おほよそ世間のありさまは、経には月日のおのづから過ゆき、緯には人事のこころとなり出るにて、さまさまの物語どもはいでくるなれば、先このたてぬきの大かたをあらはし定めおくにぞ有ける。これは作りぬしの、しか思ひてかかれたるにはあらざめれど、たがはぬ事なれば、ちなみにいふ也。

○桐壺巻と此巻の品定とは発端の巻なればにや、文章の語のはこびいと

むつかしき所おほくして、あやにいろいろみたる所などは、ふとさとりかぬる類ひもあり。これは作りぬしの意してかかれたる事にやらん。されど、よくよく其語のうつりを考へつつ見れば、いひしらずめでたき所も又おほし。中川のくだりよりは、専ら物語にうつれる故にや、文の語いとすがすがしくして、大かたにいりくみたる所はすくなし。これも作りぬしの意ありし事か、はたおのづから然るかしらねども、とにかくにあやなしたるは文ありて、めでたくすがしがしきはかほらかにて、めでたし。

○此巻に、源氏君と紀伊守との問答の所二所あるに、いづれも問答のきふなる所にいたりては、これかれの語の中にさかひなくおしつづけてかかれたるに、その人のいふことときはやかにわかれたる、いひしらずめでたし。すべて御国言の文は漢文とは異にて、この問答のかさなりてきふなる所、殊さらに書とりにくくして、事情をそこなふこと多きものなるを、かくあざやかにかかれたるは、いといとぬけ出たる文かきなりけり。猶かやうの所々は、次の巻々にもいと多し。心をつけて見ならふべし。

ひかる源氏名のみことごしう

〔玉〕此下に「て」もじをそへて心得べし。

〔花〕この発端の詞は、桐壺巻の終の詞に、「光る君といふ名は、こまうどのめで聞えて、つけ奉る」と書ををうけていへるなり。

〔釈〕この御説のごとく、桐壺巻より続きたる文の脈也。「ことごしう」は、光るといふ名の事々しきよし也。

いひけたれ給ふとが

〔玉補〕此とがを、師の「好色のとが」と解れたるはいかが。好色の外のとがなるべし。かの須磨に流され給ふ時の世の風説も、好色の過のみにあらずしやうの類ひなり。若好色のみのとがとしては、下の「いどご」といふ詞聞えがたし。

〔玉〕「ひかる」といふに「けたれ」といへる、おのづからの文のほひなり。いとごかかるすき事どもを云々

〔玉〕「かかるすきこと」といふより、「名をやながさん」といふまでは、その時に源氏君のみづからおほせる心といへる也。

〔釈〕「すきこと」といへる、即好色の事なり。「いひけたれ給ふ咎多かるうへに、又かかる好色事をし給へり」と後世までも聞伝へて、かろがろしき名をや流さんと、みづから思しつしみて、深くひめ給へる隠事をさへ語り伝へたる世の人のものいひは、さがなきものぞ」といふ意也。さてそのかくろへ事は、これより次の巻々にしるしもてゆく事どもをさしたる也。

なよびかにをかしき事はなくて

〔玉補〕是は巻々にある歌をおとしめいへると同意にて、源氏君の事をかくいふは、即作者の卑下にて、この物語の作りざまの、つたなくをかしからぬよしを下にごとわりたる也。かたのの少将・いせ物語などのふりとは、かはれるよし也。

かたのの少将

〔花〕清少納言の枕草子に、物語の名ども出せる処に、「こまの物語・かたのの少将」とあり。

〔釈〕この物語、今は世に伝はらず。おもふに、あだめきたるさまなりしなるべし。宗祇云、「作り物語の人にて、作り物語の人に対する事、面白くかけるなり」といへり。さる事なり。

光る源氏、名のみことごしう、いひけたれ給ふとがおほかなるに、

＊源氏心

バカリギヤウサンデ

アシクイヒケサレ

咎多

いとごかかるすきことどもを、すゑの世にも聞つたへて、かるびた

＊ヒトシホ

好色事

末

伝

カルガルシ

る名をやながさん、としのび給ひけるかくろへごとをさへ、かたり

＊キ

△オホシシカシ

カクシゴト

マデ

語

つたへけん、人の物いひさがなさよ。さるはいといたく世をはばか

＊伝

△世間

クチヤカマシサ

然

ズツトヒドウ

憚

り、まめだち給ひけるほどに、なよびかにをかしきことはなくて、

＊+

ジツタイムキ

＊+

シナヤカ

フウリウナ

ウハウハシタ

かたのの少将にはわらはれ給ひけんかし『まだ中将などにものし給

＊交野

笑

ひし時は、うちにのみさぶらひようし給ひて、おほいどのにはたえ

＊ジブン

内裡

バカリ侍

能

大

殿

絶

だえまかで給ふを、ししのぶのみだれや、とうたがひ聞ゆることも

＊+

△アラシ

疑

葵上方ノ女房ナドナルベシ

疑

疑

疑

疑

疑

疑

ありしかど、さしもあだめきめなれたる、うちつけのすきずきしさ

＊+

サウモウハキラシク

目馴

ソツジナ

好色

好色

好色

好色

好色

好色

などは、このましからぬ御本上にて、まれにはあながちにひきたが

＊好

オウマレツキ

△サハナカリシカドモ

メツタムシヤウ

違

違

違

違

違

違

まだ中将などに

〔玉〕上の、発端のすべての語をうけて、其始つかたよりの事どもを、これよりかたりはじむるなり。「まだ」といふも、其始へ立かへりていふ故なり。「など」といふも、はじめつかたをひろくいへる詞也云々。

さぶらひようし給ひて

〔釈〕この「さぶらひ」は、体言なり。「伺候」「どのゐ」などいはんがごとし。俗言にいはば、「禁中の御番をよくし給ひて」といふ意なり。

おほいどのには

〔細〕桐壺にも、「内ずみのみこのましようおぼえ給ふ。五六日さぶらひ給ひて、おほい殿には三日など、たえだえまかで給ふ」とあり。

〔釈〕この御説のごとく、きりつばの巻の脈をうけてつがれたる所なり。

しのぶのみだれやと

〔湖〕奥入「春日野のわかむらさきのすり衣しのぶのみだれかぎりしられず「内裏にて、いかなるみだれ心もあるらん」と、葵上がたには思ひうたがふとなり。

さしもあだめきめなれたる云々

〔釈〕「さしも」は、「このましからぬ」へ係る語脈なり。此段のてにをは、いと紛らはしきを、ひとわたりいはば、宗祇注に、「かやうに人の疑ひ思ひしかども、光君の御心には、なびきやすき人に心とめ給ふことなき御本上なるにより、さもなかりけり、といふ義也」といへるや、よろしからん。されども、「さもなかりけり」といふにあたる詞なければ、打つけにさは聞えがたし。されば、しばらく「御本上にて」といふ下に、「さはなかりしかどもまた」と云ことを加へてきくべし。この処、大かた脱文あるべくおぼゆ。

御本上

〔釈〕「本上」「本性」の借字にて、「几帳」を「木丁」とかく類ひ也。余荀子性悪篇、礼積偽者豈人之本性也哉。

まれにはあながちに

〔釈〕「まれにはひきたがへ、あながちに心づくしなることを」とつづく語脈なるを、打かへしてかくいふは、例の文法なり。「引たがへ」とは、「うちつけのすきずきしさなどは好ましからぬ御本性に引たがへ」といふ意也。おぼしごとむるくせなんあやにくにて

〔釈〕なんは「あやにく」へのみ係る辞のごとくなれど、さては下のけるといふにかなはずれば、猶「打まじりける」へかかる辞と見るべし。「あやにくにて」は、「心づくしなる事を、さるまじきこととはおぼす物から、なほあやにくにて」といふ意なり。

さるまじき御ふるまひも打まじりける

〔玉〕これまでの文、中将などにて物し給ひしころのさまを、ひろくいへる也。此巻の時のことにはかぎらず。

〔細〕此段は、悉皆源氏君の本性を書あらはし侍る也云々。

〔新〕なりがたきをしひて恋給ふ御くせ故に、うつせみ・藤つばなどの、有まじき御しわざもありし也。

まぢがほならん夕ぐれなどのこそ

〔玉〕「夕暮などまぢがほならん文こそ」といふ意也。「まぢがほ」は文のさまをいふ也。「夕暮」へかかれる詞にはあらず。さて「まぢがほ」といへるは、まつよしをあらはにはかかで、其心をかすめたるをいふ也。

かたはしづつ見るに

〔玉〕これは必「見せ給ふに」と有べき也。其ゆゑは上の「ゑんずれば」といへるは、ここへかかる言なるに「見るに」といひては、「ゑんずれば」のかかり所なくて、とどのはず。〔に〕もじも次の語にかなはざれば也云々。〔釈〕此説いはれたり。さらば上の「やむことなく」も、「かたはしづつ云々」へかかる語と見るべきにや。止事を得ぬ意なり。これを例の尊きかたの語としては、「せちに」といふにつきなく聞ゆべし。

それかかれかなと

〔釈〕「其人の文か、かの人のふみか」と、頭中将のとふ中に、といふ意也。そこにこそ

〔玉〕「そこ」は其所にて、今の世にも人にむかひて其許ソコモトといふに同じ。聞え給ふついでに

〔釈〕この「に」もじ、はるかに下なる、「どうめきたるけしきも、はづかしげなれば」といふ所へ係る也。甲乙の点つけたるを、よくこころえてよみ味ふべし。

女のこれはしもと

〔釈〕「しも」は助辞なり。これはどとり出て難のつけられぬよき女は、世にありがたし、といふ意也。「かな」は歎息したる也。

〔玉〕こより品定の始也。「しなさだめ」といふ名目も、はやく物語のうち、夕顔巻に見えたり。※夕顔一六ページに「雨夜のしなさだめ」と出る。

てはしりかき

〔玉〕「なさけに」と読きりて、「てはしりはき」とよむべし。なさけのためには手をはしりかく也。「か」も清くよむべし云々。

をりふしのいらへ

〔釈〕をりふしにつけたるふみのいらへ、歌のかへしなどを、心得てする也。「うち」は発語。

ずるぶんによろしきも

〔河〕其人の分にしたがひて、よろしき也。

そのかたを

〔玉〕「そのかた」とは、上の、手はしりかき、をりふしのいらへうちし、などするたぐひをさしていふ也。

かならずもるまじきは

〔釈〕右の二くさの事を撰ぶに、必定もるまじく取入れんほどの人は有がたしと也。

わがこころえたる云々おほかり

〔玉〕これは上の「うはべばかりの云々」のたぐひなる女に多くある事ぞ、といふ也。別に一種にはあらず。

〔釈〕「心得たる事」とは、銘々にならひえたる芸能のたぐひを云。それを自賛して、人をあなどりおとしむる也。

おやなどたちそひもてあがめて

〔釈〕父母など其女につきそひ有て、いつきかしづきあがむるをいふ。

おひさきこもれる窓のうちなる

〔河〕長恨歌 揚家有女初長成、養在深窓人未識

〔玉〕「おひさきこもれる」とは、年わかつて行きさきの多く長きをいふ。わかき人を「よこもれる」といふも同じ。さて「こもれる」といひて、「窓の内」とつづけいふは、おのづからの文のにほひ也。さて窓の内といふは、長恨歌の語によりて、人の女の親の家にあるほどをいふ詞也。実に窓の内にすめるよしにはあらず。

ただかたかどを

〔釈〕「かど」は、才の意なり。「かたかど」は、才芸のかたはし也。かたちをかくし打おほとき

〔釈〕「をかくし」は、かたちのよきをいふ。「おほどき」は、大やうなる意にて、俗言に「おぼこ」といふがごとく、心のつかぬさまをいふなり。

侍りなん。お+のがじしうらめしきををり、まぢがほならん夕ぐれ

メンメンソレンニ

待 顔

などのこそ、見どころはあらめ、とゑ怨んずれば、やん。ことなく、せ

△フミ

カリニウラミ玉フ也

ヨンドコロナク タ

ちにかくし給ふべきほどは、かやうにお+ほざうなるみづしなどに、

切
イセツニ 秘

ナホザリ 御厨子

うちおきちらし給ふべくもあらず、ふかくとりおき給ふべンかめれば、

置 散

イかくし

これには二+のまちの心やすきなるべし、かたはしづつ見るに、かく

二 バンメ
二 ノ キリ

△フミ

頭中将
カラ

さ詞まざまなるものどもこそ侍けれ、とてこころあてに、それか、か

イロイロ

オシハカリ 某甲 某

れか、などとふ中に、いひあつるもあり、もてはなれたる事をも、

乙

問

的

カケハナレ

おもひよせて、うたがふもをかしとおぼせど、ことずくなにて、と

△ソノ人カト

疑

言 寡

トヤ

かくまぎらはしづつ、とりかくし給ひつ。そこ源詞にこそおほくつどへ

カクヤ

其所 多 集

給ふらめ、すこし見ばや、さてなんこのづしも心よくひらくべき、

厨子

聞

とのたまへば、御覧じどころあらんこそかたく侍らめ、など聞え給

頭中将詞

難

ふついでに二釋女の、これはしもと、なんつくまじきはかたくもある

甲

此

着

難

かな、とやうやうなん見給へしる。ただうはべばかりのなさけに、

次第次第二

表 方

てはしり手かき、をりふしのいらへ心えてうちしなどばかりは、ず+ゐ

走 書

答

為

ぶん分によろしきもおほかり、とみ給ふれど、そもまことにそのかた

サウオウナ

多 有

其 実 其 方

をとりいでんえらびに、かな+らずもるまじきは、いとかたしや。わ

撰

必

漏

難

がこころえたる事ばかりを、おのがじし心をやりて、人をばおとし

メイメイソレンニ、心ヤリニ自賛スル意也

貶

め、かたはらいたきことおほかり。おやなどたちそひもてあがめて、

セウシセンバンナ

親

副

崇

おひさきこもれる窓のうちなるほどは、ただかたかどをききつたへ

* 拾遺の意也

ジブン

片 才

て、こころをうごかす事もあめり。かたちをかくうちお+ほどき、

動

容 貌

アドナク

まぎる事なきほど

〔湖〕親のもとにて、外の所作もあらぬほど也。

人まねに心をいる

〔釈〕人のするを見まねに、ふと心をいれて習ふこともあるに、心ともなく、おのづから一芸ならひとる意なり。

ゆゑつけて

〔玉〕何にまれ、一芸などをば大いにしいづる也。

まねびいだすに

〔玉〕すべてまねぶとは、その有さまのままをかたるをいふ。くたさん

〔玉〕「腐さん」也。「下さん」にはあらず。

みおとり

〔釈〕見そめたる時よりやうやう劣るを、見おとりと云。うめきたるけしきもはづかしげなれば

〔釈〕甲乙の点つけたる語脈をつぎて心得べし。「うめきたる」とは、心の不平を歎息したるさまなり。「はづかしげ」は、諸注頭中将の恥らひ給へるさまにとかれたるを、余滴に、例どもを多くあげて、中将の体の、源氏君にはづかしく見ゆる意にいへるや、かなふべからん。「うめきたるけしき」とあるは、恥たるさまとはいたく異なれば也。

いとなべてはあらねど云々

〔湖〕中将の物語をことごとくおぼしあはするにはあらねど也。ほほゑみて

〔玉〕たみ詞に、「含笑なり」といへる、よろし。

そのかたかともなき人は

〔玉〕上に「ただかたかどを聞つたへて」といひ、「ひとつゆゑづけて」などいへるは、かたかどある女なるを、そればかりの能もなき女も、世に有べきにや、ととひ給ふなり。

とるかたなく口をしききはと云々

〔釈〕とり所なくわろきと、いうなりとおぼゆばかりすぐれたるとは、共に少くして、大かた同じほどならんといふ也。何事にかぎらず、世中のありさま、げにかくなん有ける。

〔評〕この品定の段は、初に先、女の難なきは大かたよに有まじき、といふより書出られたり。そは新釈に、「是ぞ下の数々の論に冠らしむる語

わかやかにてまぎるることなきほど、⁺はかなきすさびをも、^{*}人まね⁺若

に心をい^セる事もあるに、おのづからひとつゆゑづけてし出ること⁺セイヲダス^自然一芸

もあり。みる人おくれたるかたをばいひかくし、さてありぬべきか^{△ソレヲ}後方言隠サウオウニスル方

たをばつくるひて、まねびいだすに、それしかあらじ、とそらにい^{トリカザリテ}出^其サウアルマイ^空下

かがはおしはかり思ひくたさん。^{*}まことかとも見もてゆくに、見おと^{ウシテ}腐^{實ニサウカト}劣

りせぬやうはなくなんあるべき^{*}とうめきたるけしきも、はづかし^{△イヒテ}△中將ノ

げなれば、いとなべてはあらねど、われもおぼしあはする事やあら^{*}源氏合

む、うちほ⁺ゑみて、そのかたかどもなき人はあらんやとの給へば、^{*}源詞片オ

いとさばかりならんあたりには、誰かはすかされより侍らん。とる^{*}頭中將詞ソレホド誘寄トリ

かたなくくちをしきと、⁺いうなりとおぼゆばかり、すぐれたるとは、^{*}ドコロナク^{ホド}ラチノアカヌ^勝

かずひとしくこそ侍らめ。人のしな^{*}たかくうまれぬれば、人にもて^{*}数等種姓貴生

かしづかれて、かくることおほく、じねんにそのけはひこよなか^{*}アガメラレ^{△ワロキコトノ}形容各段ニチガフ

るべし。中のしなになん、人の心々^{*}おのがじしのたてたるおもふき^{*}メイメイソレソレ^{△志ヲ}フリアヒ

もみえて、わかるべきことかたがたおほかるべき。しものきざみと^{*}分^下刻

いふきはなれば、^{*}ことにみみたらずかし、とていとくまなげなる^{*}極^殊耳ニトマラス^{アキラカニ知りタゲ}

けしきなるも、ゆかしくて、そのしな^{*}じなやいかに。いづれをみつ^{*}△中將ノ^{聞マホンキ意也}品々^{如何}三

の品におきてかわくべき。もとのしな^{*}たかく生れながら、身はしづ^{*}置分元種姓貴沈

いとくまなげなるも

おのかじしのたてたるおもふきも云々

〔釈〕中品なるは、さして人にもてあがめらるるばかりもあらず、おのおのたてたる志のおもふきも見えて、わかるべき也。

〔玉〕よしあしの見えわかるること也。上文に、上品の人はかくる事おほく、といへるに對へて見るべし。

〔新〕中将、残る隈なげにのたまへば、猶此事委くとかん事をゆかしみおぼすまゝに、問を設出でとかしむる也。さて「其品々やいかに」とは、「右のごときは」わたりの品也。猶それが中にもきぎみきぎみこそあらめ」とて、とひはげますさまなり。「くま」は隈・曲などの字を書いて、入めぐりたる所、又陰ふかく隠れたる所などをいふ。

いづれを三の品におきてかわくべき

〔釈〕「人の品たかく」といひ、「中の品」といひ、「下のきざみ」といふをうけて、「三の品」といへり。

なほ人の

〔細〕諸大夫などの時を得て次第に昇進して公卿までなりのぼる人也。

〔釈〕なほ人ここにては地下をいふ。

左のうまのかみ藤式部のじよう

〔評〕この二人をあらはし出されたる、いといとめづらし。この品定、源氏君と頭中将とのみにては、いとさうざうしければ、この二人をそへてにぎはしくしたる也。然るに、却て馬頭主となりて物うちいひ、主とあるべき源氏君はなかなか打ねふりなどし給へるさまにかかれたる、さらにいとめづらしくをかし。さてまた、この二人の事も、後の巻々にすこしは出さるべきを、さもなくして、ただこの品定にのみむねと物いひたるばかりなるも、思ひの外のこちしといとめづらし。

御物いみにこもらんとて

〔釈〕すべて物忌は、外に出ず家内にのみとちこもり居る事なる故に、籠るといふ也。ここは、源氏君と共にこもりて、御つれづれをなぐさめ参らせんとて、といふ意也。

世のすきもの

〔新〕今の世にてのすきもの、と也。さてここにては、好色のみを云にあらず、さかしく風流なども有をいへり。

ものよくいひとほれるを

〔玉〕深くこまかなる所までよくゆきとほりていふなり。

いと聞にくきことおほかり

〔玉〕よの女のよきあしきをいふ故也。

なりのほれども云々

〔細〕左馬頭の申也。前の二の品を評ずる也。惟光がむすめ、藤内侍のすけなどにあたれり。

〔釈〕「さるべきすぢならぬは」とは、公卿になるべき種姓ならぬ也。「さはいへど猶こと也」は、さはいふものの、世人のおもふ所、もとよりの公卿とは一段ひきく思ふよし也。

〔玉〕「さはいへど」はいづこにても俗言に「何といふても」といふ意也。又もとはやんことなき云々

〔細〕これは種姓よき人のおとろへゆくをいふなり。末摘花にあたれり。

〔釈〕旧注どもに、この品々の女の事を、末の巻に見えたる誰にあたれりとやうにいはれたる、一わたりさることなれど、かならずしもこの論

み、くらみじかくて、人げなき、またなほ人の、かむだちへなど没位卑人ガマシクモナキ△ト直公卿

までなりのぼりたる、われはがほにて家のうちをかざり、人におと成上ワレコト云カホツキ飾劣

らじとおもへる、そのけぢめをばいかがわくべき、と問給ふほどに、△ト差別ドウワケヤウウチ

左の馬のかみ、藤式部丞、御物忌にこもらんとてまぬれり。世のす*リトウノ*籠参好

きものにて、物よくいひとほれるを、中将まちとりて、このしなじ*色者通ツケ品品

なをわきまへさだめあらそふ。いとときにくきことおほかり*弁定論*グルシイ成

のぼれども、もとよりさるべきすぢならぬは、よの人の思へること上元*サヤウニナルベキ系

も、さはいへどなほことなり。又もとはやんことなきすぢなれど、サウハイフテモヤハリ別カクベツナル

世にふるたつきすくなく、時世うつろひて、おぼえおとろへぬれ経テガカリ移△世ノ衰

ば、心は心としてことたらず、わろびたる事ども出くるわざなめれ*事足ン

ば、とりどりにことわりて、中の品にぞおくべき*ソレソレニ置*受領

て、人の国のことにかかづらひいとなみて、しなさだまりたる中に他カカリアヒ営品定

も、またきざみきざみありて、中の品のけしうはあらぬ、えりいでダンダンワルクモナイ△中へ△撰出

つべきころほひなり。なまなまの上達部よりも非参議の三四位ども*ジブンガラ*カンダチメ公卿イ四位

の、世のおぼえくちをしからず、もとのねざしいやしからぬが、や*オモハク種姓賤コ

すらかに身をもてなしふるまひたる、いとかはらかなりや。家のうコロヤスケニサツパリゲ

〔釈〕国の守・介は外官なる故に、内官よりはこよなく賤しめたること也。しかれども、他国へ出てみづから政を執行ふゆゑに、おのづから勢ひもつよく、家も富さかえけるによりて、後にはいとたふとくなれり。この作者の時も、大かたは昔のままにはあらざりしさま、巻の中所々に見えたり。さるからに「ころほひなり」とはかけるなり。心をつくべし。世の勢ひを見るにたること多かるべし。

なまなまの上達部よりも

〔玉〕俗言に、「なまじけの公卿」といふこと也。公卿といふばかりにて、世のおぼえも何も公卿のやうにもあらぬをいふ。次の「非参議の云々」と相對へて見べし。

非参議の三四位ども

〔玉〕いまだ参議に任ぜずして、公卿にあらざる三位四位の人どもをいへり。つねには位を以て、三位以上を公卿とすることもあれど、ここは官に就て参議以上を公卿として、それに対へていへる也。「なまなまのかんだちめ」よりも、「非参議の」といへる語の勢ひをもて知べし。青表紙本には、三の字なし。それによれる本はひがこと也。かならずひろくゆるやかに三四位とあるべき語也。四位とかぎりていふ所にはあらず。

やすらかに身をもてなし

〔玉〕公卿にあらざれば、よろづ心やすき也。

思ひかけぬさいはひ

〔**釈**〕かしこき御あたりに近づき奉りて、御子うみ奉る類ひをいふ。すべてにぎははしきに

〔**玉**〕「すべて」とは、上の受領の事をも合せていへり。

〔**釈**〕さらばすべて富たるに依て女の品は定まるなるべし、との意也。「にぎははしき」とは、家の賑はしく富たるをいふ。

こと人のいはんやうに云々

〔**玉**〕今馬頭のいへるは、さらににぎははしきをよしといふにはあらざる物を、其意を得ずして仰らると、中将の源氏君にいふ也。源氏君はよくところを得給ふべき事なるに、心もえぬこと人のいはんやうにと也。色このみならぬ人のいはんやうに、といふ注はひがこと也。

〔**釈**〕この処、少しまぎらはし。もしくは、源氏君はにぎははしく富榮え給ひながら、さもあらぬこと人のいはんやうに、といふ意にもあらんか。猶考ふべし。さて「にくむ」といふは、何れにしてもただかりそめににくむまねする意なり。実ににくむにはあらず。此所、当夜の物語のさまをあらはしたる第二の段なり。

もとの品時世のおぼえ打ちあひ

〔**釈**〕此段は、上が上の品をいひて、それをば打ちおき、次に下が下の中にも思ひの外にめづらしき事あるをいへり。反対の文法なり。玉小櫛に、これをも中の品のうちなりといはれたるは、いささかたがへり。

うちうちのもてなしけはひ

〔**釈**〕「もてなし」は、其女のもてなしぎまなり。「けはひ」は、けしきの外へ見ゆるをいふ。「おくれたらん」は、くちをしからん也。「さらにもいはず」は、論にも及ばぬ意也。

なにをして云々

〔**湖**〕彼女の見る人の思ひおとしむる心也。

うちあひてすぐれたらんも云々

〔**釈**〕この「打ちあひ」は、其女の身のほどにあひかなひて、何事もすぐれたるをいふ。上の「打ちあひ」とは、さすところ異なり。さてこれも「もとの品ときよのおぼえ云々」の中の女の事也。別に一種にはあらず。

上が上は打ちおき侍りぬ

〔**釈**〕上が上の事は我らが及ぶべきかぎりならねば、さしおきていはじ、となり。ここにて上が上の論ははぶきたり。

〔**玉**〕上件、「なりのぼれども云々」の条より、「もとのしなときよのおぼえ云々」までの条々は、女の身の品の種々をむねといひ、これより下の条々は、其女の心おきてふるまひのしなじなをいひて、これより上と、これより下とは、品定の堅と緯との如し。大かたこれらの事ども、心をつけて、こまかにわきまへ味ふべし。なほざりに見んは、作りぬしのさばかり心をいれたるほいなきわざなりかし。

さてよにありと人にしられず

〔**釈**〕これより上条の反対に、世に有ともしられぬほどの下の品の中に、珍らしくうたげならん人のあらんをいふ。上の「めづらかなる事、と心もおどろくまじ」といふより、うけて見るべし。此条は、めづらしきに心とまる事をせんとしたる論也。

あばれたらんむぐらのかど

〔**釈**〕「あばれたらん」は、荒たる事也。「むぐらのかど」は、葎の生しけりたる門と云意にて、荒たるさま也。

〔**玉**〕「むぐらの門」といふから、「どぢられ」といふ也。

おもふよりたがへることなん云々

〔**釈**〕思ふにたがへる也。箋に、『おもほえず、ふるさとにいとほしたなくてありければ、ここちまどひにけり』と、いせ物語にいへる類也』とあるがごとし。

ちちのとしおい云々

〔**釈**〕これも珍しきに心とまる事ながら、又一種なり。上なるはおちぶれたる家の事、これは何事もわろびれて見ゆる家の事也。

思ひやりことなることなき

〔**湖**〕外よりの思ひやり、ゆかしげなき事也。「思ひあがり」は、其女は身をけたかくおもひあがり居る也。

かたかどにても

〔**玉**〕たとひわづかに一ツ二ツのかどあらんにても、といふ也。

さるかたにて

〔**玉**〕中の品にとりては、といふ意也云々。「物をば」のばもじは、やを誤れるなるべし。ばにては聞えず。

ちにとらぬ事などはたなかめるままに、はぶかずまばゆきまで、も

てかしづけるむすめなどの、おとしめがたくおひいづるも、あまた

有べし。みやづかへにいでたちて、おもひかけぬさいはひ、とりい

づるためしどもおほかりかし、などいへば、すべてにぎははしきに、

よるべきななり、とてわらひ給ふを、こと人のいはんやうに、ここ

ろえずおほせらるる、とて中将にくむもとのしなときよのおぼえ

うちあひ、やんことなきあたりの、うちうちのもてなしけはひ、お

くれたらんはさらにもいはず、なにをしてかくおひいでけん、とい

ふかひなくおぼゆべし。うちあひてすぐれたらんもことわり、これ

こそはさるべきこととおぼえて、めづらかなる事、と心もおどろく

侍りぬさて世にありと人にしられず、さびしくあばれたらんむぐ

まじ。なにがしがとおぶべきほどならねば、かみがかみはうちおき

らのかどに、思ひのほかにはうたげならん人の、どぢられたらむこ

そ、かぎりなくめづらしくはおぼえめ。いかではたかかりけん、と

おもふよりたがへることなん、あやししく心とまるわざなるちちの

年おい物むつかしげにふとりすぎ、せうとのかほにくげに、思ひや

りことなる事なきねやの内に、いといたくおもひあがり、はかなく

しいでたることわざも、ゆゑなからず見えたらむ、かたかどにても、

いかが思ひのほかにはをかしからざらん。すぐれてきずなきかたのえ

らびにこそおよばざらめ、さるかたにてすてがたきものをば、とて

撰

及

式部を見やれば

〔**釈**〕馬頭かたりさして、式部が方を見やりたる貌なり。その夜のさまを頭はしたる第三の段也。

物もいはず

〔**釈**〕「父の年おい云々」と云よりの評を、わが妹の事に思ひあてたるにやあらん、物もいはず、と戯れて書たる也。いといとをかし。○上文、「もとの品時世のおぼえ打あひ」といふよりここまでは、もしくは頭中將の詞にや。ここに「のたまふにや」といへる事、さらに馬頭が云たる事とは聞えざれば也。されども又「なにがしがおよぶべきほどならねば云々」といへるは、中將とも聞えず。しばらく旧説に隨ひて馬頭の詞とす。猶考ふべし。

いでや云々かたげなるよをと

〔**弄**〕源の心に葵上の事を思ひあはせ給ふ也。

〔**玉**〕「よを」のをは、世なる物を、の意なり。

〔**釈**〕をもじの下に、傍注のごとき意をいひさして、とど受たる也。

白き御そもの云々

〔**釈**〕これより源氏君の打とけ給ひて、ますますめでたきかたちをいへり。

例の脈なり。「そひふし」とは、臂をつきてよこに臥すをいふ。今俗、よこになる、といふこと也。「ほかげ」は、火影に御貌の見ゆるをいふ体言なり。

あくまじく

〔**釈**〕飽足まじく也。

大かたよにつけて見るには

〔**玉**〕此段、万のうへにわたりてまことにさる事也。

〔**釈**〕「咎」は難の意也。

をのこのおほやけにつかうまつり

〔**釈**〕是より男子の宮づかへの事をもて、たとへを取なり。

よのかためとなるべきも

〔**釈**〕「よのかため」とは、政事をとりて滞なき、いはゆる柱石の人をいふ。「まことのうつわもの」とは、真の利器といふこと也。摂政関白也とかぎりていへる注はわろし。

かしこしとても云々

〔**釈**〕いかばかり賢き人なりとも、ただ二人にて天下の事の執行はるべ

***式部をみやれば**、わが式部心いもうとどもの、よろしききこえあるをおも見

ひての給ふにや、とやこころうらん、物もいはず◎いでやかみのし△アランイヤモウ上

など思ふにだに、かたげなるよを、と君はおぼすべし。しろき御そ品サヘ難世ナルモラ△サウノ廻ニカデアルベキ源ノ体

どものなよよかなるに、なほしばかりを、しどけなくきなし給ひて、ヤハラカ直衣ジダラクニ着

ひもなどもうちすてて、そひふし給へる御ほかげ、いとどめでたく、組結ビ玉ハヌナリ傍臥火影ヒトシホ

◆女にて見奉らまほし。この御ためには、かみがかみをえりいでも、ニナリテ上上撰出

なほあくまじく見え給ふ『さまさまの人のうへどもを、かたりあは*
飽語合

せつつ、おほかたのよにつけてみるにはとがなきも、わが物とうち*
馬頭詞得決

たのむべきをえらばんに、おほかる中にも、えなん思ひさだむまじ*
△女撰多

かりける。*
男子官をのこのおほやけにつかうまつり、はかばかしきよのかシツカリトシタ世

ためとなるべきも、まことのうつわものとなるべきを、とりいだし固真器量出

んには、かたかるべしかし。されどかしこしとても、ひとりふたり*
難賢一人二人

世中をまつりごちしるべきならねば、上は下にたすけられ、下は上△シテ政事シ知助

になびきて、ことひろきにゆづらふらん。せばき家のうちの、ある難事広議合テアラウ狭女

じとすべき人ひとりを、思ひめぐらすに、たらはであしかるべき大主マハス足玉緊

事どもなん、要の事共をいふ也かたがたおほかる。とあればかかり、あふさきるさカレコレ

にて、*
ユガミナリニなのめにさても有ぬべき人のすくなきを、すきずきしき心の*
寡ウハキラシイ

すさびにて、人のありさまを、あまた見あはせんナケサミゴト数多クラベンモノズキ

ひとへに思ひさだむべきよるべとすばかりに、おなじくはわがちか偏決タヨリ所為ルホド④②同

らいりをし、なほしひきつくろふべきところなく、心*
ネヲリ直心にかなふやう①

さだまりがたきなるべし

〔玉〕上に「おほかる中にも、えなん思ひ定むまじかりける」といへるをうけていへる也。然思ひ定めがたきことは、かやうかやうなる故なるべしと、みづからおしはかりたるよし也。

見そめつる契ばかりを

〔釈〕ふと逢そめたるも、我にたぐふべき前世の宿縁なるべし、とやうに思ひて、離別せず堪忍するよし也。さやうの男は、人よりもまめやかに見え、さても猶たもたれたる女も、何事かよき所あるべしと心にくくおしはかるる、といへるなり。

されどなにか

〔玉〕「されど」とは、「心にくくおしはかるる」といへるにあたりていへり。「なにか」は「何かは」也。心にくくおしはかるるとはいへども、さやうのたぐひも、何かはゆかしからんの意也云々。

よの有さまを見給へあつむるまに

〔釈〕馬頭、世上のありさまをかれこれ見集るにしたがひて也。

心におよはず

〔玉〕及びなきやうに思はるるをいふ。注に、「これをと思ひ及ぶこともあらず」といへるはかなはず。

君たちの上なき御えらびには云々

〔釈〕「君たち」は、源氏君・頭中将をさしていへり。「上なき御えらび」は、此君たちは当世の貴人なれば、此上もなき御撰びといふ意也。「まして」とは、我らだに如此なれば、ましていかばかりの人か、よく御心になふ人とはなり給はん、といへる也。「たぐひ」とは、配偶する意也。所せく思ひ給へぬだに

〔玉〕細流に、「ここにて句を切て、心を上へかけて見る也」とあるがごとし。我らが賤しき身にだにしか思ひ侍るを、まして君たちの上なき御えらびには、といふ也。たみ詞に、あまねく女を見あつむるだに、といへるはたがへり。そは所せく思はぬを、ひろく見あつむる意にとりていへるなれど、さる意にはあらず。すべて「どころせし」といふ詞は、言の本の意は、所の狭き意より出たるなれども、用意は必しもしからず。ここは、貴人は身の重々しくて、万の事たやすからぬを、どころせしと常にいふ、其意にて、妻をえらび給ふことも、貴人は何くれとむつかくして、たやすからぬを、我らがごとき下さまの人は、さやうに事むつ

かしくはあらざるを、それだに、といふ意にていへるなり。

〔釈〕此条きはめて誤脱ありとおぼえて、事の意委しくわきまへがたし。されども、暫く右の説どものごとく見てあるべし。猶今一つ試にいはば、「所せく思ひ給へぬだに」といふ事は、なき本もあれば、脱したる事は論なし。此詞を、上の「世のありさまを見給へあつむるまに」といふ下へつづけて見る時は、ことわり貫きて聞ゆるにつけて案ふに、本はしか有けんを、一度おとして、後にまた書入るる時に、二行ならびたる右の行へ書入たるを、左の行へ入たるぞとおもひ誤りて、後に又写す人の、この所へ入たるなるべし。もの写すには、かやうの事をりあるもの也。さてもなほ、「されど何か」といひたる事、穩ならず。是は河海に、「なにが」は『「なにがし」といふ心』とやうにいはれたるごとく、もとは「なにがし」と有しを、しもじを脱せるならん。かくして見る時は、「されどなにがし、世のありさまを見給へあつむるに、かく所せく思ひ給へぬ身」だに心におよばず、いとゆかしきこともなしや。まして君たちの上なき御えらびには、いかばかりの人かたぐひ給はん、といふ意となりて、事もなく聞ゆべし。「まして」は、君たちの上にある意也。かたちきたなけなく云々

〔釈〕猶馬頭の詞也。上の条は、つひのたのみ所とすばかりの女の、世に有がたきよしをいひ、ここよりは、女のうへにつけて、さまざまのくせある事をいへり。よくよくわかちて心得べし。

ちりもつかじと身をもてなし

〔釈〕「つかじ」は「つけじ」を写し誤れるなるべし。これは若き女の、おのおの身をたしなむ事にて、塵ひとつも身につけまじとするありさまをいへる也。ふみをかけとおほどかに云々

〔釈〕「おほどか」は、細流に「大やう也」とある意也。さて「おほどかに言撰をし」とは、ふみの詞をばいとよくえらびて、手づつならぬやうに書ながら、しか撰びたるごとくにはせで、大やうなるやうにまぎらはしたるをいふ也。「さらで」は、言のつづき、ことわりなし。万水一露に、「大やうなるさまにて文をかけども、詞をえらびつくるひてかくとの義也」といへれど、言のはこび、さは聞えず。又、「おほどかに」は「すみつき云々」へかかる語かともおもへど、文の勢さもあらず。

すみつきほのかに

〔新〕「墨つき」なるべし。手つき・口つきなどいふ「つき」に同じ。書たる墨色・筆づかひをかねていふ也。ころもとなくおもはせつつ

〔拾〕返事の墨つきほのかにて、心もとなければ、猶さやかなる返事を見てしがなと思ひて、又ふみをやれば、すべもなきまで返事せず、またせて、とにかくに人をなやますなり。

わづかなる声きくばかりいひよれど

〔釈〕「わづかなるこゑ」は、小さき声なり。それをきくほどにいひよるとは、いひよりて、つひに物ごしなどにて逢たるさま也。「息の下にひきいれ」とは、息よりも細きやうなる声することにて、ひきいれ声などいへり。「言すくな」は、物いふ事のすくなき也。

もや、とえりそめつる人の、さだまりがたきなるべし。かならずしも、

わがおもふにかなはねど、みそめつる契りばかりを、すてがたく思

ひとまる人は、ものまめやかなりと見え、さてたもたる女のため

も、心にくくおしはかるるなり。されどなにか、世の有さまを見

給へあつむるまに、心におよばず、いとゆかしき事もなしや。君

たちの上なき御えらびには、ましていかばかりの人かはたぐひたま

はん。ところせく思給へぬだに『かたちきたなけなくわかやかなる

ほどの、おのがじしは、ちりもつかじと身をもてなし、ふみをかけ

ど、おほどかにことえりをし、すみつきほのかに、心もとなくおも

はせつつ、又さやかにも見てしがな、とすべなくまたせ、わづかな

るこゑきくばかりいひよれど、いきのしたに引いれ、ことずくなな

いときよくもてかくすなりけり

〔玉〕「文をかけど云々」「わづかなる云々」の二つを合せていふ也。さやうの女は、身のおくれてたらはぬ所をよくかくして、男に見あらはされぬ也。俗言に「しがを見せぬ」といふ意也云々。さて、「なりけり」といへる意は、すべて世中の女は、おくれてたらはぬ難あるが多かる物なるを、右のごとくなるが、それをよくもてかくすことぞや、といふ意なり。なよびかに女しと見れば云々とりなせばあだめく

〔玉〕「あだめく」とは、あだなるさまに見ゆるをいひて、ただにあだ也といふとは異なり。さて物やはらかに、女らしき女ぞと見れば、さやうの女は必心よわくして、あまりなさけに引こめらるる物なる故に、おのづからとりなす時は、あだなるにとりなさるるさまなる物ぞ、といふなり。これをはじめのなんとすべし

〔玉〕右の「なん」は、殊に世に多くある物なる故に、女はまづこれをつしむべきことぞ、といふ意にていへる也。第一の難といふごとく聞ゆれども、さにはあらじ云々。

新此女より上には、まだ人たちて見たる女をこまかにはいはず、ここに至て女の難をいへば、是を最初の難に挙たり。

〔釈〕最初の難とある、よろし。多かる中の最初の難也。

ことが中になのめなるまじき

〔釈〕「ことが中」とは、多くある事どもの中に、といふ意也。諸注わろし。「なのめなるまじき」は、ゆがみなりにすておきがたき意なり。

〔玉〕此所、むかしより読誤れるから、意もたがへり。これは「なのめなるまじき」と読て「人のうしろみの」とつづけてよむべし。「人のうしろみ」とは、夫のうしろみするをいふ。夫をうしろみする方の事は、女のよろづの事の中に、殊になのめにてはえあるまじき第一のわざなるをいへり。注ども意にしては、「事が中に」といふ詞聞えず。よく味ふべし。

物のあはれしりすぐし云々

〔釈〕物のあはれを知るは、いとき事なれども、あまりに知過したるは、又あだなるかたにもちかきもの也。「すぐし」といふに心をつくべし。「はかなきついでのなさけ」とは、湖月に、「花紅葉月雪などのをりふしに歌よみなどする心也」といへるがごとし。「あり」の下にてもじをそへて、次の詞へかけて心得べし。

るが、いときよくもてかくすなりけり。なよびかに女しとみれば、あ

まりなさけに引こめられて、とりなせばあだめく。これをはじめの

なんとすべし。ことが中になのめなるまじき、人のうしろみのかた

は、物のあはれしりすぐし、はかなきついでのなさけあり。をかし

きにすすめるかた、なくてもよかるべし、とみえたるに◎また、ま

めまめしきすぢをたてて、みみはさがちに、びさうなきいへどう

じの、ひとへにうちとけたるうしろみばかりをして、あさゆふの出

入につけても、おほやけわたくしの人のたたずまひ、よきあしきこ

との、めにもみみにもとまる有さまを、うとき人にわざとうちまね

ばんやは。ちかくて見ん人の、ききわき思ひしるべからんに、かた

をかしきにすすめるかた

〔玉〕風流の方は、夫のうしろみの方にはなくてもよかるべきが如くなれども、と也。「物のあはれしりすぐし」とは、物のあはれしれるよしのふるまひをするをいふ。

〔釈〕「すすめる」といふ詞、心をつくべし。またまめしきすぢをしたて

〔玉〕「又」といふ詞、下に「いかがはくちをしからざらん」といへるへかけて見べし。風流なる方は、なくてもよかるべしと見えたれども、又さやうにあらず、の意にて、そのよしをいひつづくる也。

〔釈〕「まめまめしきすぢ」とは、夫の後見して、よろづ夫のためにまめやかにいとなむすぢの事也。「たてて」といへる、心をつくべし。

〔玉〕古の女は、みな髪をたれたるに、額髪とて、左右に、耳より前へもたるることなるを、かたちつくるはぬ女は、耳より前へたりたる髪を、うさくむつかしく思ひて、耳のうしろへかいこしてはさむを云。

びさうなきいへとつじ

〔釈〕うつくしき相なき家刀自の、ただ一偏に心うちとけたる後見ばかりをして、と也。このしてといふ詞は、はるかに下なる「何事ぞなど云々」といふ所へかけてきくべし。さらではこころ貫きがたし。「後見ばかりをして云々」の事にも「何事ぞなどあわつかに云々」、といふ意也。「打とけたる」とは、食物衣物につきたる心やすだての後見といふ事也。家刀自は、家内の事とる女あるじをいふなり。

朝夕の出入につけても云々

〔釈〕夫朝夕わが家を出入するにつけても、公私の人のありさまのよきあしき事などを、うとき他人にわざとかたらはるべしや。近く見ん我妻などに談合もすべく思ひて、ゑまれもなかれもする事どもあらんにも、ききもわかず思ひも知ぬものと思へば、その妻のかたもおのづから打背向れて、人しれずわらひも歎きもせらるるを聞て、妻の何事ぞなどあわつかに仰ぎゑたらんはくちをし、といへるなり。

ききわき思ひしるべからんに

〔玉〕むつましくかたらふ妻の、物のあはれをしりて、かやうの事の心をも聞わけて、分別あらんに、語らまほし、と也。うちもゑまれ涙もさしぐみ

〔釈〕目にも耳にもとまるよきあしき事につけて、打も笑れ涙もさしぐむ也。小櫛に「かたりてかひなき妻の、こちなきを思ひて、ひとりわらひもせられ、又いふかひなき事を思ひて、涙もさしぐむ也」といはれたるは、いたくたがへり。そは此次に「人しれぬ思ひ出わらひもせられ、あはれとも打ひとりごたる」とあるが、その事なり。しかるを、却てその注には「思ひあまる事どもの中に、歎息すべき事を思ひては、歎息する也」といはれたるは、語脈いたくたがへり。猶別にも云べし。「さしぐみ」は、涙の出くるさま也。

りもあはせばや、とうちもゑまれ、なみだもさしぐみ、もしはあや

合

笑

涙

若

ワケ

おほやけばらたしく

〔玉〕おのが身にはあづからぬ人のうえの事を、かたはらより見聞てはらたたく思ふこと也。此「おほやけ」は、俗のいやしき言に、身にあづからぬ人のうへの事に妬するを、法界りんきといふ、法界の意にあたり。心ひとつに思ひあまる事など

〔釈〕わが心一つにては決めがたく、思ひあまる也。これも公私のよしあしにつけての事也。

〔玉〕これは「おほやけばらたたく」とは別事也。つづけて心得べからず。「さて何にかは云々」は、二つを合せていふなり。

なにかはきかせんと思へば

〔釈〕此女は物の心しらねば、きかせてもかひなければなり。打そむかれては、其女の方へ向ふも物うくて、背向るる也。

人しれぬ思ひ出わらひ

〔釈〕其女のいふかひなきを、人しれずつづけて、ただひとり笑ひも歎きもせらるる也。『あはれ』は歎息の声なり。

なに事ぞなどあわつかに

〔玉〕夫のそのさまを妻の見て、それは何事ぞなどいひて也。

〔釈〕「あわつかに」は、騒がしく静ならぬ意也。あわは「あわつ」「あわたたし」などのあわと同じ。旧説はひがごと也。仮字もわとかくべし。

さしあふぎゐたらんは

〔玉〕うち仰のき居るにて、あわつかなるさまを云なり。

〔釈〕その事と心もつかずして、空を仰ぎてうかとしたる体也。

いかがはくちをしからぬ

〔玉〕くちをしきよしを、つよくいへる詞なり。「ことが中に云々」といふよりこれまで、一つづきなり。

〔評〕かくのごとき女、世にいと多きものなり。俗言にはたらきてなどいふさまの女なり。さてこの女のさまをかれたるは、さもあるべき事なるを、それにそひたらん男の心をかかれたる筆つき、心の中に入て見たらんがごとくにて、いともいとも委しく、あやしきまでにめでたし。

ただひたふるにこめきて

〔釈〕こより大やうに物やはらかなる女の事を論するなり。

ひきつくるひては

〔玉〕たらはぬ事をば、男のたすけてとりつくるふなり云々。

なほし所あるこちすべし

〔釈〕心の柔らかなる人は、いふがままに従ふべければ、おぼつかなきながらにも、直しがひのあるこちすべし、と也。

げにさしむかひて

〔玉〕此「げに」といふ言のつかひぎま、いささかむつかし。まづしばらく諾なひたるところにつきていへるなり。

〔釈〕「げに」は「見んほどは」の下へおろして心得べし。げにさても云々、といふ意にて、「なほし所ある心ちすべし」とあるを諾なひたる也。「さても」は、「つみゆるし」の次なる「見るべき」へかかる意にて、さても見るべきを、と云也。

たちはなれては

〔玉〕別所に離れて居るほど也。

〔釈〕「さるべき事」は、さしあたる用の事どもなり。

をりふしにしいでんわざの云々

〔釈〕をりふしにつけて、何事にまれ為出んわざの、あだなるにもまめなるにも、其女の心として思ひわかつ事なくして巧者ならぬは、何の頼みにもなりがたき、となり。

たのもしげなきとがや

〔玉〕立はなれる時、わが心と物を心得ることあたはざる女は、頼みにしがたき也。とがは咎にて、難といふこと也○「なほ」といへるは、こめきやはらかなるはよけれど、それもなほにて、やはりまだの意也。

そばそばしく心づきなき人の

〔玉〕「そばそばしく」は、たみ詞に、よそよそしくしたしからぬ也といへる、よろし云々。さてこは、男の心にそばそばしく心づきなく思ふにて、女の方よりそばそばしきにはあらず。

いでばえ

〔玉〕事にふれて、はえばえしきしわざのあるなり。

くまなき物いひも

〔玉〕世中の女のさまぎまのやうを、のこる所なくよく知ていふ馬頭なれども、也。「さだめかねて」は、上件にいへるさまぎまの女を、すべていづれをよしと定めかぬる也。

いたくうちなげく

〔釈〕とにかくに、たらひたる女の有がたきを歎息したる也。

今はただ品にもよらし云々

〔新〕かくあふさきるさなるのみなれば、今は品高きにも形よきにもよりがたし、とさとり得たる也。是一部の大意なるべし。

〔釈〕此説のごとく、此段品定のむねとある所にて、つひに物静にまめやかなる人をたのみ所にせんより外に、すべなきよしをいへり。心をつくべし。

なきおほ^{*}やけばらだたく、心ひとつに思ひあまる事などおほかる^{*}

を、^{*}なにかはきかせん、と思へば、うちそむかれて、人しれぬ思^{*}

ひいでわらひもせられ、あはれともうちひとりごたるるに、^{*}なに事^{*}

ぞなど、⁺あわつかにさしあふぎゐたらんは、^{*}いかがはくちをしから^{*}

ぬ^{*}ただひたふるにこめきて、⁺やはらかならん人を、^{*}とかくひきつ^{*}

くろひてはなどか見ざらん。⁺心も^{*}なくとも、^{*}なほし所あるこ^{*}こち^{*}

すべし。^{*}げにさしむかひてみむほどは、^{*}さてもらうたきかたに、^{*}つ^{*}

みゆるし見るべきを、^{*}たちはなれては、^{*}さるべき事を^{*}もいひやり、^{*}

を^{*}りふしにしいでんわざの、あだことにも、^{*}まめことにも、^{*}わが心^{*}

と思ひうる事なく、^{*}ふかきいたりなからんは、^{*}いとくちをし^{*}く、^{*}た^{*}

のもしげ^{*}なきとがや、なほくるしからむ○つねはすこしそば^{*}そばし^{*}

く心づき^{*}なき人の、をりふしにつけて、^{*}いでばえするやうもあり^{*}か^{*}

し^{*}など、⁺くま⁺なきものいひもさだめかねて、^{*}いたくうちなげく^{*}い^{*}

まは^{*}ただしなにもよらし。か^{*}たちをば^{*}さらにもい^{*}はじ。いとくち^{*}を^{*}

よるべ

〔玉〕通ひすむ女を云。注に「本妻なり」といへるはたがへり。次に「つひのたのみ所」とへいるぞ、本妻なる。

あまりのゆゑよし

〔釈〕「あまり」は体言なり。「ゆゑよし」は、小櫛に、「何わざにもあれ、ひと才とるべきふしあるを、『ゆゑ有』とも『よし有』ともいふ也」とあるがごとし。

よろこびに思ひ

〔拾〕俗にいふ、ひろひもの心なり。

おくれたるかたあらんをも云々

〔釈〕「おくれたる」は、たらはぬ也。しかたらはぬ方ありとも、しひて求め加へじ、と也。

うしろやすくのときき所

〔玉〕これ即上の「物まめやかに、しづかなる心のおもむき」といへるもの也。

〔釈〕「つよくは」とは、たしかにてたぢるかぬ也。

うはべのなさけは

〔釈〕「うはべ」は表方の意也。「なさけ」は風流才芸の類をいふなるべし。上向の風流などは次々に見ききならひて、自然ともてつくるやうになるべきわざ也、といふ意也。

〔評〕この段、新釈にいはれたるがごとく、品定の初に、「女の、これはしもと、難つくまじきはかたくも有かな」といひ出たる結びたるにて、世にあらゆる女の難を論じて、つひに此まめやかにうしろやすきにとどめたる、いとめでたし。人のおもふきは昔今たがふことなく、あながちにたかき賤しきにも拘らず、女を撰ぶにはかくのごとくならんより外にせんかたなき事を、よくよく思ひ弁へて、作者の筆のいみじきを味ふべし。さて次の段には、名聞がましくしふねき女の心がろきを一種拳て、ねぢけがましきをいましめられたり。なほ下にいふべし。

うへはつれなくみさをつくり云々

〔釈〕「つれなく」は、何げなくもてなす也。

〔玉〕みさをもてつけて、ともいへり。くづれぬやうに、心をつけてもつくるなり。

すこきことの

〔釈〕執念の物すこきまでに聞ゆることのは也。ことのはといへるも、歌

物語よみしをききて

〔釈〕むかし物語のふみに、かかる女のことを記したるを女房のよみしを、馬頭のききて也。

なるべし。

心ざしふからん男をおきて云々

〔玉〕男のつねづねの深き心ざしをば、しらぬもののやうに、さしあたりて当座に、少々つらき事有とても也。

ころをもみんなするほどに

〔釈〕いかにするにかと、男の心を見んとするほどに也。

ながきよの物思ひになる

〔玉〕さやうの事によりて、つひに離別することもあるをいへり。心ふかしやなど

〔新〕愛着を離れて菩提心に趣き給ふべき也、などほむるにつけて、情のすすみて尼になりぬべし、となり。

〔玉〕はじめ心ひとつに思ひあまれるすぢの、いよいよすすむ也。

ひたすらにうしとも云々

〔玉〕上に「心をも見んとするほどに」と有しごとくにて、此女、ひたすらに男をうしと思ひはなれたるにはあらざる也。

しく、⁺ねぢけがましきおぼえだになくば、ただひとへにものまめや
ンニ ^{ネチクレ}サヘ ^信

かに、しづかなる心のおもふきならんよるべをぞ、つひのたのみ所
実 静 趣 ^{ヨリドコロ}一生ノ ^{カカリドコロ}

には、思ひおくべかりける。^{*}あまりの⁺ゆゑよし心ばせ、うちそへた
置 ^{△ノウヘニ余}才能ナド也 ^{キドリ}添

らんをば、よろこびに思ひ、^{*}すこし^{*}おくれたるかたあらんをも、あ
少 後 ^シ

ながちにもとめくはへじ。^{*}うしろやすくのどけき所だにつよくば、
ヒテムリニ ^求加 ^{キツカヒゲナク}オダヤカナ ^強

^{*}うはべのなさけは、おのづからもてつけつべきわざをや『えんにも
表 方 自 然 ^{モチコミ}ヒ

のはぢして、^{*}うらみいふべき事をも、見しらぬさまにしのびて、う
トオメ ^玉うらみは用によむべし ^{シラヌカホ}コラヘ ^{ウハ}

へはつれなく⁺みさをづくり、心ひとつに思ひあまる時は、いはんか
^{ムキ}ナンベンモナク ^{ハイキ}余

たなく^{*}すこきことの、あはれなる歌をよみおき、しのばるべきか
^{オソロシイ}哀

たみをとどめて、ふかき山ざと、よばなれたる海づらなどに、はひ
^也ノコシオキ ^{セケンドホキ}ベリ ^{ヒソカニ}

かくれぬかし。^{*}わらはに侍しとき、女房などの物がたりよみしをき
^隠童 ^デ女中 ^{△フミ}読

きて、いとあはれにかなしく、心ふかき事かな、と涙をさへなんお
^哀悲 ^{△オモヒテ}マデ

とし侍し。^{*}今おもふには、いとかるがるしくことさらびたることな
^落軽 ^{ワザトガマシイ}

り。^{*}心ざしふからんをとこをおきて、みるめのまへに、つらきこ
^{△我ニ}男 ^置眼 ^前ツレナキ

とありとも、人の心を見しらぬやうに、にげかくれて人をまどは
^{男也}惑

し、^{*}心をもみんなするほどに、^{*}ながき世の物思ひになる、いとあぢ
^{△男ノ}ウチ ^{生涯}ノ ^{ムヤ}

きなき事なり。^{*}心ふかしやなどほめたてられて、あはれすすみぬれ
^{クラシイ}△八二貫 ^進

ば、やがてあまになりぬかし。おもひたつほどは、いと心すめるや
^{スゲニ}尼 ^{△通世ヲ}トキ ^澄

うにて、よにかへりみすべくも思へらず。^{*}いであなかなし。かくは
^世顧 ^湖あひ知れる人來て此女にいふ詞也 ^{コノヤウニモ}

たおぼしなりにけるよ、などやうに、あひしれる人きとぶらひ、ひ
^{マタ}相 識 ^来訪 ^{*}

ふるこたち

拾御等といふ意なるべし云々。

玉 古き女房ども也云々。

ひたひがみをかきさぐりて

玉 あたら髪をそぎすてたる事よ、と後悔するさま也。

うちひそみぬかし

新 是は泣ときの口つきをいふ云々。

釈 むかしより嘸字をよめる意にて、俗に「ぶり口する」といふにあたり。

評 人ぎきにかかづらひて、あはれしりがほする女の心がろさの後悔の
さま見るがごとし。此類今世にもをりをりあり。

にこりにしめるほどよりも云々

潮 俗にて濁世にありし時より、かく出家ののち心のなまうかびなるは、
かへりて悪道にまよふべき事と也。

釈 うかばんとて尼になりたるものの、悔しき心ありてなまなまる故
に「なまうかび」といへる也。「あしき道」は、いはゆる悪趣の事也。
たえぬすぐせあさからで云々

釈 「すぐせ」は、例の宿因縁也。絶まじき宿因ありて、尼にならぬう
ちにたづね出してとりかへしたらんにも也。

やがてその思ひ出云々

釈 「やがて」は「うらめしき」へかかる意也。「その思ひ出」は、小櫛
に、「さきにそむきて家を出し事を思ひ出るをいふ也」とあるがごとし。
尼になさでたづね取たりとも、一たび家を出し事を思ひ出て、やがてう
らめしきふしあるべし、と也。

われも人も云々

新 其男も女も也。

祇注 さきのごとくあひそひてありども、さやうならん女はうしろめた
くて、心おかれぬ事はあるまじの心也。

釈 「家も人も」は、新釈のごとし。祇注に、女どのみいへるはたがへれど、
其外はよろし。さてこの一句、語の脈はなれて聞ゆるは、脱文など有な
るべし。猶考ふべし。

又なめのめにつろふかたあらん人を

玉 この「なめのめ」は、たしかにうつろふにはあらで、ただいささかう
つろふ也。

いとほしく思はば

玉 たみ詞に、女の男をいとほしく思はば、の意にいへるは、たがへり。
男の心に女をいとほしく思はば也。

さるかたのよすが

玉 見そめし心ざしを、いとほしく思ふかたのよすがなり。「よすが」と
は、通ひすむ所をいふ。すべて「よるべ」又「よすが」など有を本妻と
心得たるは、たがへり。必しも本妻にはかぎらず。

ゑんずへき事をは云々うらむべからんふしをも云々

玉 こは同じ事の二重なりて聞ゆるにつきて、つらつら思ふに、「ゑん
ずる」は心にうらめしく思ふこと、「うらむべからんふし」は恨みをい
ふべきふしにして、心に思ふ方と、言にいふ方とを、二つに分ていへる
也云々。

釈 「ほのめかし」は、ほのかにいひかすむること、「かすめなす」は、
かすかにほのめかす事也。

それにつけてあはれもまさりぬべし

釈 ほのめかしがすむるいひざまにつけて、初よりもあはれまさるべし、
となり。「まさる」といふに心をつくべし。

みる人からをさまりもすべし

玉 そへる女の、あへしらひがらによりてなり。「をさまる」は、他へう
つるところのやむをいふ。

むげに打ゆるべ見はなちたるも

拾 拾遺恋五に、「うらみぬもうたがはしくぞおもほゆるたのむ心のなき
かとおもへば。この歌のこころ見えねど、下の心はかよふべし。

たすらにうしとも思ひはなれぬをとこ聞つけて、涙おとせば、つか
一 向 イヤナ 離

ふ人、ふるごだちなど、君の御心はあはれなりける物を、あたら御
古 御 等 玉 君とは此女の男をいへる也 △ハヤマリ迄 可惜

身を、などいふに、みづからひたひがみをかきさぐりて、あへなく
△カク尼ニナリ 自 額 髪 探 ハリアヒナク

心ぼければ、うちひそみぬかし。しのぶれど涙こぼれぬれば、を
* ◆ ナキガホスル コラヘテモ アハレ

りをりごとにえねんじえず、くやしきこともおほかめるに、ほとけ
ナルヲリフゴトニ也 シンバウシ 得 悔 仏

もなかなかこころぎたなし、と見給ひつべし。にこりにしめるほど
カ ヘツテ キノ キタ ナイ 濁 染 トキ

よりも、なまうかびにては、かへりてあしきみちにもただよひぬべ
半 ウ カ ミ 悪 趣 譚 識

くぞおぼゆる。たえぬすぐせあさからで、あまにもなさで、たづね
△タトヒ又 浅 尼

とりたらんも、やがてそのおもひ出、うらめしきふしあらざらんや。
* ◆ スケニ

あしくもよくもあひそひて、とあらんをりも、かからんきざみをも、
相 嗣 刻

見すぐしたらん中こそ、ちぎりふかくあはれならめ、われも人もう
宿 縁 キ

しろめたく心おかれじやは。又なめのめにつろふかたあらん人をう
ツカ ハシク キガオカレマイモノカ ヨコミチヘ△心ノ

らみて、けしきばみそむかんはた、をこがましかりなん。心はうつ
キ モチヲミセ 背 モマタ アホウラシ

ろふかたありとも、みそめしこころざしいとほしくおもはば、さる
△ヲ アヒハジメタ

かたのよすがに思ひてもありぬべきに、さやうならんたちろきに、
タヨリドコロ ドサメキ

たえぬべきわざなり◎すべてよろづの事なだらかに、ゑんずべき事
絶 惣 オダヤカ

をば、みしれるさまにほのめかし、うらむべからんふしをも、にく
見 知 カハ

からずかすめなさば、それにつけて、あはれもまさりぬべし。おほ
ユラシウ ソノサマニツケテ也

くはわが心も、見る人からをさまりもすべし。あまりむげにうちゆ
男ノ我也 女ユエニ 治 △サレバトテ 一向ニ

るべ見はなちたるも、心やすくらうたきやうなれど、おのづからか
放 カハユラシイ 自 然 ソ

つなぐぬ舟の

〔河〕文選鵬鳥賦云、泛乎若不繫之舟。

〔玉〕河海に文選を引れたるは、本也。然れども、ここは白氏文集の偶吟詩に、「無情水任方円器」、不繫舟随去住風」といへるをとりて書るなり。さて「げにあやなし」は、此本文にかかりていへり。

さは侍らぬかといへば中将うなづく

〔評〕当夜のさまをあらはしたる第四の段なり。さて「すべてよろづの事」といふよりこゝまでは、女の男に打そふ心おきてをいへり。上に「いとくちをしく、ねちけがましきおぼえだになくば云々」といへるは、男の用意なるに對へて、よくよく味ふべし。先づ男のよろづ見過すべきよしをいひて、次に女のあへしらひざまをいへり。文の法ついで乱れずして、いひしらずめでたし。次は中将のあへしらひの語として、たのもしげなき女をいましむるなり。

さしあたりて云々

〔釈〕時にあたりて、我心にをかしともあはれともおもはん人のあだなる心あらんは、大事なるべし、と也。「たのもしげなきうたがひ」とは、小櫛に「女のあだにして、外へ心を分るやうのうたがはしき事あるをいふ」といはれたるがごとし。「大事」は、俗にいふに同じく、大せつなるこゝろなり。

わが心あやまちなくて

〔湖〕男のわきにうつろふ心なくば、との心なり。

〔釈〕この説よろし。これを女の心と見たる注はわるし。たのもしげなきうたがひあらん女をも、男の心あやまちなくて見しのびつつ過ぎば、さるあだなる心をもおのづからにさし直しても、なか見ざらんとおぼえたれど、さはあらじ、といふ意也。心あやまちとつづけてよむべし。体言なり。男の心に、女に對してあやまちしたりと思ふやうなる事をいへる也。「さしなほして」とは、女の、男の心にはぢて、おのづからあだなるふるまひを直すをいふ。此段を、新釈に、頭中将の夕顔の事をしたに思ひていはれたるさまにとかれたるは、いかがあらん。猶考ふべし。それさしもあらじ

〔釈〕「それ」とは、上の「わが心あやまちなくて云々」をさしていへる也。「さしもあらじ」は、然もあらじにて、「し」は助辞也。

ともかくもたがふべきふしあらんを

〔弄〕畢竟の理なり。「ともかくも」といへるより、惣じての批判と見るべき也。

〔孟〕ともかくも、女の、男のたがひたる事あるを腹たち怨ぜずして、見忍ぶをいふなり。葵上の心むけ、これにかなひ侍り。

〔湖〕前の「とあらんをりも、かからんきざみをも、見すぐしたらん中こそ」といひ、「すべてよろづの事なだらかに」などといひし詞に答へたる詞と見るべし。

わがいもうとのひめ君は云々

〔釈〕「このさだめ」とは、「ともかくも云々」より下の事をさしていへるなるべし。

君の打ねふりて云々

〔釈〕このさだめ、葵上のさまにかなへれば、源氏君にきかせ奉らんと思ふに、打ねふりて語を交給はぬを、中将のさうざうしく心やましく思ひ給ふよし也。「さうざうしく」は、ものさびしき意、「心やましく」は、起て聞給へかしとやうに、心のいらるる意也。このところ、又当夜のさまをあらはしたる第五段なり。

ものさだめのはかせになりて

〔新〕「はかせ」は博士にて、博達の学士なり。何の道々にも師匠なるをいへど、こゝは學問の博士が學生の論を判り定むるがごとく馬頭が定むるを、をかしく書て興とするなり。

ひびらぎゐたり

〔玉〕俗言に、口をたたきゐたり、といふこと也。紫式部日記に、「よろづつれづれなる人の、まぎるる事なきまきに、ふるき反古ひきさがし、おこなひがちに、くちひびらかし、ずずの音たかきなど、いとこゝろづきなく見ゆるわざなり」とあるも、「口ひびらかし」は、経よみ念仏など、くちやめず、いひつづくるをいへり云々。

このことわり聞はてんと云々

〔釈〕「このことわり」とは、上にしななあげつらへる女のしなの理をいふ。「あへしらひ」は、孟津に「会尺也」と注せられたるがごとし。

よろづのことによそへておほせ
〔評〕こゝより、あだなる女と実なる女とのけちめを、物によそへて説出せり。さてそれはただ一事にてもあるべきを、同じたとへを三ッまで挙て、つひにただ実なるかたの一すぢにむすびよせられたる筆づかひ、例のいといみじといふべし。さるは、この実なることの一事なん、品定のむねとあることなればなりける。

そのものとあともさだまらぬは

〔釈〕たしかにいか様と、其形の定まりなき器物は、なり。

ろきかたにぞおぼえ侍るかし。^{*}つなぐぬ舟のうきたるためしも、げ^{*}マツナ不繫浮男心定マラスタトヘ也ナル

にあやなし。^{*}さは侍らぬか、といへば中将うなづく^{*}さしあたりて、^{*}ホドワケガナイサウハゴザラヌカ^{*}中將詞

をかしともあはれとも、心にいらむ^{*}人の、たのもしげなきうたがひ^{*}余一本いりたらん女アテニナラヌ

あらんこそ、大事なるべけれ。^{*}我^{*}こころあやまちなくて見すぐさば、^{*}男也△ウタガハシキヲモ

さしなほしてもなどか見ざらん、とおぼえたれど、^{*}それさしもあら^{*}直ソレモサウハアルマ

じ。^{*}ともかくもたがふべきふしあらんを、^{*}のどやかにみしのばんよ^{*}イ違ユル見テコラヘル

りほかに、ます事あるまじかりけり、といひて、わがいもうとの姫^{*}外我妹葵上

君は、このさだめになかなひ給へりとおもへば、^{*}君のうちねふりてこ^{*}源氏眠

とばまぜ給はぬを、さうざうしく心やましと思ふ。^{*}馬のかみものさ^{*}語交モノサビシクモドカシ^{*}批

だめのはかせになりて、^{*}ひびらぎゐたり。^{*}中将はこのことわり聞は^{*}博士万^{*}理竟

てん、と心にいれて⁺あへしらひみ給へり^{*}よろづのことによそへて^{*}アシラヒ^{*}馬頭詞^{*}比

おぼせ。^{*}木のみちのたくみの、よろづの物を心にまかせてつくりい^{*}工匠作

だすも、りんじのもてあそびものの、^{*}その物とあともさだまらぬは、^{*}臨時蔽物

そばつきざればみ

〔玉〕「そばつき」は、傍の形なり。「つき」は、顔つき手つきなどの「つき」也。「さればみ」は、俗に「しやれたる」といふこと也云々。これはうはべの風流めき、なさけだちて、実なき女のとへなり。

げにかうもしつべかりけり

〔釈〕そばつきざればみたる物は、打見るに興ありて、いかにもかくすべき事なりとやうに、一たびは感ぜらるる也。〔げに〕は、見る人の感じうべなへる語なり。「時につけつつさまをかへて」とは、其時々の流行にしたがひて、いかやうにも作りかふるをいふ。

大事として

〔湖〕是より定りたる格式ある道具のうへをいふなり。

うるはしき人のでうどの

〔玉〕「うるはしき」は、「でうど」へかりて、「人」へはかからず。人のうるはしきでうど、といふ事也。たみ詞に、「うるはしき人」と見て、「善人也」といへるは、たがへり云々。ただこれは実なる女のとへなるをや。

〔釈〕案に、小櫛の説「わたりいはれたる事ながら、なほこれは、うるはしき人、にて、貴人をさしたるにやあらん。」「さだまれるやうある物」といへるは、むかしより定まりたる故実のやうある物、といふ意と聞ゆれば、ただに、人の、とのみいひては、いささかたらはぬこちす。

さまことに見えわかれ侍る

〔祇〕うるはしき人のでうどのかざりをば、人の家あるじといはるべき女のかたにたとへいふなり。

〔釈〕此段のすべての意は、臨時の断物などは、ざればみたるもいまめかしくてをかしきもあり、されど大事として、故実ある貴人の調度のかざりとする物などを難なく作り出することは、まことの手先ならでは、其さま殊にきはやかに見え分るまじ、といふ意を、女のうへにたとへて、をりをりかよふ女などは、ざればみあだめきたるも、さるかたにをかしかるべけれど、たのみとしてうしろみの事とせん人は、実ならではかなふまじきよしをいへる也。

ゑどころ

〔河〕西宮抄云、画所在式乾門内東腋御書所南、有別当五位藏人預云。

すみがきにえらばれて

〔玉〕彩色をする事に対して、ただ絵をかくことをいへる名目也。古は、絵をかきて、彩色をばべちに他人にせさする事有し故に、二ツに分て、墨がきつくり絵といへり。つくりゑとは、彩色するをいふ也。墨絵彩色絵といふことにはあらず云々。

〔釈〕「えらばれて」の下に、かくにといふことをくはへて心得べし。小櫛には、「つきつぎに」の下にいれて心得べきよしはれたれど、「つきつぎに」はまさりおとる次第をさしていへる語なれば、意いささかたがふべし。

ほうらいの山

〔余〕列子湯問篇曰、渤海之東、不知幾億万里、有大壑焉云々。其中有五山焉。一曰、岱輿、二曰、員嶠、三曰、方壺、四曰、瀛洲、五曰、蓬萊。其山高下周旋三万里、其頂平处九千里、山之中間相去七万里、以為隣居云々。下略。

あらうみのいかれるいを云々

〔余〕鯨鯢、鰐などをいへるなるべし。「はげしきけだもの」は猛獸にて、虎豹獅子の類をいへるなるべし。

おにのかほ

〔細〕後漢書張衡伝云、画工惡図犬馬、而好作鬼魅。誠以実事難形而虚偽不窮也。〔新〕余韓子云、客有為齊王画者。齊王問曰、画孰最難者。曰、犬馬難。孰易者。曰、鬼魅最易。夫犬馬人所知也。旦暮聲於前、不可類之故難。鬼神無形者、不聲於前。故易之也。

すくよかならぬ山のけしき

〔玉〕「すくよかならぬ」は嶮岨ならぬ也、といへる注、よろし云々。

よばなれてたたまなし

〔湖〕世をはなれたる心なり。

〔釈〕山は幾重にも畳むがごとくかく物なる故に、「畳みなし」といへる也。

けちかきまがきのうち

〔湖〕氣近き也。

〔細〕前栽をいふ也。

ころしらひ

〔拾〕有意。日本紀第廿八天武紀上

〔釈〕「しらひ」は、「あへしらひ」などの「しらひ」と同じき辞也。俗に、心もちといふ意也。体言なり。「おきて」も体言なり。

そばつきざればみたるも、げにかうもしつべかりけり、と時につけ

そばつきざればみたるも、げにかうもしつべかりけり、と時につけ

つつさまをかへて、今めかしきにめうつりて、をかしきもあり。大

つつさまをかへて、今めかしきにめうつりて、をかしきもあり。大

事として、まことにうるはしき人の、でうどのかざりとする、さだ

まれるやうある物を、なんなくしづることなん、なほまことのも

のの上手は、さまことに見えわかれ侍る◎又ゑどころに上ずおほか

れど、すみがきにえらばれて、つきつぎに、さらにおとりまさるけ

ぢめ、ふとしも見えわかれず。かかれど、人の見およばぬほうらい

の山、あら海のいかれるいをのすがた、から国のはげしきけだもの

のかたち、めに見えぬおにのかほなどの、おどろおどろしくつくり

たるものは、心にまかせて、ひとときは人のめをおどろかして、じち

にはにぎらめど、さてありぬべし。よのつねの山のたたづまひ、水

のながれ、めにちかき、人のいへぬありさま、げにと見え、なつか

しくやはらびたるかたなどを、しづかにかきまぜて、すくよかなら

ぬ山のけしき、こぶかくよばなれてたたまなし。けぢかきまがきの

うちをば、そのころしらひおきてなどをなん、上ずはいといきほ

玉此をもし下に受たる言なくて穩ならず

勢

ナ

ナルホド

アイラ

驚

驚

驚

驚

驚

驚

驚

驚

驚

驚

驚

驚

驚

驚

驚

驚

驚

驚

驚

驚

驚

驚

驚

驚

驚

驚

驚

驚

驚

驚

驚

驚

驚

驚

驚

驚

驚

驚

驚

驚

驚

驚

驚

驚

驚

驚

驚

驚

驚

驚

わる物はおよばぬ所おほかめる

〔釈〕このくだりも又、人の目を驚かす方をあだなる女にたとへ、「よのつねの山の云々、けぢかきまがきの内」などを実なる女にたとへていへるなり。

てをかきたるにも云々

〔釈〕ここより又、書の事によそへていふ也。字かくことを手といふは、今もしかり。「ふかき事なき」は、深く達らぬをいふ。

ここかしこのてんながに
ここかしこ点を長くなどして、こばへまぎらはすをいふ。「はしりかき」のか、すむべし。

まことのすぢをこまやかに

〔細〕唐穆宗問筆法柳公權。曰、心正則筆正、筆正乃可方矣、といへり。〔釈〕「まことのすぢ」とは、筆法の事也。

うはべの筆きえてみゆれど

〔釈〕「うはべの筆」とは、筆勢のことなるべし。法のごとくこまやかに書たるは筆勢なきやうなるを、「消て」といへる也。

今一たびとりならべて

〔釈〕「今一度」とは、立かへりて今一度よくよく見る也。「とりならべて」は、けしきばめるとまことのすぢなるどくらべて也。

猶じちになんよりける

〔玉〕これは上件の三つのたとへを、すべていふ也。三のたとへ皆同じ意にて、女の、けしきばめるうはべのなさけど、実なるのとたとへ也云々。

〔評〕此語、上件三ツの事をつづめたる眼目の詞なるはいふもさらにて、すべては品定の眼目の詞なることをよく心得てよむべし。

はかなき事だにかくこそ侍れ云々

〔釈〕「はかなき事」は、上件三ツの事を云。ここに至りて、つひに実によるべきよしをことわりあかしたる也。

そのはじめの事

〔釈〕馬頭がそのはじめ有し事也。

君もめさまし給ふ

〔湖〕前に「君の打眠りて」とありし首尾也。

〔釈〕此所、当夜の人人のさまをあらはしたる第六の段なり。源氏君のねふりてさめ給ひ、中将のしんじてあへしらひ給ふさまなど、其人のすが

ひとことに、^{*}わるものは^{*}およばぬところ^ンおほかめる^{*}◎てをかきたるに^書

も、^深ふかき事はなくて、ここかしこのてん^点ながに^長はしり^走かき、^書そこ

はかとなくけしきばめるは、うち見るにかどかどしくけしきだちた^才

イフコトナク キドリメカシタルハ

キガキキキイタフウナ

れど、^{*}なほまことのすぢを、こまやかにかきえたるは、^{*}うはべの筆^{表皮}

きえてみゆれど、^{*}今ひとたびとりならべて見れば、^並猶[◆]じちになんよ^{△心方}

勢ナキ方コトク

りける◎^{*}はかなき事だにかくこそ侍れ。まして人の心の、^時ときにあ

チヨツトシタ

サヘカヤウニ

たりてけしきばめらむ、みるめのなさけをば、えたのむまじく思ひ

キドリメカシタ

メノサキ

得憑

給へ侍り◎^{*}そのはじめの事、すきずきしくともまうし侍らん、とて

当初

好色ガマシク

ちかくぬよれば、^{*}君もめさまし給ふ。^{*}中将いみじくしんじて、^{*}つら[◆]

近居寄

源氏

甚

煩

づ氣をつきてむかひぬ給へり。^{*}のりの師の、世のことわりとききか

杖突

向居

法

道理

説聞

せん所のここちするも、かつはをかしけれど、かかるついでは、お

のおのむつごとも、え忍びとどめずなんありける』^{*}はやうまいいと

イメイ睦語

コラヘ止

カクシ

下らうに侍しとき、あはれと思ふ人侍りき。^{*}聞えさせつるやうに、

脇

可笑

女

かたちなどいとまほにも侍らざりしかば、わかきほどのすき心ちに

容貌

マッスク

若

シランウハキ

は、この人を^{*}とまりにとも思ひとどめ侍らず、よるべとは思ひなが

イメイ睦語

コラヘ止

カクシ

んいたくし侍りしかば、心づきなく、いとかからで⁺おいらかならま

脇

可笑

女

しかばと思ひつつ、あまりいとゆるしなくうたがひ侍るしもうるさ

容貌

マッスク

若

シランウハキ

くて、^{*}かく数ならぬ身を見もはなたで、^{*}などかくしもおもふらん、

イメイ睦語

コラヘ止

カクシ

ら、さうざうしくて、とかくまぎれありき侍りしを、物^怨系^妬んじをな

イメイ睦語

マッスク

若

シランウハキ

は、この人を^{*}とまりにとも思ひとどめ侍らず、よるべとは思ひなが

イメイ睦語

マッスク

若

シランウハキ

んいたくし侍りしかば、心づきなく、いとかからで⁺おいらかならま

イメイ睦語

マッスク

若

シランウハキ

しかばと思ひつつ、あまりいとゆるしなくうたがひ侍るしもうるさ

イメイ睦語

マッスク

若

シランウハキ

くて、^{*}かく数ならぬ身を見もはなたで、^{*}などかくしもおもふらん、

イメイ睦語

マッスク

若

シランウハキ

は、この人を^{*}とまりにとも思ひとどめ侍らず、よるべとは思ひなが

イメイ睦語

マッスク

若

シランウハキ

思ひいたらざりける事にも

〔湖〕わが心のいたらぬ事にも也。

なきてをいだし

〔玉〕おのがえせぬ及ばぬ事までを、さは思はれじと、しひてする意なり。すめるかたと

〔弄〕さし過たる心也。

〔釈〕進める方にて、すなはちなき手を出して思ひはげむを進めるといへるなり。「すくめる」とある本はわろし。

とかくになびきてなよびゆき

〔弄〕此女の馬頭になびく也。

〔釈〕「なびき」は、従ふ意なり。「なよびゆき」は、もの和らかなりゆくをいふ。

此人にみやうとまれんと

〔釈〕「此人」は馬頭をいふ。女の方を主としていふ所なる故に、「此人」とはいへる也。女の、馬頭に見疎まれんかと思ひて、かたちをつくるふよし也。

うとき人に見えは云々

〔釈〕「うとき人」は、他人をいふ。わろきかたちを他人に見られなば、馬頭がおもてぶせにやおもはん、女のはばかりてかくれなどする意也。「おもてぶせ」は、はぢたる貌にて、面目なしといふ意なり。

〔新〕白氏文集に、外人不見見応に笑。

みさをもてつけて

〔玉〕俗言に、たしなむといふ意にて、容貌の事也。

〔釈〕この前後に脱文あるべくおぼゆ。さらでは女と馬頭とのわいためなし。「はばかりはぢて」とあるは、女也。「みなるまま」にといふは、馬頭の女を見馴る也。

心もけしうはあらず侍りしかど

〔釈〕見なるままに、心も異しうはあらずしかど、嫉妬ひとつは心になはざりしと也。「にくきかた」とは、嫉妬のことをさしていへる也。心をさめす

〔湖〕馬頭、心おちつかざりし也。

〔玉〕補上のを「さめらるる」に応ず。

〔新〕にくしと思ふ心の治めがたき也。

〔釈〕案に、これはもしくは女の心にえをさめざりし事にや。馬頭の事としては、「をさめす」といふ詞の自他たがへるやう也。されど、暫く諸注にしたがふ。猶考ふべし。

このかたもすこしよろしくもなり

〔玉〕此「かた」は嫉妬の事也。「よろしくなる」は、うすくなのめになる也。さて、「なり」の下へてもじを加へて心得べし。

さがなさもやめんと思ひて

〔玉〕口さがなきにて、俗言に、口やかましきといふこと也。さて此かたも、「さがなさも」といへるは、二つの如く聞ゆめれど、然らず。さがなきは、嫉妬してさがなきなれば、一つ事也。嫉妬もなめになりて、さがなきのやむ也。さてやめむと思ひては、やむべくせんと思ひて也。

まことにうしなども思ひて

〔玉〕女をこらさんために、つくりてする事なるを、実にうしと思ふごとく見せての意なり。

たえぬべきけしきならば

〔玉〕こなたより、絶ぬべきけしきに見せたらば也。

かくおぞましくは

〔雅〕女心のつよく、手あらき意なり。

いみじき契ふかくとも

〔新〕「いみじき」といひ「ふかく」と有からは、宿世の契ありともといふ意也。只相契れるをいはば、「ふかき契は有とも」などいふべし。

かぎりと思はば云々

〔釈〕「これを限に絶んとおもはば、すぢなき嫉妬をもせよ。ゆく末長く見えんと思はば、つれなき事ありとも、たへ忍びて、なのめに思ひなして、嫉妬をやめよ。さらばあはれと思ふべき」と也。

人なみなみにもなり

〔祇〕注官位もあがり、人々しくもならば、いよいよあひ思べきと、女の心をとる儀也。

〔釈〕「おとなびん」は、官位すすみて大人ぶるをいふ。

と心ぐるしきをりをりも侍りて、じねんに心をさめらるるやうにな
キノドクナ

ん侍りし。この女のあるやう、もとより思ひいたらざりける事にも、
アリサマ 元 来

いかでこの人のためには、となきてをいだし、おくれたるすぢの心
ドウゾ 男也 無 手 不得 手ナルコト

をも、なほくちをしくは見えじ、と思ひはげみつつ、とにかくにつ
イヒガヒナク ミラレマイ 勵

けて、物まめやかにうしろみ、つゆにても心にたがふことはなくも
実 イヒガヒナク ミチン 進 方

がな、とおもへりしほどに、すすめるかたと思ひしかど、とかくに
レカシ 無 手 進 方

なびききてなよびゆき、見にくきかたちをも、この人に見やうとま
シタガヒ来テ ヤハラギ 醜 容貌 馬頭 疎

れん、とわりなく思ひつくるひ、うとき人にみえは、おもてぶせに
ムシャウニ 馬頭方

やおもはん、とはばかりはぢて、みさをもてつけて、見なるま
イ見えん 憚 愧 馴

まに、心もけしうはあらず侍りしかど、ただこのにくきかたひとつ
イ見えん 憚 愧 馴

なん、心をさめず侍りし。そのかみ思ひ侍りしやう、かうあながち
アヤシウ ワルク 嫉妬ノ方也

にしたがひおぢたる人なめり、いかでこるばかりのわざして、おど
△我ニ 畏 ソノセツ 如此ヤミクモ

して、このかたもすこしよろしくもなり、さがなさもやめんと思ひ
△我ニ 畏 ソノセツ 如此ヤミクモ

て、まことにうしなども思ひて、たえぬべきけしきならば、かばか
△我ニ 畏 ソノセツ 如此ヤミクモ

り我にしたがふ心ならば、思ひこりなんと思ひ給へて、ことさらに
△我ニ 畏 ソノセツ 如此ヤミクモ

なさけなくつれなきさまを見せて、れのはらだちゑんずるに、か
△我ニ 畏 ソノセツ 如此ヤミクモ

くおぞましくは、いみじき契ふかくとも、たえてまた見じ。かぎり
△我ニ 畏 ソノセツ 如此ヤミクモ

とおもはば、かくわりなき物うたがひはせよ。ゆくさきながく見え
△我ニ 畏 ソノセツ 如此ヤミクモ

んと思はば、つらき事ありともねんじて、なのめに思ひなりて、か
△我ニ 畏 ソノセツ 如此ヤミクモ

かる心だにうせなば、いとあはれとなん思ふべき。人なみなみにも
△我ニ 畏 ソノセツ 如此ヤミクモ

三九

三九

又ならぶ人なく

〔**釈**〕外に又此女に比すべきほどの寵愛の人はなかるべし、と也。かしこくをしへたつるかなと

〔**湖**〕我がしこく女を教へたつるかなと思ひて也。

〔**釈**〕「たつる」は、仕立てる・いひ立てるなどの「たつる」に同じ。いひそし

〔**河**〕言殺也。いひこらす也。

〔**花**〕殺の字、詩にも愁殺惱殺など作れり。

〔**細**〕つよくいひすこす也。

〔**玉**〕宿木巻にも、「ひきたがへこころえぬまで好みそし給へる」。注に「いひすこす心也」とは、さも有ぬべし。殺字はあたらず。みだてなく

〔**祇注**〕官位の浅き事也。

人かすなるよもやと

〔**釈**〕官位進みて、人がましき時節もあらんかと待かたは、といふ也。のどかに思ひなされて

〔**玉**〕其方の事は、さのみ切にも思ひいれざるよし也。

あいなのみは

〔**玉**〕すべて此詞は、いかにあらんもしりがたき行末の事を、そのわきまへもなく頼みに思ふこと也。はらだたしくなりて

〔**玉**〕こりなにかねて思ひしに、たがへる故なり。

えをさめぬすちに

〔**釈**〕女も嫉妬の腹立はえこらへぬ条にて也。

およびひとつを

〔**新**〕和名抄、指由比、俗云於与比。さて五ツの指ごとに何の於与比といひ、ことに季指古於与比と有からは、惣ての指を「および」とはいふ也。まじらひを

〔**湖**〕朝廷の交なり。

はつかしめ給ふめるつかさ位

〔**玉**〕上に「見だてなく、ものげなきほどを云々」と女のいへるにあたりていふ也。

〔**釈**〕この段いささか聞にくし。』位』の下に字の脱たるにや。』いとどしく

は、官位の浅きに疵さへつけるを、いとどといへる也。「人めかん」は、人がましくならんの意なり。

世をそむきぬべき身なめり

〔**釈**〕通世すべき身といふ意也。

このおよびをかがめて

〔**釈**〕「この」は、今「かの」といふべき所也。かのくはれし指を、痛き故に屈めて歸りし、と戯れていへるなり。「退出」は、源氏君・頭中将に對ひていへる敬ひ詞にて、ただ歸ること也。

てををりて云々

〔**釈**〕湖月抄に、「五文字は、『およびをかがめて』といへる詞書にかけて見るべし」といへる、よろし。「手を折て」といふ意也。さて歌の意は、「指を折て、あひ見し年月の事をかぞへて見るに、ただこの物ねたみの一つや、君がうきふしなるべき」といひて、「其外の事は、うしろみの事も我に尽したる心も、皆まめやかなりし物を」とふくめたる意也。やはの辞は、ふくめたる所にて、結ぶ格にて「うきふし」の下にナルべきといふ辞をいひさしたる、其べきにて結び竟る意也。此歌の解、諸注ひがこと多し。別に論ずべし。

えうらみじなど

〔**釈**〕物ねたみの外にはさしてうきふしもなかりしかば、今別るとても、其方をばえうらみじ、と馬頭のいへる也。さる故に、女もさすがにかなしくなりて打なきたる也。この詞も諸注はいかが也。別にいふべし。

うきふしを云々

〔**釈**〕この「うきふし」は、上の歌に「君がうきふし」といへるにつきて、却て馬頭があだだしきをうきふしといへるなり。さてそのあだだしきうきふしを、ただ我心ひとつにおしこめてたへしのびきて、といへるにて、「かぞへ」といふは、上の歌に「かぞふれば」といふにあたりて、一つ二つどころへ来りし事をいへる也。下句は、しかこらへ来りたるに、この時にいたりて、つひに君に別るべき時節到来したるならん、と歎きたる也。「手を別る」といへるは、今俗の言にも手ヲキルなどいふがごとく、ただ別る事なるを、かの「手を折て」といふ句にあたりていへるなり。「こや」のやは、いひさしてふくめたるナランのむにて、結びたる格なり。この歌も、諸注はまぎらはし。

玉ノ説ニ依テ補

なり、すこしおとなびんにそへて、またならぶ人なく**〔な〕**あるべ

大人

比

きなど、かしこくをしへたつるかなと思ひ給へて、われだけくいひ

教立

カツニノリテ

そし侍るに、すこし打わらひて、よろづにみだてなく、ものげなき

△女

△女モ

モノモノシカラヌ

ほどを見すぐして、人かすなる世もやとまつかたは、のどかにおも

ユルシ

△アラシ

ユルヤカニ

ひなされて、心やましくもあらず、つらき心をしのびて、思ひなほ

シンキニモ

ツレナキ

△男ノ直

らんをりを見つげんと、年月をかさねんあいなのみは、いとくる

累

△女ハ

しくなんあるべければ、かたみにそむきぬべききざみになんある、

タガヒニ

ジセツ

とねたげにいふ時に、はらだたしくなりて、にくげなる事どもをい

ザンネンサウニ

△馬頭モ

ニクラシサウナ

ひはげまし侍るに、女もえをさめぬすちに、およびひとつをひき

勵

治

指

一箇引

よせて、くひて侍りしを、おどろおどろしくかこちて、かかるきず

寄

カミツキ

ギヤウサンニ

ウラミ

疵

さへつきぬれば、いよいよまじらひをすべきにもあらず。はづかし

マデ

△世間ノツキアヒ

辱

め給ふめるつかさくらゐ、いとどしく、なににつけてかは人めかん。

官

位

ヒトシホ

世をそむきぬべき身なめり、などいひおどして、さらばけふこそは

背

余イ

嚇

今日

かぎりなめれ、とこのおよびをかがめてまかでぬ。

*

屈

カヘリ

手ををりてあひ見しことをかぞふればこれひとつやは君がうきふ

*馬頭

△男ノ

し。えうらみじなどいひ侍れば、さすがにうちなきて、

△ナルベキ

△女モ

泣

うきふしを心ひとつにかぞへきてこや君がてをわかるべきをり。

*女

△ワガ

コラヘ

△ウシテ

此

手

別

△ナラン

いひしろひ

〔孟〕たがひにいふ心なり。

〔釈〕「しろひ」は辞にて、「ひきしろひ」「つきしろひ」などのしろひと同じく、互にする意也。

あくがれまかりありくに

〔玉〕方々の女のもとへかよひありく也。「あくがれ」とは、かのよるべと思へる女にはなれたる故也。

りんじの祭のでうがくに

〔花〕賀茂臨時祭調菜、十一月午日、於北陣構飯屋有儀式有饗膳勸盃等。

〔祇注〕「りんじのまつり」とは、北祭の事也。十一月酉なり。「調菜」は午の日なり。大内にてあるなり。

よふけていみじうみそれふる夜

〔評〕此二句、身にしてみてめでたし。調菜のかへりちふけて、みそれふるさま、絶たる女を思ひいでてとふべき心を起さんしたくみ、かへすがへすいみじといふべし。

なほ家ちと思はんかたは

〔釈〕「路」はただかろくそへたるにて、我家と思はん方は也。

またなかりけり

〔玉〕かの女をおきて外になり。

うちわたりのたびねも

〔釈〕「うち」は禁中也。禁中あたりにひとりねせんも不用らしき、との意也。「旅寝」は、まろねするがつねなればいへるのみ也。「すさまじ」は、物さびしく不用なる意也。

新「家路」といひ出せしより「旅ね」といへり。是文なり。

けしきばめるあたりは云々

〔玉〕こよひの寒きにけしきばみ、風流ならんあたりは打とけがたくて、そぞろはしく寒からんと也。

いかがおもへると云々

〔玉〕寒き夜は心やすくうちとけてぬる所こそよけれ、と思ひて、かの女の恋しく思はるるから、けしきも見がてらく也。

なまなわろくつめくはるれど

〔釈〕さまわろく恥たる体也。

などいひしろひ侍りしかど、まことに馬頭心はかはるべきことと思ひ給実

へずながら、ひごろふるまでせうオトツレこもつかはさず、あくがれまかドコトナクマド

りありくに、りんじ臨時祭のまつりのでうがくに、夜調菜ふけていみじうみぞヒアルク

れふる夜、これかれまかりあがる所にて、思ひめぐらせば、なほヤハリ

家ぢと思はんかたは、またなかりけり。内別二わたりのたびねもすさまアタリ

じかるべく、けしきキドリメカシタルばめるあたりはそぞろさむくや、と思ひ給へらソソソト

れしかば、いかがおもへる、とけしきも見がてら、雪をうちはらひカノ女カ

つつまかりて、なまなわろくつめくはるれど、さりとユキもこよひ、日ドウヤラザマワルウ爪食

ごろの恨はとけなん、と思ひ給へしに、火ほのかにかべにそむけ、孟女の家のさま也

なえたるヤハラカナ衣きぬ厚肥ども大のあつごえたる、おほいなる籠こに打かけて、ひき

〔余〕うつぼ物語・蔵びらきの巻に、「講師はころせよ」とのたまへば、えよまでつめくひもてさふらふ」※「えよまで」は「え読まで」。

細恥たる体なり。

〔玉〕かやうの「なま」は、俗言に「どうやら」といふころばへ也。

さりとこよひ云々

〔釈〕さありとも、今夜あひかたらはば、この日比の恨はとけなと思ひし也。

かべにそむけ

〔河〕耿々残灯背壁影 白氏文集

なえたるきぬあつごえどものあつこえたる

〔釈〕「なえたる」は和らかなる也。「あつこえ」は、旧注に「綿など入たるにや」、とあるがごとし。

大なるこに打かけて

〔新〕薫の料ならば、「大なるこ」といふべからず。是は、よるの物をあたためん料とみゆ。

ひきあくべき物のかたびら

〔河〕几帳の帷也。

〔新〕これは几帳のみをいふならで、かべしろ其外をもかぬるならん。

さればよと

〔細〕さればこそ我を思ひはすてぬよと也。

〔釈〕「ころおどり」は、心の中にて慢ずる意なり。

さうじみ

〔玉〕物語の例、其本人といふ意に用る称なり。「正身」の字は、古書にもをりを見えたり。

とまりて

けしきばめるせうこもせで

〔玉〕馬頭をうらみたるけしきを見せたるやうのせうこも也。

〔釈〕これは、上に「いはんかたなくす」きことのは、あはれる歌をよみおき云々」といへるにあたりていへる也。もの辞に心を付べし。

ひたやいもつに直隱直屋とある字のごとく、何のいへることもすることなく、その故といふこともしられず、ただひたすらにかくるるやうの意也。

もせで、いとひたや直屋ごもりになさけなかりしかば、あへなきこテモチフサタナち

る、とこたへ侍り。えん艶なるうたもよまず、けしき歌ばめるせう消そこミ

き女房ルどもばかりとまりて、おやの家に、このよさり今なんわたりぬカヘリ

るさまなり。さればよと心ヤウスおごりするに、さうじみ正身はなし。さる然べ

あぐべき物のかたびら上などうちあげて、こよひ今夜ばかりや、とまちけ△男ノ来ニ待

我をうとみねと

〔玉〕我は馬頭が我なり。うとみねと我を思へるにや、といふ意也。〔我〕を女の我と見たるは、ひがこと也。さては「我を」といふ言、いたづらなるをや。これは、もし他^{ほか}に心をかはせる男のあるによりて、いかでうとめかしと我をば思ひしにや、といふ意にてこそ、「我を」とはいへるなれ云々。

心とどめたる色あひし、さまいとあらまほしくて、

〔釈〕湖月本に、「いろあひしぎま」とつづけてよみたるは、ひがこと也。「色あひし」とよみて、「さまいと」とよむべし。心とどめてうつくしく染なし、衣のさまもあらまほしき形に縫てありし也。

わが見すてん後をさへなん

〔玉〕此「わが」は、女の我也。これも人の手にうつる意をふくめたる所なる故に、「わが」とはいふ也。さて「見すて」といふも、俗言にいふとは心はへことにして、これはうしろみすることをすててやむるをいふ也。上下の詞をよく思ひ合せてしるべし。

とかくいひ侍しを

〔釈〕「ふたたびあひ見ん」などいひやりしなるべし。

たづねまどはさんとも

〔湖師〕此詞は、彼品定に、えんに物はぢしてうらみいはざりし女の、山里などにはひかくれて人をまどはせしやうに、男をたづねまどはさんとも、かくれありかざりし、と也。かの親の家へわたりし夜も、馬頭をいどひてせしわざにはあらざりし心をあらはすなるべし。

かがやかしからず

〔玉〕馬頭が方よりとかくいふに、その返事の、おだやかにおとなしきをいふ也。

ただありし心ながらは

〔釈〕もとのままにあだだしき心にては、と也。のどかに思ひならば

〔玉〕方々へうつす心をやめて、しづかにおちつくをいふなり。つなびきて

〔玉〕たみ詞に、引はりあふ体也といへる、よろし。

〔新〕余拾遺集・平貞文引よせばただにはよらで春駒のつなびきするぞ名はたつときく。この歌をもていへり。

思ひなげきて云々

〔釈〕女の思ひ歎きて、そのおもひにてつひに身まかりたる也。

たはふれにくく

〔新〕たはふれのまこととなりて興さむるといふが如く、こらさんのはかりごとにて、かひなくなれるなり。古今集に、^へありぬやどころみがてらあひ見ねばたはふれにくきまでぞ恋しき。是を転じて用ゐたり。さばかりにて有ぬべく

〔玉〕其上をくはへずとも、そのままにてたりなんと也。

はかなきあだ事をも云々

〔釈〕「あだ事」は、あだなる事にて、さしてとりとめたる事ならぬ風流など也。「まことに大事」は、公私につけたる緊要の事をいふ。

たつた姫といはんにも

〔新〕立田彦^{タケノヒコ}立田姫の二神は風の神にて、本は物染るなどの事はあらねど、此立田山は紅葉のよきよし、古今集・後撰集などに歌多く侍るによりて、其後は立田姫は紅染出す神のごとくいひなせる也。

〔祇注〕うせたりし女の、物をよく染るかたを「龍田姫」といひ、織ぬふかたを「たなばたの手にもおとるまじ」といへるなり。

〔釈〕いにしへは常の女もみづから物をそめしかば、かばかりの人も衣服をそめしなり。今世のさまを見て疑ふべからず。棚機^{タバキ}姫神は、古語拾遺に見えたり。されど、ここはただ機といふ事をとりて織る事に用ゐたるまでなり。「たなばた」も、かの七夕をおもへるなるべし。

うるせく

〔釈〕「うるさく」とある本は、誤なり。一本によりて改めつ。「うるせく」は、功のいりてよろしきかたにつかひたり。

そのたなばたの云々

〔祇注〕裁ぬふかたは似ずとも、長き契にあやかさせたきよし也。^へあふ事はたなばたつめにひとしくてたちぬふかたはあえずぞありける、の歌をとりていへる也。

〔釈〕此歌、後撰集にあり。さてこの歌の意は、あふことのまれに、裁縫ふ事のつたなきよしなるを、ここには、たちぬふかたをのどめて、世とともにかはらぬ契にあえん、とうちかへしてとられたる、例のいとめでたし。「長き契」とは、かの牽牛織女の契の、天地とともに久しきかたにていへる也。

して、さがなくゆるしなかりしも、^{*}我をうとみねと思ふかたの心や

イチワルク

馬頭ノ我也

録

メヨ

ありけん、とさしも見給へざりし事なれど、心やましきままに思ひ

サウモ

ムシヤクシヤスル

侍りしに、きるべき物つねよりも心とどめたる色あひし、さまいと

着 衣服也

キヲツケ

ツキ

様

あらまほしくて、さすがにわが見すてん後をさへなん、思ひやり

女我也

マデ

うしろみたりし。さりとまたえて思ひはなつやうはあらじ、と思ひ

後 見

サウアリトモ

絶

△馬頭ヲ

給へて、とかくいひ侍りしを、そむきもせず、たづねまどはさんと

*

背

*

もかくれしのびず、かがやかしからずいらへつつ、ただありし心な

隠

女調

イありし

ノマ

がらは、えなん見すぐすまじき。あらためてのどかに思ひならばな

ながらは

△馬頭ノ心ヲ

シヅカニ

ん、あひみるべき、などいひしを、さりとと思ひはなれじ、と思ひ

馬頭心

給へしかば、しばしこらさんの心にて、しかあらためんともいはず、

暫

懲

ソノトホリ

いたくつなびきて見せしあひだに、^{*}いといたく思ひなげきて、はか

引ハリアヒ

△女

女ノ死タ

なくなり侍りにしかば、^{*}たはふれにくくなんおぼえ侍りし◎ひとへ

メツタニヤウタンモナラズト

偏

にうちたのみたらんかたは、^{*}さばかりにてありぬべくなん、思ひ給

愚

本妻ナド也

コレホド

へいでらるる。^{*}はかなきあだことをも、まことの大事をも、いひあ

チヨットシタムダ

サウダ

はせたるにかひなからず、^{*}たつた姫といはんにもつきなからず、た

ンシ イヒガヒ

トリアヒワルカラズ

なばたのてにもおとるまじく、そのかたもぐして、^{*}うるせくなん侍

手 劣

具

キツトヨク

コウシヤニ

りし、とていとあはれとおもひいでたり『中将、^{*}そのたなばたのた

△カノ女ヲ

⑩

たつたひめのにしきには

〔玉〕これは其女のやうを聞て、げに其女にしくものあらじと、女のすべてのうへをほめたる詞也。ただ物染るかたのみをほめたるにはあらず。〔にしき〕といへるは、ただ「しく物」といはんための縁のみにて、その錦をいはんとて、上の語によりて、女を立田姫とはいへる也。〔釈〕「立田姫のにしき」は、そめなす錦といふ意なり。「しく」は及ぶ意にて、およぶものあらじといへる也。錦の縁に「しく」とかけていへり。はかなき花紅葉といふも云々

〔玉〕「いふも」は、「いへども」の意か。又、はかなき物にいふ花紅葉も、といふ意にもあるべし。さてこれは、本妻ともさだむべき女は、大かた何事もたらはではあしかるべきよしにていへるにて、はかなき花紅葉だに云々なれば、まして妻とすべき女は、何事もたらはでは、といふ意也。然るを、上に「立田姫の錦」といひ、ここにも「をりふしの色あひ」とあるになづみて、ただ物染ることと心得たる注は、誤なり云々。をりふしの色あひつきなく云々

〔釈〕花紅葉も、そのをりをりの色あひはかばかしからぬは、すこしの光映もなく、いろの消はてて興なきわざ也、といふ意なり。露は、花紅葉をにはし出る物なる故に、いささかの事をつゆといふ詞にかねていへる、たくみ也。新釈に、ただ少ばかりの意にのみとかれたるは、わろし。さてこれは、本妻とすべき女のとへなること、玉小櫛にいはれたるがごとし。

さるにより

〔玉〕此上に、まして妻とすべき女は、大かた何事もたらはではかなはず、といふ意をふくめたる物也。上の詞に「その立田姫の錦に云々」と、かの女をほめて、花紅葉のくらべ物をいへるにて、そのふくめたる意は聞ゆるなり。さてそのふくめたるをうけて、「さるにより」といふ也。かたき世ぞとは云々

〔玉〕妻とすべき女は、何事もたらはではあしかるべきわざなるによりて、さやうの女は有がたき世中にて、定めかねたり、と也云々。いひはやし給ふ

〔湖〕馬頭をいひはやし給ふ也。

〔評〕中将「云々」といひ榮し給ふ、といふ意にて、当夜のさまの第七段也。人もたちまさり

〔釈〕指くひし女より人がらもまさりたる也。ゆるありと見えぬべく

〔玉〕人の見んに、まことに故ある女と見ゆべきさまなりし、と也。見ききわたり侍りき

〔玉〕「見」は、よみたる歌、手かきたるなどを見る事、「聞」は、琴をひきたるを聞也。これらのわざ、たどたどしからざるさまに、馬頭が見聞て、年月をわたりこしといふ也。みるめも云々

〔釈〕かたち難なき也。このさがなものを

〔玉〕すべて「かの」といふべきを、「この」といへること多し。心得おくべし云々。

〔釈〕「さがなもの」は、さがなく物ねたみして、指くひし女の事也。うちとけたるかた

〔玉〕心やすき所にして也。

かくろへみ侍りし

〔釈〕指くひし女にかくれて也。玉 木枯女を也。

すこしまはゆく

〔玉〕うるさく思はる心ばへ也。えんにこのましきこと

〔細〕あだあだしきかたの心たのもしからぬと也云々。心かよはせる人ぞ

〔釈〕「心かよはせる人」は、即下の殿上人をいふ。あるうへ人きあひて

〔釈〕馬頭、禁中より退出する時、一人の殿上人来りあはせて、馬頭の車に相乗したる也。大納言の家に

此人のいふやうこよひ人まつらん

〔釈〕此殿上人、馬頭にいふやうは、「今夜我をまつ女ありて、あやしく心にかかれれば、そなたへゆかん」とて、といふ意也。とての下に詞いささか落たるか。或抄に鈴屋翁の説とて挙たるにも、詞おほく脱たるべきよしをいへり。

〔湖〕馬頭のかよふ事を、此うへ人はしらぬ也。

〔余〕古今雑下へ今ぞしるくるしき物と人またんさとをばかれずとふべかりけり。此歌にてあやなしたる也云々。

ちぬふかたをのどめて、ながき契にぞあえまし。げにそのたつたひ裁 縫 ユルメテ アヤカラセ ナルホド

めのにしきには、又しくものあらじ。はかなき花紅葉といふも、を錦 及 ソノ

りふしの色あひつきなく、はかばかしからぬは、つゆのはえなくきトキドキ ニアハシカラズ タシカナラヌ チト 光映

えぬるわざなり。さるによりかたき世ぞ、とはさだめかねたるぞや、消 △ヨキ女ハアガタキ △昔リ定

といひはやし給ふ』さておなじころまかりかよひしところは、人も馬頭詞 ユキ

しりがき、かいひくつまおと、てつきくちつき、みなたどたどし書也 琴也 書ト琴ト也 歌トウタフ所ト也 オボツカナカ

らず、みききわたり侍りき。見るめもこともなく侍りしかば、このラズ *

さがなものを、打とけたるかたにて、ときどきかくろへ見侍りしほ指クヒタル女也 カクレテ アヒ

どは、いとこよなくこころとまり侍りき。この人うせて後いかがはダ カクベツニ キニイリ 指クヒ亡

せん、あはれながらも、すぎぬるはかひなくて、しばしばまかりなイには *

るままに、すこしまはゆく、えんにこのましきことはめにつかぬレル *

所あるに、うちたのむべくはみえず、かれがれにのみ見せ侍りしほイモ △ヨリテ タエダエ バカリ ウ

どに、しのびて心かよはせる人ぞありけらし。神無月のころほひ、チ ヒソカニ *

月おもしろかりし夜、内よりまかで侍るに、あるうへ人きあひて、内裡 ン 或殿上 米会

この車にあひのりて侍れば、大納言の家にまかりとまらんとするに、馬頭ノ 相乗

この人のいふやう、こよひ人まつらんやどなん、あやしく心ぐるし殿上人 待 ヒヨンナ キニカカ

此女の家はた

〔玉〕「はた」は、も又也。大納言の家にゆくに、此女の家も又かならず通る道なれば、と也。大納言の家にとまらんとするに、此女の家はた云々、とつづく語のはこび也。

よきぬ道

〔余〕契沖云、「よき」は「よけ」といふに同じ。古今に「花のあたりをよきてふけ」、万葉の「よき道」を「曲道」とかけり云々。

あれたるくづれより池の水かけ見えて

〔釈〕築地などのあれたるくづれより、池の水に月のやどれる影の見ゆる意なるを、あやなしてかける也。

月だにやどるすみかを

〔河〕拾遺集・伊勢、雲るにてあひかたらはぬ月だにもわがやどすぎてゆく時はなし

〔湖〕月さへやどるすみかを、男のやどらでもさすがに過しがたしとの心也。おり侍ぬかし

〔釈〕上に脱文ある故にや、この車よりおりたる人の自他まぎらはし。しばらく、上の「心ぐるしき、とて」とある所よりうけたる語とみて、殿上人の下たる事とすべし。万水一露には、「馬頭もおるる也」といへり。もとよりさる心をかはせるにや

〔湖〕此うへ人、木枯の女に心を通じたるにや、と也。是馬頭は此よしを見しりてさらぬやうにて見るに、殿上人は其事を不知也。

とばかり

〔湖〕しばしといふ心也。

うつろひわたりて

霜にうつろひて色の赤くなるをいふ。菊はうつろひたるを賞るも常也。「わたりて」は、ひとしく色の付たるをいふ。

あはれとげに

〔釈〕げにあはれと見えたり、といふ語脈也。

かげもよし

〔河〕催馬楽に、〔あすか井に、やどりはすべし、かげもよし、みもひも寒し、みまくさもよし〕。

〔花〕あすかるの歌の「かげもよし」は、木の陰也。「みもひ」は、寒水也。

「みまくさ」は、馬にかふ草也。

き、とて、この女の家はた、よきぬみちなりければ、あれたるくづる＊湖女の家築地のさま也

れより、池の水、かげ見えて、月だにやどるすみかを、すぎんも、

さすがにて、おり侍りぬかし。もとよりさる心をかはせるにやあり

けん、此をとこいたくすずろぎて、かどちかきらうのすのこだつ物

にしりかけて、とばかり月をみる。菊いとおもしろくうつろひわた

りて、風にきほへるもみちのみだれなど、あはれとげに見えたり。

ふところなりけるふえとりいでてふきならし、かげもよしなどつ

づしりうたふほどに、よくなるわごんをしらべととのへたりけるを、

うるはしくかきあはせたりしほど、けしうはあらずかし。りちのし

らべは、女物やはらかにかきならして、すのうちより聞えたるも、

いまめきたる物のこゑなれば、きよくすめる月にをりつきなからず。

をとこいたくめでて、すのもとにあゆみきて、庭の紅葉こそ、げ

にふみわたるあともなけれ、などねたます。きくををりて、

ことの音もきくもえならぬ宿ながらつれなき人をひきやとめけ

〔河〕秋はきぬもみちはやどにふりしきぬ道ふみわけてとふ人はなし 古今集 うへ人、此女を馬頭が妻とはしらねども、いかさまにも此女に人のかよふと聞いていへる也。

〔釈〕庭の紅葉に踏分たる跡ありて、人の来かよふさまなりといふ事を却てなしといひて、反をきかせてくちをしがらす意也。

〔玉〕ねたましむる也。総角巻に、「〔なべてやは〕など、ねたまし聞ゆれば」、蜻蛉巻に、「など、かくねたましがほにかきならし給ふ」、なども有。

〔釈〕殿上人、あたりの菊を折もちて、歌よむくさはひとする也。ことの音も云々

〔釈〕一首の意は、かきひく琴の音も、さきたる菊の色も、ただならずめでたき宿ながら、ただひとつわろかめる事は、我ごとく何のへんもなき人を引とめけるに、さこそ迷惑ならめ、といふ意也。さるからに、「わろかめり」といふことをそへていへる也。「わろかめり」は、女の心になく思ふなるべし、といふ意也。めりといふ辞に心を付べし。一本に、「月もえならぬ」とあるは、「菊を折て」といへるにかなはず。菊の方をとるべし。此歌、諸注いづれも解得られたるはなし。ながらといふ語の勢を味はふべし。

今一声ききはやすべき人の云々

〔**釈**我よりも今一段間はやす人のある時には、秘曲の手をのこさずしてきかせ給へ、といひて、あざれかかる也。旧注、また新釈・玉小櫛ともに、これを殿上人のみづからの事とせられたるは、いみじきひが事也。声いたうつろひて

〔**釈**今一声聞はやす人のある時、などいふを聞て、女きつとなりて、こわづくろひして歌をよむ也。事のけしき思ひやるべし。木がらしに云々

〔**玉**此殿上人を、こよひとまるべく引とめん詞もなし、と也。木枯にとむべき葉もなし、といふ詞のしたて也。

〔**釈**一首の意は、木をからすばかり烈しき風に吹あはすめる笛の音なれば、木葉のごとくはかなき言葉にてはひきとどむべきよしなし、といひて、言にわがひく琴をかね、笛を殿上人にしていへる也。さるは、いたく疑ひてあざれたるに答へて、しかうたがひ給はば何といひて引とどむべきやうもなし、といへる意也。旧注どもは例のいかがなり。

〔**新**前にいふ、手つき口つきたどたどしからぬをここに見せたり。にくくなるをもしらで

〔**釈**馬頭の心に憎しと思ふをも、女のしらで也。此所 馬頭はいまだ車にあるか、また共に下りて物かげよりうかがひ見たるさまか、上下にその事をことわらざれば、いささか紛らはしく聞ゆ。諸注にその論なきはいかが。

ばんしきでうに

〔**玉**補 樂のすがた、般涉調は、かるはづみなるもの也。さるに依て、此女の心さまに取合せて「今めかしく云々」といふ也。

〔**釈**この説のごとくなるべし。旧注に、調子を時節にあてていはれたるなどは、例のうるさし。

ざればみすきたるは

〔**釈**湖月本に「すぎ」を「過」としたるはわろし。すぎがましき意にて、あだなる也。きもじ清べし。

さてもみるかぎりは

〔**湖**さやうにさればみても、逢見る時ばかりは面白からんと也。

さるところにて

〔**釈**「にて」は「にして」の誤などにや。すこしいかが也。』さる所」と

は、かよひ所といふ意也。「よすが」は、憑タカみ所也。

その夜のことにことつけて

〔**釈**其夜、殿上人と歌よみかはせし事にかこつけて也。

御心のままに

〔**玉**御心のままに女のなびきしたがふ事也云々。

をらばおちぬべき萩のつゆ云々

〔**河**をりて見ばおちぞしぬべき萩はぎのえだもとををにおけるしら露古今集

〔**新**心ははかなくうきたる女の事をいへるは明らけし云々。ささのあられば、古事記に「ササハニニツツヤアラレ佐々婆爾宇都夜阿良礼能」と、いとふるき時よりいふ事也。これをとれるならでも、このあられば常いふこと也云々。

〔**釈**「玉ざさの上のあられ」も、かならず歌あるべし。猶たづぬべし。二つのたとへの詞、いとえんにめたし。

七とせあまりがほどに

〔**釈**細流に、「馬頭、源氏よりも七年ばかりの兄といふ義歟」といはれたる、よろし。さるを又、七は大多数を挙たるやうにいはれたるは、ひがこと也。ここは語中に馬頭が年のほどをおもはせたる書ざまにて、いとめでたき所なり。源氏君を十七として見れば、馬頭廿四なるべし。新釈には、中将のとし廿二三也と注せられたり。されど、中将の年はたしかに見えたる事なれば、いかがあらん。又旧注に、機樟七年の事などいはれたるは、ここにつきなきいたづらごと也。

なにがしが

〔**釈**馬頭みづから名をいふべき所を「なにがし」といへるは、此物語の例也。下の頭中将の「なにがし」も同じ。

すきたわめらん

〔**新**「すぎ」は、好色の好にあたり、「たわめらん」は、上の「あえかに」といふに同じく、なよなよと人になびきやすきをいふ。

中将れのうなづく

〔**釈**上に「中将うなづく」といへる故に、「例の」といへる、いとくはしくをかし。さて此段、当夜のありさまをあらはしたる第八の段なり。

る。わろかめりンなどいひて、いまひと声キきはやすべき人のあると

きに、手ノなのこい給ひそなど、いたく+あざれかかれシヤレば、女声キイいたう

つくるひて、

こがらしキに吹あはすめる笛の音をひきとどむべきことのはぞな

き。となまめきかはすに、にくくなるをもしらで、又さうキのことを

ばんしきでうにしらべて、いまめかしくひきたるつまおと、かどな

きにはあらねど、まばゆき心ちなんし侍りし。ただときどきうちか

たらふ宮づかへ人などの、あくまでざればみすきたるは、さてもみ

るかぎりは、をかしくも有ぬべし。時々にもさる所にて、わすれ

ぬよすがと思ひ給へんには、たのもしげなくさしすぐいたりキと心お

かれて、その夜の事にことつけてこそ、まかりたえにしか◎このふ

たつの事を思ひ給へあはするに、わかき時の心にだに、なほさやう

にもていでたることは、いとあやしくたのもしげなくおぼえ侍りき。

今よりのちは、ましてさのみなん思ひ給へらるべき。御心キのままに、

をらばおちぬべき萩の露、ひろはばきえなんと見ゆる、玉ざさ上のう

へのあられなどの、えん艶にあゑ+かなるすぎずきしさのみこそ、をか

しくおぼさるらめ、今さりとイも、ななとせあまりがほどに、おぼし

しり侍りなん。なにがしがいやしきいさめにて、すきたわめらむ女

には心おかせ給へ。あやまちして、見ん人のためかたくななる名を

も、たてつべきものなり、といましむ』中将れのうなづく◎君す

かたゑみて

新是即少しゑむなるを、詞のつづきによりて「少しかたゑみ」とは書たるのみ也。

いづかたに

玉いづれにしても也。

おはさうす

細おはしますなり。

しれものの物語を

玉我身のうへに有し事を、卑下してかくはいへる也。

釈「しれもの」は愚なる意にて、俗言に「たわけもの」といふ意也。

ながらふべきものとしも

釈「ながらふ」は、永く月日を経る意也。月日永くあひ見んものとも思はざりしかど、と也。

たえだえ

湖絶々ながらといふ心也。

うらめしと思ふ事も

釈女の、中将を憑みにするにつけては、とだえ給ふをりなどはうらめしと思ふ事もあらん、と中将のおしはかりて覚ゆる也。

みしらぬやうにて

湖とだえのつらさをも見しらぬやうにて也。

たまさかなる人とも

釈中将を、かくたまさかかよふ人のごとくにも思はぬさま也。

もてつけたらん有さまに見えて

玉心に恨めしく思ひながら、つつしみて、其色を顯さざるやうにおしはからる也。さる故に心ぐるしき也。「朝夕」は、いつもいつもの意也。

たのめわたる事どもも

釈「たのめ」は、たのませ也。中将より女に行末を憑ましむる事なども有しと也。「わたる」は、しか憑みにして年月を経わたる事也。

おだしくて

釈穏やかなる意也。

この見給ふるわたりより

釈「この見給ふる」とは、此方の見るといふ意にて、北の方の事也。右大臣の御女、四君の事也。

余夕顔巻に、右近が物語たる所に、「こそぞの秋のころ、かの右大臣殿より、いとおそろしき事の聞えまうでこしに云々、西の京に、御めのこのすみ侍る所になん、はひかくれ給へりし」といへるが、これ也。

かすめいはせ

釈あらはにはいはで、それと心得らるるやうにかすめていはせたる也。後にこそ

湖頭中将、其由を後に聞し也。

心ほそかりければ

釈語脈、甲乙点のごとし。

涙ぐみたり

評かなしさのせちなることを思ひ出て、語らぬさきに中将の涙ぐまれたるさま、目の前に見るが如し。源氏君の問かけ給へることを挿みたる、さらにめでたし。其夜のさまの九段也。

いさや

余「いな」に同じ。

ことなる事もなかりきや

釈源氏君のゆかしげに問給ふにつけて、いなどよ、さして語り申すべきほどの事もなかりしよ、と也。

こしかたゑみて、さることとおぼすべかめり。いづかたにつけて片笑

も、人わろくはしたなかりける御物語かな、とてうちわらひおはさザマワルクフツガフナ

うず◎中将、なにがしは、しれものの物がたりをせんとて『いとし詞

のびてみそめたりし人の、さても見つべかりしけはひなりしかば、見始

さてながらふべきものとしも、思ひ給へざりしかど、なれゆくま経

にあはれとおぼえしかば、たえだえわすれぬものに思ひ給へしを、ナカ忘

さばかりになれば、うちたのめるけしきも見えき。たのむにつけてソレホド

は、うらめしと思ふ事もあらん、と心ながらおぼゆるをりをも侍△女ノ心二

りしを、見しらぬやうにて、ひさしきとだえをも、かうたまさかな△女ハ

る人とも思ひたらず、ただあさゆふにもてつけたらんありさまにみテアラズ

えて、心ぐるしかりしかば、たのめわたる事などもありきかし。おキノドクナリシ

やもなくいと心ぼそげにて、さらばこの人こそは、とことにふれて、母

おもへるけしきも、らうたげなりき。かうのどけきにおだしくて、カハユラシゲ

ひさしくまからざりしころ、この見給ふるわたりより、なさけなくタノマセ

うたである事をなん、さるたよりありてかすめいはせたりける、後四君ノアタリヨリ也

にこそ聞侍りしか。さるうきことやあらんともしらず、心にはわすユルヤカナ

れずながら、せうそなどもせで、ひさしく侍りしに、むげに思ひココロヤスク

しをれて、心ぼそかりければ、をさなきものなどもありしに、おもカハユラシゲ

ひわづらひて、なでしこの花ををりておこせたりし、とて涙ぐみた湖玉かつら也

り。さてそのふみのことばは、ととひ給へば、いさや、ことなるこコヤマミ

ことなる事もなかりきや源氏詞

きほどの事もなかりしよ、と也。△イカニ

ことなるこナヤミ

山がつの云々

〔**釈**〕「山がつの垣ほ」は我身を卑下してたとへ、「なでしこ」は幼児のうへにたとへたる也。さて我には心浅くなり給ふとも、此子にはあはれをかけ給へといふ意也。「露」といへるは、「かけよ」といふ詞の縁のみにて、さして心なし。

思ひ出しままに

〔**釈**〕歌をおこせしによりて、中将の思ひ出られし也。

むしのねにきほへるけしき

〔**玉**〕虫のなくにおとらずきほひても思ふけしき也。

むかし物語めきて

〔**釈**〕昔物語のさうしに殊更に設けてかきたるけしきによく似ておぼえしといふ意なり。旧注ひがこと多し。

さきまじる云々

〔**釈**〕今この前栽に咲まじりてある花は、いづれめでたしともわかねども、猶やはりとこ夏に及ぶものなし、といへるにて、をきな子のらうたきといづれわかぬ物から、なほ其方にしくものはなし、とよそへていへる也。「ここなつ」は、瞿麦の一名にて、夏をむねと咲ものなれば常夏といふ。これをやがて「床」にいひよせたり。「床」といふに「しく」といへるも縁の詞也。

やまとなでしこをばさしおきて

〔**釈**〕「大和なでしこ」は、野山に自然に生る、たけ高きをいふ。常なるは、から撫子也。その初外国より渡しし物なるべし。さて撫子といふ名をやがて子の事にいへる事、上の歌のごとし。ただ子をばさしおきて、といふ意也。

まつちりをだにと

〔**奥入**〕〔ちりをだにすゑじとぞ思ふさきしより妹とわがぬるとこなつの花心をとる
古今集夏まつね

〔**湖**〕機嫌をとる也。

うちはらふ云々

〔**孟**〕ひこぼしのまれにあふよのここなつは打はらふにも露けかりけり
撰集秋上 四句「打はらへども」 後

〔**釈**〕「打はらふ」は、床を打払ふなり。床を払ふは男と共に寝んためなり。

上句は、この比中将のとだえ給へるにて、床打はらふ袖も涙にぬれて露けき心を、常夏につづけていひかけたる也。下句は、かの北の方よりうたである事をいはせたるを、したにほめかして、常夏の花に風の吹てしをれしむる秋も来れり、といふ意也。そふといへるは、とだえのかなしき上に、うたであることの添たる意也。いたづらに見過すべからず。「秋」といへるは、常夏の枯めべきをりなるに、物がなしき心をそへて、さる時節到来したり、といふ意也。
なみだをもらしおとしても

〔**釈**〕涙をおさへ忍びても、ふともれおつるさま也。此女のさま思ふべし。いとづかしく云々

〔**湖**〕頭中将のと絶のつらさを思ひしるけしきをも恥る也。

かきけちて

〔**釈**〕「かき」は例の発語、「けち」は消也。跡を消してにげうせたる也。まだ世にあらばはかなき世にぞ

〔**釈**〕上の「世」は現世の事にて、女の此世にあらばといふ意、下の「世」は身につきたる境界の事にて、女の不幸をさしたる也。

あはれと思ひしほどに

〔**釈**〕「ほど」は間の意也。あはれと思ひしあひだに云々のけしき見えば、といふ意也。小櫛に「あはれと思ひし女なりしかばの意也」とあるは、いかがあらん。さてはほどといふ言、俗語めきて聞ゆ。猶考ふべし。

わづらはしげに思ひまつはすけしき

〔**新**〕とだえをいと恨みなどして、つねに來ならすべき様にもいひなごせば、おのづからさる心のおだしさもなくてとふべきに、と也。

〔**釈**〕一本に「思ひまどはす」とあり。かくては「わづらはしげに云々」は、かの四君よりうたである事をいはせたる事にて、四君よりさやうにむつかしくいひて女を惑はすけしきを中将の見たらば、といふ意となるべし。「わづらはしげに」といふ語は、此方にかなへるやう也。猶考ふべし。

かくもあくがらさざらまし
〔**湖**〕かやうにうかれ出るやうにはすまじき、と也。

さるものになして
〔**湖**〕本台ならずとも又一方の北方にも、などいふ也。

これこそ給ひつる
〔**湖**〕馬頭に対していへる詞也。「えんに物はぢして、うらみいふべき事を

ともなかりきや。

山がつのかきほあるともをりをりにあはれはかけよなでしこの

露。思ひいでしままにまかりたりしかば、れいのうらもなきものか

ら、あれたる家の、露しげきをながめて、むしのねにきほへるけし

き、むかし物語めきておぼえ侍りし。

さきまじる花はいづれとわかねども猶とこなつにしく物ぞなき。

やまとなでしこをばさしおきて、まづちりをだに、とおやの心を

とる。

うちはらふ袖も露けきとこなつにあらし吹そふ秋もきにけり。と

はかなげにいひなして、まめまめしくうらみたるさまも見えず。な

みだをもらしおとしても、いとづかしくつつましげにまぎらはし

かくして、つらきをも思ひしりけり、と見えんは、わりなくくるし

き物、とおもひたりしかば、心やすくて、またとだえおき侍りしほ

どに、あともなくこそかきけちてうせにしか。まだ世にあらば、は

かなき世にぞさすらふらむ。あはれと思ひしほどに、わづらはしげ

に思ひまつはすけしき見えましかば、かくもあくがらさざらまし。

こよなきとだえおかず、さる物になして、ながく見るやうも侍り

なまし。かのなでしこの、らうたく侍りしかば、いかでたづねん、

と思ひ給ふるを、今にえこそ聞つけ侍らね。これこそたまひつる

はかなきためしなめれ。つれなくてつらしと思ひけるをもしろで、

も、見しらぬさまにし**のびて**」などいひし事也。

あはれたえざりしも

〔玉〕「絶ざりしも」といふこと、おだやかならず聞ゆめれど、然らず。上の文に見えたるごとく、かくれうせて後までもあはれと思ふこと、絶ざりしよし也。下に「今やうやう忘れゆくきはに」とあるをも思ふべし。やくなきか**思ひ**

〔玉〕これは、我をばふかく恨みてかくれうせぬるほどの女を、此方には猶絶すあはれと思ふは、これも片思といふものなりけりと、一種の片思につくりていへる詞也。次の言に、「かれはたえしも云々」とあるをもて、実に片思ひといふにはあらざることをしるべし。

人やりならず

〔雅詠〕我心からにて人のしらぬ事をいふ。

むねこがるる

〔河〕涙にしおもひのきゆる物ならばいとかくむねはこがれざらまし 後撰 千思千腸熱 一念一心焦 遊仙窟

〔釈〕この注は類例のみ也。中将を思ひはなれず、おのれと心の焦るるまで物思ふ夕べもあらん、と也。

えたまつまじく

〔玉〕「たもつ」は男の女をたもつ也。上に「さてたもたる女のためも」とあるがごとし。

さればかの云々

〔釈〕こより端をあらためていへれど、猶中将の詞也。馬頭としたる説はわろし。其よしは別に論ずべし。

あきたき事も

〔釈〕厭痛の意にて、心にいとほるるをいふ。「ありなんや」のやはよの意と小櫛に有。

琴の音の

〔釈〕「すすみりけん」は、かきひく音の、をりにあひて進みたりし意也。一本「すすめけん」と有はわろし。

この心もとなきも

〔玉〕「この」とは、今みづから語りつる夕貌の上をさしていへり。「心もとなき」とは、うらみいふべきをも、悪びていはざるは、その心のほどのしりがたきをいふ。さて「この」といふは、夕貌上をさしたる言なれ

あはれたえざりしも、[＊]やくなきかたおもひなりけり。今やうやうわ[＊]

すれゆくきはに、かれはたえしも思ひはなれず、[＊]をりをり人やりな[＊]

らずむねこがるるゆふべもあらん、とおぼえ侍り。これなんえたも[＊]

つまじく、たのもしげなきかたなりける。◎さればかのさがな**ものも**、[＊]

思ひいであるかたにわすれがたけれど、さしあたりて見んには、わ[＊]

づらはしく、よくせずは、あきたきこと**もありなんや**。ことのねの[＊]

すすみりけん、かどかどしさも、すきたる**つみおもかるべし**。この[＊]

心もとなきも、[＊]うたがひそふべければ、いづれとつひにおもひさだ[＊]

めずなりぬるこそ**世中**や。ただくぞとりどりにくらぶぐるしかる[＊]

べき。このさまざまのよきかぎりをとりぐし、なんずべきくさはひ[＊]

まぜぬ人は、いづこにかはあらん。吉祥天女をおもひか**けんとすれ**[＊]

ば、[＊]ほうげづきくすしからむこそ、またわびしかりぬべけれ、とて[＊]

みなわらひ給ひぬ。◎式部が所にぞ、けしきある事はあら**ん**。すこし[＊]

づつかたりまうせ、とせめらる。しもがしもの中**には**、なでふこと[＊]

〔玉〕これをとりて見ても、かれをとりて見ても、とにかくに難ありて、思ふにかなひがたき意也。

〔玉〕帝釈のむすめ瑞嚴の天女也。最勝王経に有。

〔玉〕靈異記に、聖武天皇の御世に、信濃国^{ノブノ}のうばそくが、和泉国^{ニギハヤヒ}の血^チ渟^スの上山寺なる吉祥天女の像に思ひをかけて、云々せし事見ゆ。又狭衣の物語に、

〔玉〕「まだかか

靈異記ノ吉祥天女ノ事ハ余釈ニ挙ツ

〔玉〕「思ひか**けんとすれば**」とある語、かの上山寺の事を思へるなるべし。ほうげづきくすしからんこそ

〔玉〕法氣付也。「法」は、仏法の験の方につきていへるにて、靈妙不思議の事をさしていへり。「くすし」は、其靈験の奇異きをいふ語にて、万葉などに多き語也。さて意は、かの上山寺の事のごとく、吉祥天女の瑞嚴なるを思ひか**けんとすれば**、又仏法げありて神変奇怪ならんがわびし、といへるにて、すべてよき女の有がたき意也。

式部が所にぞ云々

〔玉〕頭中将の詞なるべし。「けしきある」は、一ふしありておもしろき事といはんがごとし。

〔玉〕評この藤式部丞を、ここにいたりて初めてあらはし出されたる、いとをかし。此人は、馬頭に相副たるごとく書なしたる用を、ここに至りて綻ばして、上にさまざま論じたる事どもを笑はしくしてまぎらはしたる筆つき、いとめでたし。さればこの一段は、殊更にをこがましくたはふれて、人の眼をさましつべくかかれたり。此所、当夜のありさまをあらはしたる第十の段なり。

しもがしもの中**には**云々

〔玉〕上に「下のきざみといふきはなれば、殊にみみたたずかし」とあり。「なでふ」は、何といふ也。

なに事をとり申さんと思ひめぐらすに

〔玉補〕嘉基云、とり申すは、申上るといふほどの詞也云々。

〔釈〕「とり」は執にて、後世に執達などいふ執の意也。さて此所、「思ひめぐらすにまだ云々」とつづきたる語、余りにはかに聞えて穩ならず。脱文など有にや。しばらく訳注のごとき意をふくめてさとるべし。

文章生

〔余〕職員令 大学寮、律学、博士二人、〔已上〕同明法生十人、文章生二十人、〔簡取難仕及白丁殿意不須四年多少也〕

〔釈〕儒家の人は、皆大学寮にて学問して、後つぎつぎに出身すること也。式部もさる人にて、若かりしほどは文章生なりし也。

馬頭の申給へるやうに

〔細〕前に、「朝夕の出入につけても、公私の人のたたずまひ、よきあしき事の、めにもみみにもとまるありさまを、うとき人にわざとうちまねばんやは」といひしやうに也。

さえのきは

〔玉〕「ざえ」は、才の字の音ながら、物語にいへるは、いづれも才智の意にはあらず。俗に学問のある学問のなきなどいふ学問の事也。「きは」は分際にて、「ほど」といはんがごとし。

なまなまの博士はつかしく云々

〔釈〕此女の学問のほどを思へば、なまなまの博士は恥べきとの意也。「口あかすべく云々」は、議論などしたらんにも、すべて人に口を開けてものをばいはいせざりしと也。かやうの女、その世にはこれかれありきと見えたり。かの清少納言が、博士をもてあそびたる類ひ思ふべし。さる事をしたに思ひて、此段はかけるなるべし。

〔余〕職員令 博士一人、掌教〔授経業〕、課試〔学生上〕。

さかつきをもていでて

〔湖師〕これもかの文集に、「主人会〔テ〕良媒〔ニ〕、置〔テ〕酒満〔ツ〕玉壺〔ニ〕」といひし詞にてかく也。

わがふたつの道うたふをきけ

〔余〕この詩 白氏文集・秦中吟十首のひとつにて、「議婚」と題せり。主人会〔テ〕良媒〔ニ〕、置〔テ〕酒満〔ツ〕玉壺〔ニ〕、四座且勿飲〔ム〕、聴我歌〔カ〕兩途〔ニ〕、富家女易嫁〔シ〕、嫁早輕其夫〔ハ〕、貧家女難嫁〔シ〕、嫁晚孝於姑〔ニ〕、聞君欲娶婦〔ハ〕、娶婦意如何〔ハ〕。

〔孟〕これは博士の女、貧家なるによりて、式部にいひかせたる也。

〔評〕博士といふものの心見るがごとく、いとをかし。

さこそうち

〔釈〕「さこそ」は、例のいひ也。『さち』は、『さし』といふを約めたる辞也。かかつらひ

〔釈〕拘〔カフ〕はる意也。かの父の博士が心を憚りて、絶はてもせずかはりたるほかに也。

いとあはれに思ひうしろみ云々

〔釈〕「うしろみ」は、用意也。女の式部をあはれに思ひて、後〔シム〕むる也。「ねざめのかたらひ」は、夫婦ともねしたる夜のかたらひぐさにも、といふ意也。

いときよげに云々

〔釈〕消息文にもいときよげに、といふ語脈也。

〔玉〕仮字をまじへずして、真名のみに書るを云。

うべうべしくいひまはし

〔釈〕尺牘体の文章に、ことわりめきて書わたす也。

その者を師として

〔釈〕其女を師として文章を習ひしと也。例の、わざとをこがましくかたりなすさま也。「こしをれぶみ」は、今も腰をれ歌などいふごとく、用にとらぬ意也。卑下の詞也。

いまにその恩は

〔釈〕これも、をこめきたるすちにていふ。

なつかしきさいしと

〔玉〕ここにてはただ妻の事をいへり。古今集の歌に、「世中をいとふ山べの草木とや云々」といへるも、卯花は木なるを、草木といへると同じ類の言也。

なまわるならん

〔玉〕「なま」は、上に「なまなわろく」とある「なま」に同じ。「わろ」は、わろびれたるふるまひ也。

はつかしくなん

〔釈〕なつかしき妻とたのまんに、学才なき人のわろびれたる行状など見えんには、はつかしくて心のおかる意也。

かきこしめし所侍〔イハ〕らん、といへど、頭の君まめやかにおそしとせめ

給へば〔ト〕なに事をとりまうさんと思ひめぐらすに『まだ文章のしやう〔モムジヤウ生〕』〔△ヤ思出テ云ヤウ〕

に侍りしとき、かしこき女のためしをなん見給へし。かの馬頭〔ウマノ〕のま

うし給へるやうにおほやけごとをもいひあはせ、わたくしざまの世

にすまふべき心おきてを思ひめぐらんかたも、いたりふかく〔ウチ〕ざえ〔才〕

のきは、なまなまのはかせはつかしく、すべてうちあかすべくなん

侍らざりし。それはあるはかせのもとにがくもん〔ガクモン〕などし侍るとて、

まかりかよひしほどに、あるじのむすめどもおほかり、と聞給へて、

はかなきついでに、いひよりて侍しを、おやききつけて、さかつき

をもて出で、わがふたつのみちうたふをきけ、となん聞えごち侍り

しかど、をさをさうちとけてもまからず、かのおやの心をはばかり

て、さすがにかかつらひ侍りしほどに、いとあはれに思ひうしろみ、

ねざめのかたらひにも、身のざえつき、おほやけにつかうまつるべ

き、みちみちしきことををしへて、いときよげに、せうそこぶみに

も、かんなどいふものかきまぜず、うべうべしくいひまはし侍るに

おのづからえまかりたえで、そのものを師としてなん、わづかなる

こしをれぶみつくる事などならひ侍りしかば、いまにそのおん〔恩〕はわ

すれ侍らねど、なつかしき〔妻〕さいしとうちたのまん〔無才〕に、むざいの人、

なまわるならんふるまひなどみえんに、はつかしくなん見え侍りし。

まいて君たちの

〔**釈**〕我等學問をもてつかうまつるべき身なれど、なほかくのごとし。まいていはんや、君たちの貴き御うへには、といふ意を含めり。はかなしくちをしと云々

〔**湖**〕愚痴なる女をはかなし口をしとかつが見ながらも、只其みめかちの我心につき、縁にひかれてなどあひそふ事もあるなれば、といひて女の才学はいらぬ心をふくめたる也。「侍るめれば」と、句をきりてよむべし。

〔**玉**〕「すぐせのひくかた侍めれば」の下へ、女はさのみ學問などではなくてもありぬべきものぞ、といふ意をふくめたる語也。そは上に、「はかばかしくしたたかなる御うしろみは、何にかはせさせ給はん」といへるにて、然きこゆ。

をのこしもなんしさいなき物は侍める

〔**玉**〕「子細なき」といふこと、心得がたきを、上よりのつづきの趣をもてよく考るに、何の一ふしもなきよしにて、こは學問などのなきをいふ也。さてすべての意は、世中には男にてすら學問なきものは侍る也といへるにて、まして女は學問なくともなでふ事あらん、の意也。諸説みな、子細といふことに泥みて、大かたの意にかなはず。

〔**釈**〕此所いたくまぎらはし。しばらく右の説どものごとく心得てあるべし。おのが考は余釈にいへり。

のこりはいはせんとて

〔**釈**〕女の事をいひさしてやみたる故に、のこりの事をいはせんとて誘し給ふ也。

心はえながらはなのわたり云々

〔**釈**〕「すかし給ふ」とは、心得ながらわざとほこりにをかしくかたりなすなり。「鼻のあたりをこづき」は、ほこりにをかしきさまをいへる、其世の俗語なり。

つねの打とけるたるかたには侍らで

〔**釈**〕常に此女の打とけてすむ所にはあらで、別なる所にて障子などをへだてて対面したる也。「物こし」といふは、いづれも物を隔てあふよし也。ふすぶるにやと

〔**釈**〕式部が久しくこぬを恨みて、女のすねたるかと思ふ意也。今俗の言にもいふことにて、イブス又ケプタガラスなどいふに同じ。

またよきふしなりとも

〔**釈**〕ふすぶるをふしにして、中絶んによき時也、と思ふよし也。

このさかし人

〔**釈**〕秀才ある女なれば、「この賢人」と戯れていへる也。

世のだうりを思ひとりて

〔**釈**〕「ことり」といはずして、「道理」としもいへるは、儒者さまの詞にて、此女の才学あるをうつし出せるたくみ也。世間の理を思ひとりわきまへて、恨みざる意也。

声もはやりかにて

〔**釈**〕よのつねの女は、男にあひては声ひきく物いふなるを、此女は、しのぶ体なく、あざやかにいふさま也。

ふびやう

〔**玉**〕腹痛・風病二説のうち、風病のかたよろしかるべし。春記に、「長曆四年四月十四日云々、今日始服葦草、依風病也」とあり。さて「ふびやう」「こくねちのさうやく」「ぎふじら」など、女のいふべき詞にあらざるを、此女は、「せうそこ文」にも、かななどいふ物かきまぜず」といへるたぐひにて、つねのものいひも、こはこはしくさかしだちたるさまを、ことさらにかく書るなり。此物語すべて、ほうしの詞・儒者の詞など、おのおのその心ばへを書り。心をつくべし。

こくねちのさうやくを

〔**余**〕和名抄云、「大蒜、本草云、胡音胡、和名味辛温、除風者也。兼名苑云、胡一名𪗇音大蒜也」

〔**細**〕「土用のひる」などいひて、薬に用る事のある也。

〔**釈**〕細流の如く、今俗も暑氣の薬とてくふ事也。さらば「極熱のころ用る草薬」と云意にや。蒜じふは今ニクといふ物にて、効おほき草なり。

〔**釈**〕これもきすくにけざけざといひたる詞也。

〔**湖**〕直に御目にかからずとも也。

いとあはれに

〔**釈**〕「あはれに」といへるは、後見の「雜事等を承らん」といへるが、式部をあはれふ意なればなるべし。

〔**玉**〕蒜を服したる事の、いとうたて心づきなく思はれて、何ともいらふべき詞もなきなり。

＊まいて君だちの御ためには、はかばかしくしたたかなる御うしろみ況

は、何にかはせさせ給はん。＊はかなし、くちをし、とかつ見つつも、イヒガヒナイ　ザンネンナ　カタマニハ　ナガラ

ただわが心につき、すぐせ宿世のひくかた侍るめれば、キニイリ　エンを＊のこしもなん、男　子　ホ・ド

さい仔細なきものは侍める、とまうせば万に○のこりはいはせんとて、さ頭中

て将ナドノ詞きてをかしかりける女かな、とすかい給ふを、オモシロ　誘　遺　△スカシ玉フトこころはえながら、

＊は◆なのあたりをこづきてかたりなす式部詞◎さていと久しくまからざりし鼻

に、ものたよりにたちよりて侍れば、常つねのうちとけぬたるかた居

には侍らで、心やましきものごしにてなん、あひて侍りし。＊ふすぶ＊ふ＊ふ＊

るにや、とをこがましくも、スス　バカラシク　物　越　達またよきふしなりとも思ひ給ふるに、△中絶

＊このさかし人賢はた、かるがるしきものゑんじす怨べきにもあらず、世＊

の道理だうりを思ひとりて恨みざりけり。＊声もはやり＊かにていふやう、

月＊ごろふびやうおもきにたへかねて、＊こくねち＊のさうやくをぶくし＊

て、いとく＊さきによりなん、えたいめん対面たまはらぬ。＊まのあたり＊な

らずとも、さるべからん雜事ざふじらは、うけ給はらん、＊といとあはれ

に＊うべうべ＊しくいひ侍り。いらへ＊に何とかはいはれ侍らん、ただう＊

さうぎうしくやおぼえけん

〔潮〕事たらずのいらへやと思ひけん也。

たかやかにいふを

〔潮〕式部はや立出てゆく故に、声高くいひてよく聞せんとする也。

聞すぐさんもちとし云々

〔釈〕聞ながして出んもさすがにいとほしく、又たちやすらひ物いふべきにもあらねば、といふ意也。

げにぞのにほひさへ云々

〔釈〕案に、此所に詞脱たるにや。「げにその」といふことおだやかならず。湖月抄に、「ただにも心につかざるに、その香さへそひけんはいよいようるさくて、と也」といへる、さる意のごとくは聞えたれど、「げにその」といふ詞は、女の「この香うせんん時」といへるをうけて式部がいふ詞めきて聞ゆれば、なほいかが也。されどこのままにてしひて釈ば、湖月のごとき意として、「げにその」は女の詞をうけて式部が心におもへる事とせんか。さらば、「やすらふべきにはた侍らねば」にげめをつかひて」と続く語脈として、其間におもふ心をさしはさめる文とすべし。されど、とにかくに穩ならず。猶試にいはず、「すべなくて」のはどの誤にて、式部がいふ詞にもあらんか。さらば、「げにその云々もすべなく」といひて、「にげめをつかひて」といふ意となるべし。されど、さては又、「さへ」といひそへるも、といふにかなはぬこちす。猶考ふべし。先達はいかに思ひとられたるにか、諸注ともに解説なし。さて「はなやかに」とは、臭き香の甚しきを戯れていへる語と聞えたり。「すべなくて」は、せんすべなくての意也。

にげめをつかひて

〔釈〕これはその世の俗語と聞えたれば、大かたに意を得てさとるべし。湖月抄に「にげまなこになりての心也」といひ、又孟津を引て、「とめられては、との心にて、にげめする也」といへり。さもやあるべき。とにかくに逃支度するありさまとは聞えたり。下に「いひもはてず、はしりいで侍りぬるに」とあるに照して、事の勢ひをおもふべし。

さがにの云々

〔釈〕「さがに」は、蛛の枕詞なるを、やがて蛛の事にとりなしていへり。さて古今集に、「わがせこが来べきよひなりさがにのくものふるまひかねてしるしも」とある古き歌の詞によりて、今夜我来べきよひなれば、

かの蛛のふるまひは夕暮よりいちじるからんを、其夕ぐれにひるますぐせといふは、文なくわけのわからぬ事也、といふ意にて、「昼間」に「緑の香の失る間」をかねたり。「あやなさ」は、俗言にワケガナイといふ意也。

いかなることつけぞや

〔釈〕いかなることつけ言に緑くひたりとはいふぞや、と咎めうたがひたる也。「ことつけ」は、かこつけといふにひとしく、事に託てどかくいふこと也。

おひて

〔玉〕「追て」にて、跡より人に追かけさせて此歌をやる也。たみ詞に、此女おひ出てといへるは、ひがこと也。「おひて」とは、みづからならでも跡より物するをいふ例なるをや。

あふ事の云々

〔新〕夜をへだてず、むつましく逢ふほどの中にしあらば、昼間のたいめも草葉の香する間をも、なにかおもてはゆくはづかしからじを、さばかり思はれぬ中なれば、かくはつつまるる、と也。

しつしづと申せば

〔釈〕をこがましき物語なれば、あわつけくかたりもなすべきを、静まりかへりてうべしくかたれるにて、ますますをかしくをこがましきさまをあらはしたる也。心をつくべし。

おいらかに

〔玉〕俗言に「じんじやうに」といふによくあたれり。さやうのむくつけき女とそはんよりは、じんじやうに鬼とそひめたるこそまさらめ、といふ也云々。

あはめ

〔玉〕河海に淡どある、よろし。淡しとするにて、うとみにくむをいふ詞也。

これよりめづらしきことは

〔玉〕これもをこめきていふ詞也。

おりぬ

〔釈〕下ぬにて、源氏君の御とのる所より藤式部が下て歸りし也。一本にはをりと有。かくては細流のごとく居の意なり。されども、居にては、このさまにかなはず。下ぬといふに随ふべし。

〔評〕今宵のまどゐの一人を先ッ退き去しめたるは、見ん人をして厭しめざるたくみなるべし。例のいとめでたし。今宵のさまをあらはしたる第十一の段也。

すべて男も女も

〔釈〕これより馬頭が詞にて、かの才学だてすることは男も女もけにくくわろきよしをことわる也。

け給はりぬ、とてたち出侍るに、さうぎうしくやおぼえけん、この

承

＊女心
モノサビシク

香うせんん時にたちより給へ、とたかやかにいふを、聞すぐさんもち

失

＊高
声

いとほし。しばしたちやすらふべきにはた侍らねば、げにそのにほ

承

△サリトテ

躊躇

モマタ

ナルホド

香

ひさへ、はなやかにたちそへるもすべなくて、にげめをつかひて、

失

添

術

さがにのふるまひしるきゆふぐれにひるますぐせといふがあや

＊式部

緑屋

なさ。いかなることつけぞや、といひもはてず、はしりいで侍ぬる

＊

カコツケ

走

＊
に、おひて、

追

あふことの夜をしへだてぬ中ならばひるまもなにかまばゆからま

＊女

ハヅカシ

し。さすがにくちとくなどは侍りき、としづしづとまうせば、君だ

＊

湖返歌など早くせしと也

口疾

＊

静

々

ちあさましとおもひて、そらごととてわらひ給ふ◎いづこのさる女

＊

虚言

君たち詞

ドコニサヤウノ女

かあるべき。おいらかにおにとこそむかひぬたらめ。(むくつけ

＊

鬼

向

居

オッロシ

き事、とつまはじきをして、いはんかたなし、と式部をあはめにく

＊

爪

弾

みて、すこしよろしからん事をとり申せ、とせめ給へど、これより

＊

△マ

マウシアゲヨ

貴

めづらしきことはさぶらひなんや、とておりぬ『すべてをとこも女

珍

＊イをり

＊馬頭詞

下

惣

見せつくさんと

〔**釈**〕おのがしれる事をみながら人に見せて、いみじく思はれんとする事也。

三史

〔**弄**〕**史記** 漢書 後漢書

五経

〔**弄**〕**毛詩** 礼記 春秋 周易 尚書

みちみちしきかたをあきらかに

〔**釈**〕三史五経のといふよりは、女のこと也。さるしたたかなる道理を明らかにさとり明らめたる女は愛なからんと先いひて、次にその故をことわる也。

などかは女といはんからに

〔**釈**〕「などかは」は、下の「あらん」までへかかる意也。女といはんからに、などかは公私の事につけてむげに通達せぬ事のあらん、と也。玉小櫛に、これを「学問のすちを也」とあるは、いかが也。ただ公私の事とすべし。すこしもかどあらん人の

〔**釈**〕公私の事につけてわざとならひ学ばずとも、少し才あらん女はつねに耳目にとまりてさとり得ること、おのづからおほかるべし、と也。この注も小櫛はわろし。さるままには云々

〔**釈**〕「然有ままに」は、才学にまかせ世間の事に通達したるにまかせて、といふ意也。「まんなをはしりかき」とは、漢字を草書にかくこと也。「さるまじき中」は、さは有まじき女どちの中に用ゐる文に也。「なかばすぎて書すくめ」は、女文に漢字を過半交てかく也。やはらかなるべきにかたき字を交る故に、「すくめ」とはいへる也。これ皆才学だてにする事也。かかる女、今世にもをりをりあり。あなうたて此かたの

〔**釈**〕女ぶみに漢字をかきまぜたるを見るに、あなむやくの事や、此才学だてのかたのたをやかならば、と思はるるよし也。心にはさしも

〔**釈**〕かく人の心には、しかにくげに見らるる事とおもはざらめど、打よむ時、自然にかたき音によまれなどしてわざとがまし、と也。これは上らうの中にも

〔**釈**〕この紫式部などの比は、女の才学ある人多かりしかば、かやうの人

上臈の中にも有しなるべし。それをかたはらいたく思ひて評じたる語と聞えたり。

歌よむと思へる人の云々

〔**新**〕おのがひとへ心に好むかたにのみおもひ入たるをいふ。さる人、今も多かるべし。

〔**釈**〕「まづはれ」は、「からまれ」といはんがごとし。我は歌よみ也と思へる人の、そのまま其歌にからまれてつきなきふるまひするよし也。をかしくふる事をも

〔**新**〕をかしく古事も、時にしたがひてかすかに聞えさせたるはわろからねど、きとさる事と見えて、をりにも似つかはしからぬをにくみて、「初より」とはいへり。

〔**釈**〕歌の初より、故事をあらはしてとり入れよむことなるべし。すさましきををりに

〔**釈**〕「すさましき」は、不用めきたる也。につかはしからず、不用めきたるをりによみかくる事也。もののきはいかがしくあるまじき意也。かへしせねばなさけなし

〔**釈**〕よみかけたる歌の返歌をせねば、情をしらぬものになり。もし又実にあせざらん人は、手もなく不都合なるべし、と評じたる也。さるべきせち系など

〔**玉**〕こはすなはち、次にいふ五月のせち、九日のえんのことをまづいふ也。なにのあやめも思ひしづめられぬに

〔**釈**〕いそぎ案内せんとするあしたは、心いそがはしき故に、何の分別もなく思ひしづめられぬ時に歌をよみておこする也。

〔**玉**〕「あやめ」とは、其日の縁の詞にいていへる文なり。えならぬねを引かけ

〔**玉**〕菖蒲の根の事を、ふしにしたる歌をよみおこする也。引かけとは、あやめの根の縁の詞にいていへる文也。〔**釈**〕拾遺に、「えならぬ」に「江」をかねたるやうにいはれたるは、さもあるべきか。案に、「えならぬ」は、「えさ。らぬ」の誤にはあらじか、少し穏ならぬやう也。「えさ。らぬ」は、得去ぬにて、のがれがたき意也。まづかたき詩の心を

〔**玉**〕「かたき」とは、すべて詩をつくるを、むづかしきわざとしていへる也。難題と見るは、わろかめり。いとまなきをりに

〔**釈**〕思ひめぐらしていとまなきをり也。

も、わるものは、わづかにしれるかたの事を、のこりなく見せつく

〔**人二**〕**尽**

さん、と思へるこそいとほしけれ。三史五経のみちみちしきかたを、

〔**カハユ**〕

〔**道々**〕

あきらかにさとりあかさんこそ、あいぎやうなからめ、などかは女

〔**明**〕

〔**知**〕

〔**明**〕

といはんからに、世にある事の、おほやけわたくしにつけて、むげ

〔**イフモノチャトテ**〕

〔**公**〕

〔**私**〕

〔**一向**〕

にしらざいたらずしもあらん。わざとならひまねばねども、すこし

〔**ニ**〕

〔**達**〕

〔**ワザワザ**〕

〔**習**〕

〔**学**〕

もかどあらん人の、みみにもめにもとまることじねんにおほかるべ

〔**オ**〕

〔**耳**〕

〔**目**〕

〔**留**〕

〔**自然**〕

し。さるままには、まんなをはしりかきて、さるまじき中の女ぶみに、

〔**サワアル**〕

〔**真名**〕

〔**サウアル**〕

なかばすぎてかきすくめたる、あなうたて、このかたのたをやかな

〔**半**〕

〔**過**〕

〔**△真字ヲ**〕

〔**アアアンマリヂヤ**〕

〔**イ人**〕

〔**ヤハラカ**〕

らましかば、と見ゆかし。ここちにはさしもおもはざらめど、おの

〔**△ヨカラマシ**〕

〔**△カク人**〕

〔**サウモ**〕

づから、こはこはしきこゑによみなされなどしつづ、ことさらびた

〔**剛々々**〕

〔**音**〕

〔**読**〕

〔**ワザトガマシイ**〕

り。これは上らうの中にもおほかる事ぞかし。うたよむと思へる人

〔**＊**〕

〔**上等ノ人**〕

〔**＊**〕

〔**△ヨク**〕

の、やがて歌にまづはれ、をかしくふることをも、はじめよりとり

〔**スギニソノ**〕

〔**難**〕

〔**オモシロキ**〕

〔**故**〕

〔**事**〕

〔**初**〕

〔**取**〕

こみつづ、すさましきををりを、よみかけたるこそものしきことな

〔**入**〕

〔**フヨウラシイ**〕

〔**△人二**〕

〔**イカガシイ**〕

れ。かへしせねばなさけなし、えせざらん人ははしたなからむ。さ

〔**＊**〕

〔**返歌**〕

〔**情**〕

〔**フツガフニアラウ**〕

〔**＊**〕

るべきせち系など、五月のせちにいそぎまゐるあした、なにのあや

〔**然**〕

〔**節**〕

〔**会**〕

〔**節**〕

〔**五日也**〕

〔**△禁中へ**〕

〔**朝**〕

〔**ワカ**〕

めも思ひしづめられぬに、えならぬねをひきかけ、九日のえんにま

〔**チ**〕

〔**禁中ノ儀式也**〕

〔**＊**〕

〔**さカ**〕

〔**一トホ。リナラス**〕

〔**根**〕

〔**九月重陽也**〕

〔**先**〕

づかたき詩の心をおもひめぐらし、いとまなきをりに、菊の露をか

〔**難**〕

〔**アンジ**〕

〔**△テ**〕

〔**暇**〕

〔**＊**〕

〔**＊**〕

菊の露をかこちよせ

〔拾〕菊の露を、かの菊水などによせて歌よみかくるを「かこちよせ」といへり。

〔釈〕「かこち」は、物に託まかせていふ意也。

つきなきいとなみにあはせ

〔拾〕「あはせ」は、うきめにあはするなどいふに同じ云々。

〔玉〕「あはせ」の意、拾遺のごとし。俗言に、じゆつないめにあはするといふこと也。さてこれは、「五月のせちに云々」「九日のえんに云々」を合せていへるにて、いそき参内せんとするをり、かたき詩を案ずるをりなどにて、他へは心はちらしがたきに、それに似つかぬいとなみをせさするなり。「いとなみ」は、返歌を案ずるをいふ也。

さならでもおのづから

〔玉〕「さならでも」とは、かならず其日ならずとも、其日過てしづかになりて後によみおこせたりともよかるべきものを、の意也。『おのづから』とは、まづ菖蒲の根は五日、菊の露は九日ぞその時節にてはあれども、よしや其日は過て後なりとも、おのづからをかしからん、の意にていへり。

げに後に思へば

〔玉〕其歌を後に見て思へば也。「げに」とは、其歌に同心していふ也。さてこは、「後におもへば」「げに」と、うちかへして心得べし。さて又此所の語、「さならでも、おのづから」と「後に思へば」とは、二つに分ていへるにて、「後に思へばさならでも」といふ意にはあらず。かくてその「さならでも、おのづから」と「後に思へば」との二つを合せて、「をかしくも云々」と受たる語にして、「後に思へばおかしくも云々」ともつづき、又「さならでも、おのづからをかしくも云々」ともつづく意也。すべてかやうのところ、言のいひざま、てにをはなどをこまかにわきまへて、すべての語の意を心得べし。よくせずはまぎれぬべし。

〔釈〕この玉小櫛の説、まぎらはしきがごとなれど、よく文脈を見得られたるもの也。くりかへし見てあぢはふべし。さて、かくても猶「いとなみにあはせ」とある語、少しおちるぬこちす。もしくは此下に詞脱たるか。試にいはば、などといふ辞など有しを、上の「など」と重るやうに思ひて、さかしらにけづりたるにや。

などかはさてもと

〔玉〕などかはかかすることはせん、さてもあれかし、といふ意なり。さて

こちよせ、などやうのつきなきいとなみにあはせ、さならでも、お

ツマラヌ 留也 テマドリ

サウナウテモ

のづからげに後におもへば、をかしくも、あはれにも、あべかりけ

ナルホド △ツカニ カシガレバ オモシロク

ることの、そのをりにつきなく、めにもとまらぬなどを、おしはか

ヒツツカズ カナハズ 目 留 △コト △モ 推量

らずよみ出たる、なかなか心おくれて見ゆ。よろづのことに、など

詠

カヘツテ 後

かは、さても、とおぼゆるをりからときどき、思ひわかぬばかりの

△アレカシ △ヲ 分 ホド

心にては、よしばみなさけただざらんなん、めやすかるべき。すべ

△チヲヤリ ナサケシリガホヲセザラン ミグルシカルマイ

て心にしれらん事を、しらずがほにもてなし、いはまほしからん

知有

イヒタキ

事をも、ひとつふたつのふしはすぐすべくなんあべかりける、など

一 二 ノコス

いふにも、君は人ひとりの御有さまを、心のうちにおもひつづけ給

源氏

ふ。これはたらず、またさしすぎたる事なく物し給ひけるかな、と

△世ニハサマザメ女ヲル中ニ足 遍

ありがたきにも、いとどむねふたがる。いづかたによりはつともな

ヒトシホ

何方

依 竟

もあれかしとは、そのままにてもあれかしにて、俗言に、物をせずしてやむを「ままにする」といふ、是也。歌などをよみてやらす、何ともせずしてあれ、といふ意也。

をりからときどき

〔余〕「をりから」にて何とせるはわろし。「をりからときどき」とつづけてよむべき也。「をりから」も「時々」も詞をかへたるのみにて、同語をかさねていへる也。人のいそがしと思へるをりからをも、時のさまをも思ひわかず、あながちに歌などよみかくる、さる心おそき本性ならば、なまなかに歌よまぬかたこそまさりため、といへるなり。

よしばみなさけただざらんなん

〔新〕これは、かのはじめに、「すべて男も女も、わるものは、わづかにしれるかたの事を、のこりなく見せつくさん、と思へるこそいとほしけれ」といふ所をむすびたる也。

すぐすべくなんあべかりける

〔湖〕いひのこして過すべし、と也。

〔釈〕馬頭の語、ここにてとちめたり。

君は人ひとりの御有さまを云々

〔釈〕かく書て、藤壺の事とおもはせたる筆つき、さらにめでたし。みそか事なるゆゑに、「心のうちに」とかかれたるなり。これはたらず云々

〔釈〕「これ」とは、藤つばの宮をさしていへり。「たらずさし過たる事なく物し給ふ」とは、何事によらずそのかたち心ざま行ひざまをかねていへる也。玉小櫛に、「これとは、今馬頭の論に、よろしとして願ふところをさしていふ」とて、「これに」とある本をまされるやうにいはれたるは、いみじきひがこと也。「思ひつづけ給ふ」といひ、終りて又初の馬頭の論を「これに」とは、いかでかいふべき。かつ「物し給ひけるかな」といふ詞も、上にかかる詞なくて何人の物すとも聞えざるをや。

ありがたきにもいとどむねふたがる

〔釈〕「ありがたき」は、藤壺のごとき人の世にありがたき也。「むねふたがる」は、空おそろしくおぼえて心の塞ふさる意なり。此語にてたしかに藤つばの事としらせたる書ざま、いとたくみなり。藤壺巻のすゑの脈をここににははせて、事あるさまにひびかせおく也。「いとど」は、ただにしもむねのふたがるに、かかる人のありがたきを思ひいでて、いとどふたがるといふ意なり。心をつくべし。

いづかたによりはつともなく云々

〔釈〕品定の論、まちまちなりしかども、何方によりて定まり終るともなく、はてには埒もなき事どもになりて、其夜をあかし給ひつ、といふ意なり。「あやしき事」とは、俗言に「らちもない」といふ意にいへる也。さるは、聞にくき女の品定なれば、かくいへるなり。余滴に「拾遺雜上、世中をかくいひいひのはてはいかにやいかならんとすらん、此歌にてこのとちめはしつる也」といへるは、いかがあらん、事の意たがひたるやう也。又或抄に「品定はわきになりて、さまざまの物語どもにて夜あけたると也」といへるは、大かたさもあるべく聞えたれど、猶あやしきといひ、なりてといへるに、いささかなひがたきこちす。新釈には、「論どもになりて」とある異本をとられたれど、いかがなり。

〔評〕品定の論、ここにとちめたり。そもそも此論のむねとある事は、上にもかつがついへるがごとく、「今ひとたびとりならべて見れば、猶じちになんよりける云々、見るめのなさをば、えたのむまじく思ひ給へ侍り」といふ所なるを、なほその余波に、まめなる女とあだなる女とに馬頭が昔あへりし事をいひて、かたみにその難ある事を反対としてくらべて論じ、さて其ついでに頭中将に夕顔の事をかたらせて、心もどなき女のいくさの難をあげ、かつ後巻の伏線としたり。さてその反対に、藤式部丞に才学をたてたる女の事をいはせて、をこがましくあざけりたる其中に、夕顔は中将のいみじく心をかけられたるさまをあらはれにいひ、博士のむすめは愛敬なくなさけうすきさまにかかれたる、これもまた反対の法なり。さてそのついでに、女の才学だてすることの殊にわるきよしを論じて、ふかくいましてとどめたる、これなんこの作者のつねにたてられたる心しらひなりける。そのよしは、此物語のうちに所々に見え、又かの日記の文などにも見えて、巻のはじめにいへるがごとし。さて末にいたりて、源氏君の御心に藤壺の宮の事をおもひで給へるよしを書れたるは、桐壺巻の脈を失はじがため、かつはすでに物のまぎれの事ありしよしをほめかしおきて、末の巻々のつなぎとしたるもの也。さてこの詞にても、この藤つぼの宮は何事もたらひてめでたく、女とある女のほんとなるべきさまにて、かの光る源氏といふに對へて、かがやく日の宮といへりし脈の書ざまなるをしるべし。

からうじてけふは云々

〔評〕此所より、空蟬の君の事をかたり出る也。さて此段は、上の品定とはいたくかけはなれたる事のやうなれど、下のころは、品定よりつづきたり。さるはかの「受領といひて云々」といへる一種の品の事をまづ語り出るにて、夕顔巻の末まではこの巻と一つづきなる事、上下にいへるがごとし。されば、をりをり馬頭がいへりし品定の事を源氏君の思ひ出給ふよしをこかしこに挿みて、其脈の絶ざることをあらはされたり。よくよく心をふかめて見べし。

〔細〕「長雨晴間なき」と前に有しにかかれり。此「も」の字にて、御物忌も果て、雨もはれたるを見せたり。

いとほしけれ

〔釈〕久しく里へ出給はねば、左大臣殿のおぼつかなく思ひ給ふもいとほしき意也。上に、「おほいどのにはおぼつかなくうらめしとおぼしたれ

ど云々」とあるにつぎてきくべし。

おほかたのけしき

〔釈〕「けしき」は、葵上の住なし給へる館内のけしきなり。「人のけはひ」は、葵上のけはひ也。「みだれたる」は、乱雑にわろびたる事也。

かの人々のすてがたくとり出し

〔釈〕品定に、「ただひとへにものまめやかに、静なる心のおもふきならんよるべをぞ、つひのたのみ所には、思ひおくべかりける」などいひし事也。〔評〕この所、品定の中の事をとり出たる第一段なり。脈を繼たる筆つき、心をつくへし。

あまりうるはしき云々

〔釈〕「うるはしき」は、例の端正なる貌也。「はづかしげに」は、其人のさまを見て、此方に恥かしき意なり。

中納言の君中務

〔花〕中納言の君は、源氏の須磨へうつろひのをり、一夜立とまり給ひし人也。中つかさの君は、未摘花巻に、源になびきて大宮の御けしきいかにぞやと聞えし人也。

〔評〕これらの人々は、物語の余興なれど、それはた遠くにははせおきて、事をにはかにせぬ筆づかひ、味はひあり。あつさにみだれ給へる

〔釈〕「あつさ」は、五月雨はれて小暑にうつる比なるべし。「みだれ」は、かたちをつくるひ給はぬ也。

御木丁へたてて

〔湖師〕左大臣殿の遠慮のさまるべし。

〔余和名抄〕帳属有「几帳之名」、所出未詳、同、坐臥具、案、几属有脇息之名、所出未詳。あつきにとにがみ給へば

〔釈〕おどこの物語し給ふをうるさがりて、源氏の、「あつきに來給はずともあるべきに」、とやうに、ひそかにの給ふ意也。それを聞て、女房などの笑ふを、「あなかま」と源氏の制しながら、脇息によりておはす也。「あなかま」は、鳴高きを制する語也。「いとやすらかなる」は、源氏の御ふるまひの心やすげなるを、地より評じたるなり。くらくなるほどに

〔釈〕中神の塞りたるにとまり給ひてはいかが也と、日のくるままに思ひいでて、女房たちの心をつくるさま也。

くて、^{イ論}はてはてはあやしき事どもになりて、あかし給ひつ⁺からう⁺スエズエ^成 ラチモナイ^{△夜ヲ} ヤウヤウノ

じてけふは日のけしきもなほれり。かくのみこもりさぶらひ給ふも、^直カウバカリ^{△禁中ニ}籠^侍

おほい殿の御心いとほしければ、^ンまかで給へり^{△禁中ヨリ}◎おほかたのけしき^{コヨリ葵上ノ方ノコト也}

人のけはひもけぎやかにけたかくみだれたる所まじらず、^{源心}猶これこ^{ヤハリ}

そは、^{馬頭中将ナド也}かの^{眞実}人々のすてがたくとりいでし、まめ人^憑にはたのまれぬべ

けれ、とおぼすものから、^{キツトシタ}あまりうるはしき御有さまの、とけがた^{ウチトケ}

くはづかしげにのみ、思ひしづまり給へるを、さうざうしくて、^ガ中^{葵上}

納言の君、中務などやうの、おしなべたらぬわかうどもに、たは^{ヒトトホリナラヌ}若^人 戯

ぶれ^言ごとなどの給ひつつ、^{ナガラ}あつさにみだれ給へる御ありさまを、見^署

るかひありと思ひ聞えたり。おとどもわたり給ひて、うちとけ給へ^{左大臣}△源氏ノ

れば、^{*}御几帳へだてて、おはしまして、御物語聞え給ふを、^{*}あつき^{△源氏ノ}

にとに⁺がみ給へば、人々^{女房タチ}わらふ。あなかま、とてけうそくによりお^{脇息}

はす。^地いとやすらかなる御ふるまひなりや◎^{*}くらくなるほどに、こ^{ハナヤスイ}今

脇息ノ脇ハ、入
声ノ字ナレバ
「けふ」ト書ベ
キヲ、「う」ト
諸本ニカケル
ハ、「ほ。う。し」
ナドノ例ニテ、
言ヲナダラカニ
セシナルベシ。

ながかみ

〔河〕金櫃経云、天一立中央、為十二将、定吉凶云々。立中央、故号中神、歟。件方古来所違来也。

〔和〕内裡より大殿へ出給へば、天一神のふたがりたる方にあたるよし也。二条院にも同じすちにて」とは、同じく塞りたる方にあたるよし也。中神を長神といへる説はひがこと也。

〔余〕和名抄云、「天一神百鬼経曰、天一神、和名奈加々美、天女化身也」とあれば、ふるき代よりいへることにぞ。

〔新〕源氏はおぼしやうざりしを人々申す也。此時、陰陽家の説行はれて、かかる方違などいふ事も常に侍り。

さかし例もいみ給ふかたなりけり

〔和〕ここより源氏君の詞也。玉小櫛に「これは又一人が申す詞にて云々」とあるは、いかが也。「いみ給ふ」とある給ふは、禁中にて忌給ふといふ意か、又左大臣の忌給ふ意か、心得がたけれど、源氏君の詞とは聞えたり。「いづくにかたがへん」は、其方をたがへてほかへゆく所をもとむる也。「なやましきに」は、ここち例ならぬよし也。

いとあしき事なりと

〔和〕「なやまし」とて源氏君の寝給へるを見て、「ふたがりたる方にてとまり給ふはいとわるき事なり」と女房たちなどのいふ也。

きのかみにてしたしくつかうまつる人

〔和〕紀伊守にてありながら、源氏君に心よせて親しくつかうまつる人也。なか川

〔河〕賀茂川は東、桂川は西、京極川は中央にて、中河なり。すずしきかけ

〔和〕「かげ」は樹陰也。

いとよかなり

〔余〕「いとよくあるなり」。るもじをむのごとくとなふ、くあをかといふは常なり。

牛ながら引入れつべからん

〔湖〕下乗せぬ心也。礼義もなく心安き所を、と也。

忍び忍びの御かたがへ所は

〔和〕源氏のかよひ給ふ女の家などはあまたあるべし、といふ意也。

かたふたけて

〔和〕わざと方の塞りたる日に来て、引たがへ他ざまへゆき給ふやうに、葵上また左大臣などのおぼさんはいとしき故に、明らかに紀伊守が方へたがへ給ふなるべし、と評じたる也。

うけ給はりながらしぞきて

〔和〕仰を承りながら、御次などへ退きて也。

いよのかみの朝臣

〔和〕紀伊守の父、伊予介也。介を守といふはいかがなれど、通じてさもいへりし也。父子、家を別にしてすめりしさま也。「つつしむ事」は、これも方違などの物忌事なるべし。

女どほきたびねは

〔和〕或抄に、「源氏のざれことにの給ふ也」といへり。

げによろしきおまし所にもとて

〔和〕細流に、「侍ふ人たちの申詞也」とある、よろし。「人はしらする」も、侍ふ人たちのはしらせやる也。弄花に、「紀伊守が詞」とあるを玉小櫛にとられたるは、わろし。

ことごとしからぬ所をと

〔和〕との下にてもじを脱せるにや。

かみにはかにとわぶれと云々

〔和〕紀伊守、かく俄に來給ひては、とてわぶれど、侍ふ人御供の人などもきき入ずして、おしてゆく意也。

しんでんの東おもて云々

〔和〕寝殿は正殿也。今の書院のごとし。その東面をはらひあけさせて、源氏君の御座をしつらふ也。湖月に、「紀守の傍輩どもの取持てしたるさま也」といへる、よろし。

よひなかがみ、うちよりはふたがりて侍りけり、と聞ゆ。さかし。
夜中神内裏塞

れいもいみ給ふかたなりけり。二条院にもおなじすぢにて、いづく
例忌方

にかたがへん。いとなやましきに、とておほとのごもれり。いとあ
活本かた違御寝

しき事なり、とこれかれこきゆ。きのかみにてしたしくつかうまつ
ルイ女房たち紀伊守親

る人の、なか川のわたりなる家なん、このごろ水せきいれて、すず
中へん入涼

しきかげに侍る、と聞ゆ。いとよかなり。なやましきに、うしなが
陸源詞牛

らひきいれつべからん所を、との給ふ。しのびしのびの御かたが
△車ヲ地方違

へどころは、あまたありぬべけれど、ひさしくほどへてわたり給へ
数多△大トノ

るに、かたふたげてひきたがへ、ほかざまへ、とおぼさんはいとほ
方塞違他△葵上左大臣ナド

しきなるべし。きのかみにおほせごと給へば、うけ給はりながら、
紀伊守

しぞきて、いよのかみの朝臣の家に、つつしむ事侍りて、女房なん
退伊与守慎

まかりうつれるころにて、せばき所に侍れば、なめげなる事や侍ら
マキリ移狭無礼氣

ん、としたになげくを聞給ひて、その人ぢかからなんうれしかる
ヒソカニ源詞

べき。女どほきたびねは物おそろしき心ちすべきを、ただその几帳
旅寝△女房

のうしろに、との給へば、げによろしきおまし所にも、とて人はし
△寝サセヨノ意也人々詞御座△侍ルカニ△紀伊ノ家へ

らせやる。いとしのびてことさらにことごとしからぬ所を、といそ
源氏

ぎ出給へば、おとどにも聞え給はず、御ともにもむつまじきかぎり
左大臣睦

して、おはしましぬ。かみにはかに、とわぶれど、人もききいれず、
紀伊俄メイワクガレド御供ノ人ナド也

しんでんのひんがしおもてはらひあけさせて、かりそめの御しつら
△寝殿東面弘明

ひしたり。水の心ばへなど、さるかたにをかしうしなしたり。みな
ヤリ水也キドリオモシロウ為成田

そこはかとなき虫の声々

〔箋〕「そこはかとなき」といへる詞、分明に虫のなくにあらず。夏の季に入てからは、何ともしれぬ虫の鳴なり。「そこはかとなき」といへる詞、尤面白し。

わた殿より出たるいづみ

〔玉〕渡殿の下をとほりて庭へ流れ出る泉也。

あるじもさかなもとむと云々

〔余〕風俗歌、河海に引るは古本と少ししたがへり。今、古本につき、ここにあぐ。

「たまだれの　をがめをなかにすゑて　あるじはも　や　さかなまぎに　さかなとりに　こゆるぎの　いそのわかめ　かりあげに　わかめかりあげに

〔釈〕まぎにはもとめに也。「こゆるぎの磯は相模国に在」と旧説にいはれたり。和名抄、相模国余綾郡、余綾与呂木。

〔評〕「酒のむ」といふ語勢をうけて玉だれのをがめの歌を引いで、さて「こゆるぎの磯」を「急」にいひかけられたる所、いとをかし。又「いそぎありく」とありて、「君はのどやかに」といへるも、文のあや也。心をつくべし。

かの中の品に云々

〔評〕品定の事取出たる第二段なり。脈の貫き通れるに、心をつくべし。

思ひあがれるけしきに

〔細〕空蟬をば、父の、内へ参らせんなど思ひし人也。

むすめなれば

〔玉〕空蟬は、今は伊予介が妻なるに、むすめといへるはいかがるやうなれども、これは思ひあがれるやうに聞給ひしは、人のむすめにて有しほどの事なれば、たがへることなし。いよの介がむすめの事かとも思へど、さにはあらじ。

きぬのおとなひ

〔釈〕人の動くにつけて、衣の音するさま也。

さすがに

〔釈〕忍びたれど、さすがに物いひ笑ひなどする意也。「物いひ」といふことなき本は、おちたる也。ゑもじは衍也。

さうじのかみより

〔釈〕「障子の紙より」なり。新釈に「上」とあるは、いかが也。火かげのあかり、障子の紙よりもるにつけて、女のかたの見ゆやとおぼせど、隙なき也。

やをら

〔拾〕柔ら也。他の物語には「すなはちやはら」といへる所もあり。俗に「そろり」といふにかなへり云々。

もや

〔拾〕母屋とかくは、母は音にはあらず。おもやの上略なり云々。おも屋を本として、さまさまの屋、ほそどの、ひさしなどの出くるは、あまたの子に似たれば、さておも屋とはつけたるなるべし云々。

おほすとのみ心にかかり給へれば云々

〔細〕藤壺密通の事也。

〔評〕その事となく藤つぼの御事をかすめてかかれたる、例のめでたし。品定の末の脈をあらはし出たる所也。心得おくべし。

式部卿の宮の姫君に云々

〔新〕此事既に有しを、ここに始めて書出たり。此文はかくさまさまにかけたる常の事也。

〔釈〕朝顔巻の歌に、「見しをりのつゆわすられぬ朝がほの云々」「見しをり」とは、此巻の初の事なるべし。

〔評〕新釈にいはれたるごとく、朝顔の姫君をこの語中にほめかし出して、そはいかなる人ならんと見る人にうたがはせ置て、末々その人をあらはす伏線とせられたる法、いとめづらし。心得おくべし。

か家だつ柴がきして、前栽などころとどめてうゑたり。風すずし

く^{*}て、そこはかとなきむしのこゑこゑ聞え、ほたるしげくとびまが

ひて、をかしきほどなり。人々渡殿よりいでたるいづみにのぞきみ

てさけのむ。あるじもさかなもとむ、とこゆるぎのいそぎありくほ

ど、君はのどやかにながめ給ひて、かの中のしなにとり出ていひし、

このなみならんかし、とおぼしいづ。思ひあがれるけしきに、聞お

き給へるむすめなれば、ゆかしくてみみとどめ給へるに、このにし

おもてにぞ人のけはひする。きぬのおとなひはらはらとして、わか

き声どもにくからず。さすがにしのびてものいひ〔系〕わらひなどす

るけはひ、ことさらびたり。かうしはあげたりけれど、かみこころ

なし、とむつがりておろしつれば、火ともしたるすきかげ、さうじ

のかみよりもりたるに、やをらより給ひて、見ゆやとおぼせど、ひ

ましなれば、しばし聞給ふに、此近きもやにつどひゐたるなるべ

し。うちささめきいふ事どもを聞給へば、我御うへなるべし。いと

いたうまめだちて、まだきにやん。ことなきさすが、さだまり給へる

こそさうさうしかめれ。されどさるべきくまには、よくこそかくれ

ありき給ふなれ、などいふにも、おぼす事のみ心にかかり給へれば、

まづむねつづれて、かやうのついでにも、人のいひもらさんを、聞

つけたらん時、などおぼえ給ふ。ことなる事なれば、ききさし給

ひつ。^{*}式部卿宮の姫君に、朝がはたてまつり給ひしうたなどを、す

少

世こそさだめなき物なれ

〔**釈**〕ここに「世」とあるは、例の男女の間の世にて、縁の事也。次の「世中」も同じ。さて源氏君は、まだ十七歳ばかりなるに、かかる事をのたまふは、おとなぶりたる事なる故に、「およすけ」といへる也。ふいにかくて物し侍るなり

〔**余**〕史記始皇本紀、出_二不意_一。

〔**釈**〕ころならず伊与介が妻になりて侍る也、といふ意也。中について女のすぐせは云々

〔**釈**〕「すぐせ」は宿世の字音にて、かの前世の宿縁の事なるを、身の幸不幸の事に転していへり。男女の縁といふ物は、昔より今に至るまで定りたる事のなき中に、女は殊に男にしたがはではえあらぬ物なる故に、身の上もおのれと定めがたうかびただよひたるがあはれなり、といふ義也。

君と思ふらん

〔**拾**〕大和物語に云、本院の北方のまだ帥の大納言のめにていますかりけるをりに、平仲がよみて聞えける、春の野にみどりにはへるさねかつらわが君さねとたのむばかりぞ

〔**釈**〕この注は、類例也。伊与介は年老たれば、若き空蟬をかしづきて主君のごとく思ふらん、と戯れての給ふ也。なほ、間かけ給ふ辞也。

いかがは

〔**余**〕これを「いかがあらん」といふやうに解せんは、誤なり。「いかでか」の意にて、君とおもはざらんやといへる也云々。

わたくしのしう

〔**細**〕おし出して主といはんは、源氏の御前にては憚ある故に、「私の」といふ会尺おもしろし。

〔**余**〕此説、非なり。桐壺に「わたくしものにおもほかしづき給ふ」とあるがごとく、「私」とは他人にむかひていふ詞にて、他人には見せず、我ものとのみ領するを、「わたくし」とはいふ也云々。

〔**釈**〕私の注、余滴のごとし。但、「他人にむかひていふ詞にて、他人には見せず」といへるは、猶わろし。ただ我物としてふかく愛る事の、おほやけならぬに對したるのみ也。

さりとちもうとたちの云々

〔**玉**〕紀の守などは、いかにつきづきしく今めきてのぞむとも、空蟬をゆ

るしてあはせはせじを、伊予介は、得て妻にしたるは、けしきばみよしある男ぞよ、とたはふれての給ふ也。注、「よしありてけしきばめる」といふにかなはず。又上文よりのうつりもよろしからず、ひがこと也。

〔**釈**〕この小櫛の説はいかがあらん、猶旧説のかたまさるべし。但し旧説は解ざまよからず。今いはば、紀守が「わたくしのしうと思ひて侍る」といふをうけて、「しかありとも、汝たちのつきづきしく今めきたらん中へ、伊与介が空蟬をゆるしておろしたてんやは。かの伊与介は、いとよしありてけしきばめる物をや」といふ意にて、「つきづきしく」は、年のほどの似つかはしき意、「今めき」は、かたちの今やうぶりなる也。さて「よしある」は、伊与介のよしめきてたやすからぬかたち、「けしきばめる」は、物のけしき見しるべく心のききたるさま也。小櫛のごとくにては、やはといふ辞、さらに聞えず。又空蟬をゆるしてあはする事を、「おろしたつ」とはいふべくもあらず。中々にひがことなるべし。

みなしも屋におろし侍りぬるを云々

〔**釈**〕下屋は、下の方にある雑舎也。

〔**玉**〕実には下屋におろしたるにはあらず。源氏君のわたり給へるに、女どもを然るべき所におくは憚ある故に、かく申すのみ也。さる故に、「えやまかりおりあへざらん」といへり。

ゑひすすみて

〔**評**〕上に酒のむと有し首尾也。

すのこ

〔**釈**〕東の庇の簀子也。和名抄云、簀音責、功程式板敷簀子、須乃古床上籍_シ竹名也。いたづらぶし

〔**釈**〕ひとりねなる故に、いたづらぶし也。旧注の引歌、不用也。

あはれやと云々

〔**釈**〕内へも奉らんと思ひし女の、老たる受領の妻になりたるが、あはれなる也。ここに空蟬にあはんの御心おこりしさま也。

ものけ給はる

〔**余**〕これより小君の詞也。これは人にむかひて「いかに、物うけ給はらん」といひて、「さてしかしか」といへる也。今も人の家に行いたりて、「物承らん」などいふ類也。

いかになりにけむ、といつぞやの給はせし、世こそさだめなきもの

〔**△**〕万 男女ノ縁ノコト也

〔**紀**〕守詞

なれ、などいとおよすけのたまふ。ふいにかくて物し侍るなり。世

〔**＊**〕不意 紀守詞

〔**男**〕女

中といふものさのみこそ、今もむかしもさだまりたる事侍らね。な

〔**サ**〕ウバカリ

かについても女のすぐせは、うかびたるなんあはれに侍る、など聞

〔**宿**〕世

〔**浮**〕

〔**マ**〕ウ

えさす。いよのすけはかしづくや。君と思ふらん。いかがは。わ

〔**源**〕詞

〔**伊**〕与

〔**介**〕

〔**＊**〕

〔**＊**〕紀守詞

〔**＊**〕

たくしのしうとこそは思ひて侍るめるを、すきずきしきこと、とな

〔**主**〕

〔**好**〕色

〔**△**〕力ナ

にがしよりはじめてうけひき侍らずなん、と申す。さりとちもうと

〔**拙**〕者

〔**承**〕

〔**引**〕

〔**△**〕ハベル

〔**＊**〕源詞

〔**サ**〕ウアリトモキサマ

たちの、つきづきしくいまめきたらん、おろしたてんやは。かの

〔**+**〕

〔**ニ**〕ツカハシク

〔**下**〕

〔**立**〕

すけはいとよしありてけしきばめるをや、など物語し給ひつつ、い

〔**キ**〕ガキキタル

〔**△**〕モ

〔**源**〕詞

づかたにぞ。みなしもやにおろし侍りぬるを、えやまかりおりあへ

〔**＊**〕紀守詞

〔**△**〕居ル

〔**皆**〕

〔**下**〕屋

〔**下**〕

〔**退**〕

〔**下**〕ハテ

ざらん、ときこゆ。ゑひすすみて、みな人々すのこにふしつつ、し

〔**＊**〕

〔**酔**〕進

〔**＊**〕

〔**寶**〕子

〔**臥**〕

〔**ナ**〕ガ

づまりぬ『君はとけてもねられ給はず、いたづらぶしとおぼさるに、

〔**ウ**〕チトケ

〔**＊**〕

〔**ム**〕

〔**ダ**〕

〔**寝**〕

御めさめて、この北のさうじのあなたに、人のけはひするを、こな

〔**障**〕子

〔**サ**〕オト

〔**ソ**〕ナ

たやかくいふ人のかくれたるかたならん、あはれや、と御心とどめ

〔**空**〕セミ

て、やをらおきてたち聞給へば、ありつる子の声にてもけ給はる。

〔**ソ**〕ツト

〔**起**〕

〔**＊**〕詞

〔**承**〕

〔**小**〕君也

かれたる声のかしき

〔**釈**この「をかしき」は、愛らしき意也。声のかれたる子の、却て愛らしきが、今もあるもの也。

〔**評**空蟬と小君との問答は、其夜のけしきをいへるまでなる物から、其中に空蟬の源氏君を評じたるおもふきをあらはしおきて、逢給へる時のさまのにはかならぬやうにせしものなるべし。

しどけなき

〔**釈**寝かかりて物いふ故に、しどけなき也。もとより声のしどけなきにはあらず。

いもうと

〔**新**姉にても男の方に対してはいもといふ例は、仁賢紀の日鷹吉士が妻の哭ていへるに、於_レ母亦兄、於_レ母亦兄、弱草吾夫恂_レ矣。この古注に云、古者不_レ言兄弟長幼、女以_レ男称兄、男以_レ女称妹云云と、此意也。此文の比にも猶さる称残りて書るなるべし云々。

ひさしにぞ

〔**釈**上に「はしつかたのおましに、かりなるやうにて大とのごもれば」とありし所也。

かほ引入れつるこゑす

〔**釈**着て寝たる物の中へ顔を引入たる也。

ねたう心とどめても

〔**玉**或抄に、こころとどめてもとひ聞ぬがねたき也。

〔**釈**此説のごとし。空蟬に心あるが故に我うへをとひ聞ぬがあぢきなき也。さうじぐちすぢかひたるほど

〔**花**〔**細**源氏の空蟬の声を聞て推し給ふ也。「障子」は、寢殿と母屋との南面と北面との中を隔たる障子なり。「すぢかひたる」とは、源氏君の南面にある御座とすぢかひたる所をいふ也。今夜源氏の寢所は、寢殿の東のひさし也。前の詞に、「しんでんの東おもて」とあり。空蟬のかたは北おもて也。前に「此北のさうじのあなたに、人のけはひする」とあり。されば源氏のおはします東おもてのかたよりは、空蟬の臥所は北西にすぢかひたるべし。

中将の君はいづくにぞ

〔**評**中将の君を出せる、更にめでたし。此人湯におりてあるほどに源氏の入給へるを、かへりたれば既に抱きて出給へるにあへるなど、いみじくめでたし。「中将めしつれば」とある詞、はじめて逢給へるくさはひとなりて、つきなからず聞えたるなど、殊にたくみなり。

なげしのしもに

〔**釈**長押は、空蟬のふしたる母屋のかまちをいふ。其下やがて次の間にて、庇也。そこに女房どもの臥をりていらへするさま也。

さうじぐちには

〔**釈**はもじなき本はおちたる也。「さうじ口には几帳をたてて」也。

からびつたつ物

〔**湖**伊予介が家よりかりにうつりたる体なるべし。

〔**釈**火くらき故に、たしかに韓櫃とも見えぬさま也。かれだつ物とはいへる也。

いとささやかにて

〔**釈**空蟬の体、いとやせてちひさきなるべし。

なまわづらはしけれど

〔**玉**「おしやる」といふまでへかかれる詞也。「まで」といふへはかからず。

〔**釈**「上なる衣」は、着てねたるきぬ也。「おしやる」は、引のくる也。

「もどめつる人」は、

中将の君也。

中将めしつれば

〔**細**源氏当官中将也。「中将の君はいづくにぞ」と尋ねしを聞給ひしほどに、かくの給ふ也。とりあへずよき詞也。

人しれぬ思ひの

〔**釈**人しれず密に空蟬を思ひたりしに、中将とてめしつれば、その思ひのかひある心ちして参りたり、といふ意也。

ともかくも

〔**釈**何事とも分別せられぬ意也。

ものにおそはるる心ちして

〔**釈**いささかねふりかけたりしさま也。万葉集に、物といふ仮字に鬼字をかけり。

いづくにおはしますぞ、とかれたる声のかしきにていへば、ここ

空蟬詞

にぞふしたる。まらうどはね給ひぬるか。いかにちかからんと思ひ

客 人

ドノヤニ△源ノ御寢所ヘ

△ツカヒニ

つるを、されどけどばかりけり、といふ。ねたりける声のしどけな

サウハフモノノ

空ノ

き、いとよくにかよひたれば、いもうとと聞給ひつ。ひさしにぞお

△方

妹

＊小君詞

ほとのごもりぬる。おとにききつる御ありさまを見奉りつる、げに

御 寝

△光ル君ナドト

△方

こそめでたかりけれ、とみそかにいふ。ひるならましかばのぞきて

密

空蟬詞

見奉りてまし、とねふたげにいひてかほひきいれつる声す。ねたう。

＊顔

＊源心

サンネン

心とどめてもとひきけかし、とあぢきなくおぼす。まろははしにね

△ミチツト 留

問 問

小君詞

イニ

侍らん。あなくらしとて火かかげなどすべし。女君は、ただこのさ

ア ア ク ラ イ

挑

＊障

うじぐちすぢかひたるほどにぞふしたるべき。中将の君はいづくに

アタリ

風

＊空蟬詞

女房ノ名也

ぞ。人げとほきこちして、物おそろし、といふなればなげしのし

＊◆ 長 押

もに、人々ふしていらへすなり。しもやにゆにおりて、ただいま参

下 女房等也

女房詞 イしもに

下 屋

浴 場

下

らん、と侍る、といふ。みなしづまりぬるけはひなれば、かけがね

△マウシ

寝

アンバイ

をこころみにひきあげ給へれば、あなたよりはささざりけり。几帳

試

彼 方

額

をさうじぐちにはたてて、火はほのぐらきに見給へば、からびつた

口

＊

韓 櫃

メ

つ物どもをおきたれば、みだりがはしきなかをわけいり給ひて、け

ク

置

乱 雑

中

サ

はひしつる所にいり給へれば、ただひとりいとささやかにてふした

オト

唯 一人

細

小

臥

り。なまわづらはしけれど、うへなるきぬをおしやるまで、もとめ

＊ 下ウヤラココロツカハシ

上

衣

ノケル

覺

つる人とおもへり。中将めしつれば、人しれぬおもひの、しるしあ

＊ 中将君

＊

験

るこちして、との給ふを、ともかくも思ひわかれず、物におそは

＊空 心

分 別

＊ 覺

やおびゆれと云々

〔万〕やおびえたる声なるべし。

〔評〕「かほに衣のさはりて」とあるなど、すべて此あたりのさま、いといとくはしくめでたし。

かかるをり

〔湖〕空蟬の中川の宿へわたりあるをりを待出しといひなし給ふなり。

おにかみもあらだつまじき

〔釈〕いかならん鬼神なりとも、源氏君のめでたきさまを見ては、争ひあらだつまじきはひなれば、といふ意也。

ここに人とも

〔玉〕ここに誰にかあらん人の来つるとも、えよばはらぬ也。心ちはたわびしく

〔釈〕「はた」はモマタなり。えののしらぬに、心ちもまたわびしき也。「あるまじき事」とは、夫ある身にしてはあるまじきふるまひと思ふよしなり。

いきの下なり

〔湖〕声たてずいふ也。

をかしと見給ひて

〔釈〕このをかしは、うつくしくあはれと見る意也。消まどへるけしきの心ぐるしきにつけて、いとどあはれのまさる情なり。

たがふべくもあらぬ云々

〔湖〕人たがへすべくもあらず、我思ふ心ざしをしるべにて来つる物を、思ひの外にもおぼめき給ふ、と也。

〔釈〕「おぼめき」は、空ぼけてわざとおぼつかなくいふこと也。

いとちひさやかなれば

〔釈〕上に「いとささやかにてふしたり」とある応。

さうじのもとに

〔釈〕上に「さうじぐち」とありし所。

もとめつる中将だつ人

〔湖〕「だつ」は、源は中将を見しり給はねば也。

ややとのたまふに

〔余〕「やや」は、人をよぶ時にもいへど、ここはさにあらず。思ひかけなく人きあひたれば、ややと声いだして驚き給へるさまをかきたる也云々。

いみじくにほひみちて云々

〔釈〕源氏君の御衣にたきしめ給へるそらだきのかをりの、中将の君が顔へも薫りかかるやうにおぼゆるにて、源氏と思ひ知りたる也。貴人の薫物はなみなみの物ならねば、けぢめあるさま也。次下みな同じ意也。あさましう

〔釈〕此詞は、「思ひまどはるれど」へかけてきくべし。

それだに人のあまたしらんは

〔玉〕たとひなみなみの人ならんにても、あまたの人のしらんは、よきことにもあらじを、ましてこれは、の意也。

どうもなくて

〔孟〕源の動転なくて也。

おくなるおましに

〔釈〕寢殿にまうけたる御寢所なり。上に「はしつかたのおましに、かりなるやうにて大とのこもれば」とあるは、仮に端の御座にふし給へる也。「かりなるやうにて」といへるに心をつくべし。旧注どもしとくだくだし。

わりなきに

〔釈〕にも少し穩ならず。

るる心ちして、[＊]やとおびゆれど、かほにきぬのさはりて、おとにも

オビエタル声也

顔衣

障

音

たてず。^{源詞}うちつけにふかからぬ心のほどと見給ふらん、ことわりな

ソツジニ

△ハ

モツトモ

れど、年ごろ思ひわたる心のうちも、聞えしらせんとてなん。[＊]か

るをりをまちいでたるも、さらにあさくはあらじ、と思ひなし給へ、

待

△志フ

といとやはらかにの給ひて、[＊]おにかみもあらだつまじきはひなれ

柔

鬼

神

アラソフ

スガタ
ケシキ

ば、はしたなく、[＊]ここに人、ともえののしらず。[＊]ここちはたわびしく、

フツツカニ

△アリ

罵

モマタ

ツラク

あるまじき事と思へば、あさましく、^{空詞}人たがへにこそ侍るめれ、と

キモガツブレテ

いふも[＊]いきのしたなり。きえまどへるけしき、いと心ぐるしくらう

息

下

空ノ

キノドクニカハユ

たげなれば、[＊]をかしと見給ひて、たがふべくもあらぬ[＊]心のしるべを、

ランゲ

＊源詞

違

案内

思はずにもおぼめい給ふかな。^{イよモ}すぎがましきさまにはよに見え奉ら

オモヒガケナキヤウニトボケメキ

ウハキ

じ。思ふ事すこし聞ゆべきぞ、とて、[＊]いとちひさやかなれば、かき

小

いだきて、[＊]さうじのもとにいで給ふにぞ、[＊]もとめつる中将だつ人き

抱

＊

覚

メケ

あひたる。[＊]ややとの給ふに、あやしくて、さぐりよりたるにぞ、[＊]い

△源ノ

中将ノ君

探

みじくにほひみちて、かほにもくゆりかかる心ちするに、[△]おもひよ

香

満

顔

薫

△源氏ト

りぬ。[＊]あさましう、こはいかなることぞ、と思ひまどはるれど、^イ聞

＊
キヨウサメウ

えんかたなし。[＊]なみなみの人ならばこそ、あららかにもひきかなぐ

ハウヤウモ

ツウレイノ

荒

らめ、[＊]それだに人のあまたしらんは、いかがあらむ。心もさわぎて

サヘ

数多知

したひきたれど、[＊]どうもなくて、[＊]おくなるおましにいり給ひぬ。さ

＊動

奥

御座

入

うじをひきたてて、あかつきに御むかへにものせよ、との給へば、

障子

暁

迎

マキレ

女はこの人の思ふらんことさへ、しぬばかりわりなきに、[＊]ながるる

空蟬

中将

死

＊
メイワクナル

流

例のいつくよりとうで給ふことのはにか

〔釈〕何れの所より取出し給ふ詞ならん、打開てはあはれもしらるるほどになさけなせしくいひつくし給へど、と也。さて、いまだかかる事の給ひたる事は見えぬに「例の」といへる、いかがしきやうなれど、これは源氏君の女に對ひてはいつもいかやうにの給ふといふ意をふくめたる詞にて、上下へおしわたしていへる也。されば他も准へてしるべし。うつつともおぼえずこそ

〔釈〕こより空蟬の詞也。あまりの事にて現とは覺えず、夢にてやあらん、といふ意也。「おぼしくだし」は、「下し」也。「朽し」にはあらず。小櫛はひがこと也。

いかがあさくは

〔湖〕さきに源の「かやうのをりを待出たるも、さらにあさくはあらず、と思ひなし給へ」との給ひし詞の答也云々。

かやうなるきはきははこそ

〔花〕上臈下臈のきはをいふ也云々。

〔余〕花鳥の説によるべし云々。なみといへるもきはといへるも、同類の詞なり。「きはは、きは」といへる詞、未摘花巻に、源の、未摘をかいまみさせよと命婦に仰給ふ所に、「俄に我も人もうちとけて、かたらふべき人のきはは、きはとこそあれ」とみえたり。花鳥の説によるべし。

〔釈〕この解は、右の説を得たりとすべし。夫ある事をきはといふやうにいはいれたる注は、きはといふ詞の例にたがへり。かやうに受領などいふ分際は、その分際に相應なる縁のある物に侍る也、といふ意也。

おしたち給へるを

〔釈〕「おし」は押つけに物する意、「たち」は心をたててをれぬ意にて、無理わざするといふよし也。

心はつかしき

〔釈〕女のしたがはぬにつけて、心に耽る意也。

そのきはきはをまだしらぬ云々

〔釈〕「きはは、きはとこそ侍るなれ」といふをうけて、其分際ある事をも更にしらぬ初事ぞ、との給ふ也。さて、初々しき心は他へうつろふことなく一すぢなる物なるを、普通の色好みのなみに思ひなすがうたであり、といふ意にて「中々」といへる也。旧説のごとくにては「なかなか」の詞聞えがたし。

おのづから聞給ふやうもあらん云々

〔釈〕世の評をも自然聞たることもあらん、我はさらにあながちなる好色心は今までならひ来らぬを、然るべき前世の宿縁ありてにや、はじめてかうあながちなるわざするなれば、かくあはめらるるもげにことわり也とおぼゆるほどの心まどひは、我ながらあやしきまでにおぼゆる、といふ意也。

さるべきにや

〔玉〕かやうに深く思ひて、あるまじきふるまひをし侍るも、然るべき前世の宿縁あるにやと也。

あはめられ

〔玉〕淡められ也。

いとたぐひなき御ありさまの云々

〔釈〕世に類ひなき源氏の御ありさまなるに恥らひて、いよいよ従ひ奉らん事のわびしければ、と也。

さるかたの

〔湖〕情の方のいふかひなきものになりて過さんと空蟬のおもふ也。

人がらの云々なよ竹のこちして

〔釈〕空蟬の人がらのやはらかなるに、しひてつよき心をくはへたれば、をれ従はんかとは見えながら、さすがにをれずしたがはぬといふを、竹にたとへていへる也。「たをやぎ」は、たをたをとして柔かなる也。

〔新〕女竹は、なよやかにたためどしなやかなれば、中々に折がたき物なるにたとふ。

〔評〕なよ竹の比喩、いとめでたし。「しひて」といひ、「さすがに」といへるもめでたし。新釈に、なよ竹を女竹とあるは、おしあてめきたり。ただ竹也。

みざらましかばくちをしからまし

〔釈〕見るとは実に交はる事なり。

〔玉〕既に実事有しうへ也。さてかく逢見たる事は、空蟬のためには心ぐるしけれども、逢見すはくちをしきことならんとおぼすなり。注どもたがへり。

なくさめがたく

〔玉〕空蟬の心なり。思ひなくさめんとすれども、なくさめがたくうしと思ふ也。源氏君のなくさめ給へども、といふやうに心得たるは、たがへり。

まであせになりて、いとなやましげなる、いとほしけれど、れいの＊地例

いづくよりとうで給ふことのはにかあらん、あはれしらるるばかり、汗
ドコカラ取出

なさけなさけしくの給ひつくすべかめれど、なほいとあさましきに、空心
尽ヤハリ

うつつともおぼえずこそ。かずならぬ身ながらも、おぼしくだしけ＊
＊空詞
現
△思じ侍し
下

る御心のほども、いかがあさくは思ひ給へざらん。いとかやうなる＊
イ心はへ
△サレド

きはは、きはとこそ侍るなれ、とて、かくおしたち給へるを、ふか＊
分際
ムリワサシ

くなさけなくうらめし、と思ひいりたるさまも、げにいとほしくこ＊
情
イラシ

ころはづかしきはひなれば、そのきはきはをまだ思ひしらぬうひ＊
＊源詞
際々
初

ごどぞや。中々おしなべたるつらに思ひなし給へるなん、うたてあ＊
事
△サルヲカヘツテツウレイナルナミ
メワクナ

りける。おのづから聞給ふやうもあらん。あながちなるすぎごころ＊
自
然
△世評二
ムリヤリ
ウハキ

は、さらにならはぬを、さるべきにや、げにかくあはめられ奉るも、＊
更
習
然
△因縁
イカサマ
サミセラレ

ことわりなる心まどひを、みづからもあやしきまでなん、などまめ＊
モットモ
惑
自
フシギナ
△思ヒ玉フル
実

だちてよろづにの給へど、いとたぐひなき御ありさまの、いよいよ＊
万
＊空心
類
△源
二

うちとけ聞えんことわびしければ、すくよかに心づきなし、とは見+
ツラハツカシ
ツンシヤントシテ

え奉るとも、さるかたのいふかひなきにてすぐしてん、と思ひて、＊
ラレ
ソノカタ

つれなくのみもてなしたり。人がらのたをやぎたるに、つよき心を＊
質
ヤハラギ
強

しひてくはへたれば、なよ竹のこちして、さすがにをるべくもあ＊
強
加
弱
折

らず。まことにこころやましくて、あながちなる御こころばへを、＊
実
ムシヤクシヤトシテ
ムリヤリ

いふかたなしと思ひてなくさまなど、いとあはれなり。心ぐるしく＊
泣
源心
キノドクニ

はあれど、見ざらましかば、くちをしからまし、とおぼす。なぐさ＊
ハ
＊交ルニ也
ザンネンニアラウ
空セミフ

おほえなきさまなるしもこそ

〔箋〕不慮の参会こそ一段ふかき契の因縁なれと也。

むげに世を思ひしらぬやうに

〔玉〕世をするは、男女のかたらひをすること也。思ひしらぬといふも、ただしらぬといふに同じ。

〔釈〕「おほはれ」は、おほほかに惚たるさまする事也。おほのほ、すみてよむべし。

うき身のほどの定まらぬ

〔湖〕伊与介の妻にならぬむかしの身にてあらば也。

〔釈〕「ほど」は分限を云。受領の妻と定まる、これ分限也。

ありながらの身にて

〔奥入〕河とりかへす物にもがなやよの中をありしながらのわが身とおもはん

〔余〕「此歌何に出たる歟」と契沖いへり。されど所々に此歌の心してかける所あまたあり。もと六帖などに在しが、今の本にもらせしなるべし。あるまじき我だのみにて

〔釈〕あるまじき事ながらも我をたのみて、といふ意也。「我だのみ」は体言也。

見なほし給ふのちのせもやと云々

〔花〕もとの身ながら源氏にとはれ奉らば、御ころざしおろかなりともみなほし給ふやとも頼むべきに、と也。空蟬の心也。「後せ」は、只のちといはんためなり。

〔釈〕此御説よろし。「後せ」は、後の時といはんがごとし。せは、「うれしきせ」「かなしきせ」などいふせ也。

かりなるうきねのほどを

〔玉〕我は夫のある身なれば、二たびと逢見奉るべきにあらざれば、こよひかくわりなく、一度逢奉りしは、ただかりそめのうきたる契といふ也。空蟬の心、始終かくのごとし。

たぐひなく思ひ給へまどはるるなり

〔釈〕「たぐひなく思ひまどはるる」は、身のさちなきを也。此段のすべの意は、「ありしながらもとの身にてかかる御心ばへを見たらば、よしや御志のおろかなりとも見直し給ふ時もあらん、と思ひたのみてなぐさめんものを、既に受領の妻と定まりて、かうあひ奉るもかりそめに

めがたくうしとおもへれば、^{源詞}などかくうとましき物にしもおぼすべ^疎

ツライ

き。おほえなきさまなるしもこそ、^{△却乙}ちぎりありとは思ひ給はめ。^チむ^{*}

げに世を思ひしらぬやうに、おほほれ給ふなんいとつらき、とうら^{ツレナキ}

ツトモ 男々中コト也

トボケガホン

みられて、いとかくうき身のほどのさだまらぬ、^{モトノ}ありながらの身^{マモノ}

△アルキ

にて、かかる御心ばへを見ましかば、あるまじきわれだのみにて、^我

懣

みなほし給ふのちせもや、ともおもひ給へなぐさめましを、いと^如か

△モ乙見直

うかりなるうきねのほどを思ひ侍るに、^{*}たぐひなく思ひ給へまどは^感

活本うかりける

此 假 浮 寝

るるなり。よし今は^{*}みきとなかけそ、とておもへるさま、^地げにい

△イカニセン

とことわりなり。おろかならず契りなぐさめ給ふ事おほかるべし◎^{ナホザリ}

ダウリ

とりもなきぬ。人々おきいでて、^詞いといぎたなかりける夜かな。御^ネ

鶏

御トモ

ネゴクアリ

しのびたるうきねなり、さる身のほどを思ふに、たぐひもなくくちをしようて、思ひまどはる」といふ意也。「ほど」とは身のほどの事也。諸注皆解得られぬ中に、新釈はよろし。

みきとなかけそとて

〔河〕それをだに思ふ事とて我やどを見きとないひそ人のきかくに

〔細〕古今には、「見きとないひそ」とあるを、「かけそ」と引かへて用る、面白き也。

〔釈〕案に、此歌の四句は「かけそ」とある方にししへめきて聞ゆ。もしくは、古今集のかたは後に写しひがめたるにやあらん。さてこの意は、「よしや、かくあながちに逢給へるうへはいかにせん、見たりと言のほにかかけ給ふな」と口がためする意を、此引歌にゆづりてきかせたるなり。例のいとたくみ也。

思へるさま

〔湖〕空蟬の思ひ入たるさまなり。

〔釈〕案に、もの思へるさまと有けんを、おとせるにや。少し言たらぬげに聞ゆ。「げにことわりなり」とは、地より空蟬の心を評じたるなり。

おろかならず契りなぐさめ給ふ事

〔新〕此所打とけたる事をば略して、行末の契りをし、又逢て後いよいよ女は心なぐさめがたかるをよろづにいひなぐさめ給ふ、となり。

〔評〕実事のありし事を始終ほめかして書まぎらはしたる筆つき、いといとめでたし。諸注、ここをその実事の所と定められたるはさる事ながら、玉小櫛に、「見ざらましかば」とある所に「すでに実事有しうへ也」といはれたるも、また捨がたし。さるは「いふかたなしと思ひてなくさまなど、いとあはれなり」とある所、其事めきて聞ゆるに、「見きとなかけそ」とあるきもじも過去の辞也。又「とて思へるさま」といふつづきも、事の後めきて聞えたればなり。されど、さばかりあなぐりて委しくはんは、中々に書まぎらはしたる作りぬしの意にはあらざるべければ、ただ大かたに見過すべくなん。「実事なし」などいはれたる旧注はいといとひがこと也。さていづれにしても、ここにて打とけたるさまなることは論なし。とりもなきぬ人々おきいでて云々

〔評〕鳥の声に御供の人々おき出てもいふさま、見るが如くきがごとし。これらの事を挿みて、つきせぬうらみを残しとどめて立出給ふ余情をふかめたる、いといといみじ。

さしはへては、いかでか御ふみなども聞えん。事のいとわりなきをおぼすに、

〔釈〕「さしはへて」は、俗言にわざわざなどいふ意なり。さて、いかでか御文なども聞えん、とよみきて、事のいとわりなきを、とよむべし。「事のわりなき」とは、忍びたる事なれば、いと理りなくむつかしき意也。玉小櫛に、「いかでかの下に、ともじ落たるか」とていはれし説も、湖月本に、「いかでか」の下に「句」と記したるも、ともにいみじきひがことなり。「御文」といへるは、源氏君の心を地よりおしはかりていふ所なれば、御とはいへるなり。源氏君のみづから御文とのたまひし意にはあらず。よく思ひ弁へて疑ふべからず。

車ひき出よ、などいふなり。かみもいできて、^詞女などの御方たがへ

紀守

出来

こそ、よぶかくいそがせ給ふべきかは、などいふ◎君は又かやうの

△サウニ急筆

△コト

ついであらんこともいとかたし。^{*}さしはへてはいかでか御ふみなど

ワザワザニ

もかよはん。事のいとわりなきをおぼすに、いとむねいたし。おく

通

ムリナル

心痛

奥

いかでか聞ゆべき

〔湖〕ふみなどもいかがしてつたへんと也。

御心のつらさもあはれも云々

〔余〕「心のつらさ」とは空蟬をいひ、それを浅からずあはれと思ふは源の心にて、「とりどりにたがひたる人心よ」といへる意にて、「さまざまめづらかなるべきためしかな」との給へるなり。

あさからぬよの

〔釈案に、湖月本に「世の」とかきたるは、いかがあらん。これは夜の意にて、この逢給ひし夜の事なるべし。又「よ」は、例の男女の中をいふ意にて、源氏と空蟬との中はつらさどあはれと共に浅からぬといふにもあらんか。考ふべし。

とりもしばしばなくに

〔細〕前に「鳥もなきぬ」と書て、ここに「鳥もしばしば」とかける、面白し。つれなさを云々

〔新〕つれなきことをまだ恨みもはてぬ間に、心あわたたく明ぬるを、いかでかくはおどろかしぬらん、となり。物を取も堪ぬに、鶏をそへたり。さて実事なしと中将におもはせん意也。且上に疑ひの詞なくて「らん」といへる、例のいかなどいふ語をこめたるてにをは也。

〔釈〕この説のごとし。但、「実事なしと中将におもはせん意也」とあるは、旧注にもいはれたる事ながら、過たるべし。「しのめ」は、古今集に「しののめのほがらはがらどあけゆけば」といふ歌を本にて、夜のあけゆく時を「しのめ」といひならへり。「しのめ」は、小竹之芽といふ事に、「ほがら」へかけたる枕詞也。

身のありさまを思ふに云々

〔釈〕空蟬、わが身のありさまを思ふにいと賤しくて、かたちも位も高くめでたき源氏君にあひ奉りたる事の、につかはしからずまばゆくおぼえて、源氏君のめでたき御もてなしも何とも思はれず、と也。

つねはいとすくすくしく云々

〔釈〕「すくすくしく」は、すくよかといふに同じ意也。すくすくしく思ひあなづるといふ義にて、「すくすくしく」は空蟬の心に思ふ意也。「心づきなし」は、伊与介を心づきなしと思ふ也。「すくすくし」を伊与介の事としては、「わたくしのしうと思ふ」などいひしおもふきにかなひがたし。余滴に、「すくすくし」を「ふつつかなる心歟」といへるは、

ひがこと也。

いよのかたのみ思ひやられて云々

〔釈〕此詞にて、伊与介は任国へ下りてある事しられたり。「夢にや見ゆらん」は、今宵のさまのなり。つねは思ひあなづりたりし夫も、わが身のあやまちより空おそろしく思ひ出らるる女の情、げに然るべし。

身のうさを云々

〔湖〕空蟬の、公卿の子にて伊与の妻になりし事、かくぬし定りたる身にて源氏にあひし事、またありしながらの身にてかく源氏に思はれまゐらせばととりかへさまほしく思ふ事などの、うき歎きを思ふに、あかぬうちにはやわかれを告る鳥の声さへすれば、いよいよき事をとりかさねてねをなく、と也。

〔釈案に、この説よろし。玉小櫛に、「身のうさとは、夫の定まれる身にて源氏君に逢たるを、うきことに思ふ也」とあるは、いささかたがへり。ことあかくなれば

〔新〕専らと明はつるをいふ也。明るを事として早く明る意也。然れば、専らと明るてふに同じ。

へだつるせきとみえたり

〔河〕細へあふ坂の名をたのみつつこしかどもへだつる関のつらくもあるかな。此歌のころは、実なきかこつけによく叶へり。又彦星に恋はまさりぬ天の河へだつる関を今はやめてよ。此歌は障子を隔ての歌なれば、ここによく合たり。両首ともに用べしと也。

〔余初の歌、新勅撰恋一よみ人しらず、二の句「名をばたのみて」。後の歌、伊勢物語。

〔釈案に、ここは障子やがてへだつる関となりたる意なれば、初の歌の詞のみをもてかかれたるなるべし。

南のこうらんに

〔余〕高欄とかくは、俗なり。段国・沙州記、「吐谷渾於河上作橋、勾欄甚嚴飾、勾欄之名始此」。玉篇に、「階際、木勾欄」とあり。

〔釈〕東おもての南の方なる欄によりかかりて打ながめ給ふなるべし。

そそきあげて

〔余〕鈴虫巻さまかはりたるいとなみにそそきあへる、いとあはれなるに。狭衣今やそそきやむとものいはでつくづくとる給へれば」。契沖云「俗にいそがしく立ぬるをそくそくするといへり」。紫上の「あまがつなどつくりてそそくりぬ給ふ」。※狭衣の例は巻一から、紫上の例は若菜上から。

〔釈〕源氏君を見奉らんとて、格子をそそろかにいそぎあげて、女房などののぞく意也。

の中将もいでくるしがれば、ゆるし給ひても、又ひきとどめ給ひ

つつ、いかでか聞ゆべき。よにしらぬ御心のつらさもあはれも、あ

さからぬよの思ひ出は、さまざまめづらかなるべきためしかな、と

て打なき給ふ御けしき、いとなまめきたり。とりもしばしばなくに、

心あわたたくて、

つれなさをうらみもはてぬしのめにとりあへぬまでおどろかす

らむ。女身のありさまを思ふに、いとききなくまばゆきこちして、

めでたき御もてなしも、なにともおぼえず、つねはいとすくすくし

くこころづきなしと思ひあなづるいよのかたのみ思ひやられて夢に

や見ゆらんとそらおそろしくつつまし。

身のうさをなげくにあかである夜はとりかさねてぞねもなけれ

ける。ことあかくなれば、さうじぐちまでおくり給ふ。うちもとも、

人さわがしければ、ひきたててわかれ入給ふほど、心ぼそく、へ

だつるせきと見えたり。御なほしなき給ひて、南のこうらんにし

ばしうちながめ給ふ。にしおもてのかうしそそきあげて、人々のぞ

すのこのほどにたてたる。

〔**釈**〕南の簀子の西の方に見とほすべき所の中に小障子をたてたる也。こさうじのかみより

〔**釈**〕旧注のごとく、小障子の「上より」なるべし。小櫛に「紙より」といはれたる説どもは、猶いかが也。

身にしむばかり思へるすき心

〔**釈**〕源氏をのぞきてほのかに見奉りたる女房どものすき心には、身にしむほどもでたく思へるも有べし、と也。

月は有明にて云々

〔**釈**〕五月の末の有明ころなるべし。「光をさまれる」は、明はてて光のうすくなりたる也。「かげさやかに見えて」は、猶空の影は清く見えたるさま也。これを地にうつりたる影のやうに見られたる旧注は、さどび心也。其外もやうなき説どもおほし。「なかなかをかしき」は、夜中よりも却てけしきのおもしろきよし也。

何心なき空のけしきも云々

〔**評**〕何の意もなき空のけしきも、見る人の心に憂^{ウレヒ}あればかなしく、欲^{ヨロコビ}あればおもしろく、其時々打むかふ心々にて艶にも凄くもさまざまに見ゆるとなり。此詞は、ひろく上下にわたりたることにて、大かた時々の物事につけてけしきををかしく書なしたる所は、皆其をりの人々の心にかけて、物のあはれの身にしむやうにかき出られたること、此例をおして知るべし。ここは、さるけしきのをかしきにも、人しれぬ憂ある源氏の御心には、いとむねいたく云々といへる意なる其中に、何心なき云々の事をさしはさみて、前後の文例を示されたる、いどめでたし。いたづらに見過すべからず。

やすがだになきを

〔**釈**〕此をの下にかぎりなき余情をふくめのこして、とと受たる也。かへりみがちといへる、則そのありさま也。

とのかへり給ひても

〔**釈**〕殿は大殿也。

すぐれたる事はなけれど

〔**釈**〕空蟬の、かたちのすぐれたることはなけれど、見にくからず用意してもてなしつくりひても有けるかな、と思ひ出給ふ也。「中の品」は、かの品定に、「中の品のけしうはあらぬ、えり出つべきころほひ也」な

くべかめり。^ンすのこの中のほどにたてたる、こさうじのかみより、^子

ほのかに見え給へる御有さまを、身にしむばかりおもへるすき^ン心ど^源

もあめり。^ン月は有明にて、ひかりをさまれる物から、影さやかにみ^光

えて、中々をかしきあけぼのなり。^{カハツチ}なに心なき空のけしきも、ただ^曙

みる人から、えんにもすぐくも見ゆるなりけり。人しれぬ御心には、^艶

いとむねいたく、ことつてやらんやすがだになきを、とかへりみが^心

ちにいて給ひぬ◎とのにかへり給ひても、とみにまどろまれ給は^大

ず、又あひみるべきかたなきを、ましてかの人の思ふらむ心のうち^二

を、いかならん、と心ぐるしくおぼしやる。^イすぐれたることはなけ^{イ思ひやり給ふ}

れど、めやすくもてつけてもありつる中のしなかな。^ミくまなく見あ^{ミグルシカラズトリツクロヒ}

つめたる人のいひしことは、げにとおぼしあはせられけり『このほ^集

どはおほい殿にのみおはします。^玉なほいとかきたえて思ふらん事の、^{あるまじき事とは思しなから猶也}

いとほしく御心にかかりて、くるしくおぼしわびて、きのかみをめ^口

したり。かのありし中納言の子は、えさせてんや。^{馬頭}らうたげに見え^{△タガハズ}

しを、身ぢかくつかふ人にせん。^使うへにもわれ奉らん、とのたまへ^帝

ば、いとかしこきおほせごとに侍るなり。^{紀守詞}あねなる人にの給ひみん、^{アリガタキ}

と申すもむねつぶれておぼせど、そのあね君は、あそんのおとうと^{源詞}

やもたる。^{紀守詞}さも侍らず。このふたとせばかりぞ、かくて物し侍れど、^持

おやおきてにたがへり、と思ひなげきて、心ゆかぬやうになん聞^親

給ふるあはれのことや。よろしく聞えし人ぞかし。まことによしや、^{源詞}

けしうは侍らざるべし

〔玉〕すべて「けしうはあらず」といふは、わろくはあらずといふ意也。よしといふ意也といへるは、たがへり。

〔万〕「侍らざるべし」の詞、面白し。次の詞に「うとうとしき」といへる首尾をかける也。

世のたとひにて

〔花〕まま子はまま母にむつびぬ事と、世のたとへに申すなり。

〔釈〕つねにもてはなれてうとうとし侍れば、世中にいひならへることく、まましき中にてむつましくもせねば、よくも知侍らず、といふ意也。旧注に白氏文集を引れたるまではあらざるよし、小櫛にいはれたるがごとし。

ゐてまゐれり

〔釈〕紀守の率^キ也。

こまやかに云々

〔釈〕いづこもこまかにたらひて、うつくしくめでたきかたちならねど、なまめきたるさまして、あてなる人に見ゆるよし也。「あて」は品^{ヒシ}のよき意也。

はづかしげにしつまりたれば

〔釈〕もの静かなるさましたるが、はづかしげなるよし也。小君の恥たる意にはあらず。

されどいとよくいひしらせ給ふ

〔釈〕空蟬の事をいひ出にくけれど、品よくかすめて心得させ給ふよし也。ふかくしもたどらず

湖思ひもめぐらさずと也。

なみだも

〔玉〕もといへるは、源氏君の御文を持て、小君が出来たるにあはせて、涙もなり。

さすがに御文をおもぐくしに

湖師見じとは思へど、さすがにゆかしければ也。

新さすがにゆかしく、はた小君におもはゆければ、面がくしながらひろげたる、いともよく書たり。

〔評〕げにいはれたるがごとく、「おもぐくしにひろげたり」とある、ぬけ出でめでたし。

見し夢を云々

〔余〕正夢はよくあふ物なれば、夢にみしごとくうつつにあふべき夜もがな、とねがひなげくなり。空蟬にかりそめに逢給へるを、夢にとりなしての給へる也。さてさるなげきするほどに、あふ事はおきて、我目まであはではねられぬ、とよめる也。信明集に、^へなかなかにおほつかなさの夢ならばあはする人も有もしなまし。是も夢をあはすといふよりよめり。拾遺恋^へ夢よりぞ恋しき人を見そめつる今はあはする人もあらなん。よみ人しらず。

〔玉〕思ひにてねられぬ也。「さへ」とは、夢のあはざるうへに、めさへあはずといへる詞也。「あふ」といふは、夢の縁の詞也。

ぬるよなければなど

〔河〕^へ恋しさを何につけてかなぐめん夢にも見えずぬる夜なければめもおよばぬ御かきさまに

〔釈〕一本に「御かきさまも」と有は、わろし。いみじき御かきさまを見て心動くゆゑに、身をなげく也。「めもきりて」とのみある本は、写しおとせる也。涙にめもきりふたがる意也。

心えぬすぐせ

〔玉〕受領の妻になれるばかりのうき身なるに、又源氏君のごとくなる、すぐれたる御方に、かやうに思はれ奉ることは、心得がたきすぐせのそへる也。

との給へば、けしうは侍らざるべし。もてはなれてうとうとしう侍＊紀守詞
ワルクハ離疎々

れば、よのたとひにてむつれ侍らず、とまうす◎さて五六日ありて、＊世
睦

この子＊あてまゐれり。こまやかにをかしとはなけれど、なまめきた＊
カノ小君也率小君／＼体シナヤカナ

るさまして、あて人と見えたり。めしいれて、いとなつかしくかた源氏

らひ給ふ。わらはごちに、いとめでたくうれしとおもふ。いもう童
空セミ

との君の事も、くはしくとひ聞給ふ。さるべき事はいらへ聞えなど委
答

して、はづかしげにしづまりたれば、うちいでにくし。されどいと＊
静△空ノコトラ

よくいひしらせ給ふ。かかることこそは、とほの心うるも思ひのほ小君
△アリケレウスウス案外

かなれど、をさなき心ちにふかくしもたどらず、御ふみをもてきた幼

れば、女あさましきに涙もいできぬ。この子の思ふらん事もはした＊
空セミキモノツフレコト△サレド小君フツガ

なくて、さすがに御ふみをおもぐくしにひろげたり。いとおほくて、＊
フニテ面隠△文ノ詞

見し夢をあふ夜ありやとなげくまにめさへあはでどころもへにけ＊源氏
合逢日比経

る。ぬる夜なければなど、めもおよばぬ御かきさまに、めもきり＊
＊イモ

ふたがりて、心えぬすぐせうちそへりける身を、おもひつづけてふきりて
＊宿世添

し給へり。またの日小君をめしたれば、まゐるとて御かへりこふ。＊
翌△源ノ乞

かかる御ふみ見るべき人もなし、と聞えよとの給へば、うちゑみて、空蟬詞
小君笑

たがふべくもの給はざりし物を、いかがはさは申さん、といふに、詞
トウシテサウハ

心やましく、のこりなくのたまはせしらせてけり、と思ふに、つら空蟬
イマヒイユメイワク△小君ニ

きことかぎりなし。いでおよずけたることはいはぬぞよき。さはな詞
イサヤマセタシカラバ莫

まゐり給ひそ、とむつがられて、めすにはいかでか、とてまゐりぬ参
ハラタテラレ小君詞召△マキラザラン

きのかみすき心に云々

〔**紀**〕守、すきたる心に、空蟬の年若くて伊与介の妻になれることをあたらものに思ひて、心をかけつつ、追従して近づきよらんと思ふ故に、小君をもてかしづきて、ひきゐてありくと也。今日も源氏の御方へ紀守が率てゆくさま也。

〔**評**〕紀守が小君をゐてゆくにつけて、継母に心をかけたる事を説出て、つひに此事によりて空蟬の尼になるべき伏案とせられたる、いどめでたし。かかる事ども、すべて此物語の法なれば、心を付べし。
猶あひ思ふまじきなめり云々

〔**釈**〕源氏の小君を思ひ給ふに、小君は源氏を思ひ奉らずと怨じ給ふ語なる故に、「相」といへり。「猶」とは、これよりさきに相思ふべき契ありしを、さまなしとらみ給ひし事あるをしらせて、「猶」とはいへる也。さてこの小君のさまを思ふに、男色をはめかして書たるものとおぼえて、前に「なまめきたるさまして云々」とかき出しを、はじめてここにかくいひ、末にいたりて「御かたはらにふせ給へり云々、つれなき人よりは中々あはれにおぼさる」といひ、空蟬巻にいたりて、「手さぐりのほそくちひさきほど」などいへる、まさしくそのありさまをあらはされたる筆つき也。心をつけてよむべし。然るを、諸注にいささかも其さだなきは、事がらのをこがましき故にもあらめど、いとなほざりなる事といふべし。

いふかひなのことやあさましとて

〔**釈**〕「いふかひな」は小君、「あさまし」は空蟬の心にかけて見るべし。あこはしらじな

〔**新**〕吾子也。万葉などに、吾をばあどもわともいへり。さて「あこ」は、わが子といひて、したしみの語なり。

〔**釈**〕汝はしるまじけれど、伊与介よりは前に逢たるぞ、と戯れにの給ふ也。くびほそしとて

〔**釈**〕案に、此語は其世の俗語にて、頸の細きは貧相なりなどいふ諺のありしさまに見えたり。かれたのもしげなきとはいへるなるべし。

ふつつかなる

〔**玉**〕太つかといふ事にて、物のふとく丈夫なる意也。注に、げすしき心也といへるは、後に転じたる意にて、ここにはかなはず。

ゆくさきみじかりなん

〔**湖**〕年老たる人なれば也。

まつはし給ひて

〔**釈**〕糸の物に纏はるをたとひにて、むつましくするを「まつはし」といへる也。

うちにも

〔**釈**〕上に「うちにもわれ奉らん」とありしひびき也。

みくしげとの

〔**河**〕御匣殿内蔵寮外御服など裁縫所也。順徳院御抄

〔**釈**〕今世にお納戸などいふごとき所也。貞観殿中にありと見えたり。されど、ここは「わが」とあれば、源氏君の御くしげ殿也。岷江入楚に「庶人も装束調する所をいふ也」と見えたり。かるがろしき名さへ

〔**新**〕かく有まじき事の上に、はたをさなき中だちに文つたへなどせる心がろき名を副どり添んものと也。

〔**釈**〕旧注に、『とりそへん身の』と引つづけて見るべし」とあるは、わろかめり。

いとつきなかるべく

〔**玉**〕受領の妻と定まれる身にて、高貴の源氏君などへ御返事などせんは、似つかはしからずと也云々。

我身からこそ

〔**釈**〕たとひいかほどめでたき事も、我身の分限相応にてこそよけれ、分に過たることはすまじと思ひて、打とけたる御返事も聞えず、といふ意也。旧注いとわろし。

ほのかなりし御けはひ有さまは云々

〔**釈**〕くらき所にて逢たる故に、「ほのかなりし」とはいへる也。

〔**玉**〕「げに」は、世中の人のめで聞ゆるもげに也。

をかしきさまを

〔**釈**〕「をかしき」は、をこがましき意、「さま」は、かたち也。先分際につきなきをいひ、次にかたちのわるきを恥る也。文法ついであり。さて「なりけり」といふまでは草子地にて、空蟬の心をいひ、次に源氏君の心をいへり。

◎^{*}きのかみすき心に、このままはのありさまを、⁺あたらしきもの^紀守^好色^繼母^母

におもひて、^追つゐ^從しようしよる心なれば、この子をもてかしづきて^小君^寄タイセツニシテ

ゐてありく◎君めしよせて、きのふまちくらししを、^{*}なほあひ思ふ^{ツレ}△小君ヲ^{昨日}待^暮△ナドカヘリ^{参ラザリシ}

まじきなめり、とゑんじ給へばかほうちあかめてゐたり。いづらと^小君^顔赤^居ドウジヤ

の給ふに、しかじかとまうすに、いふかひなのことや。あさましと^{カヤウカヤウ}^{キヨウサメタコト}

て、^{*}またも給へり^源△御ヲミヲ^吾子^伊予^翁。そのいよのおきなよりは、さ^已

きに見し人ぞ。されどたのもしげなくくびほそしとて、^{*}ふつつかな^前源也^頸細^フトリスギ

るうしろみまうけて、かくあなづり給ふなめり。さりともあこはわ^タ後^見△我ヲ^吾子

が子にてをあれよ。かのたのもし人は、^{*}ゆくさきみじかりなん、^伊与^介向^来短

との給へば、^小君^心さもやありけん。いみじかりけることかな、と思へる^{ヒドイコトデアツタ}

を、^源をかしとおぼす。この^{*}こをまつはし給ひて、^{*}うちにもゐて参り^小君^纏内^裡率

などし給ふ。わがみくしげどのにの給ひて、さうぞくなどもせさせ、^御匣^殿装^束東

まことにおやめきてあつかひ給ふ。御文はつねにあり。されどこの^実親^{△空へノ}^小君

こもいとをさなし。こころよりほかにちりもせば、^{*}かるがろしき名^落散

さへとりそへん、身のおぼえをいとつきなかるべく思へば、めでた^{マデ}添^ニア^ハシ^カラ^ズ

き事もわが身からこそ、と思ひて、うちとけたる御いらへも聞えず。^{*}^{△メデタクモラヌ}

ほのかなりし御けはひありさまは、げになべてにやは、とおもひ出^{*}△源ヲ^イカ^サマ^ヒト^ホリ^{△アリシ}

聞えぬにはあらねど、^{*}をかしきさまを見え奉りても、なににかはな^貌セ

るべき、など思ひかへすなりけり◎君はおぼしおこたる時のまもな^意

思へりしけしきなどの

〔玉〕源氏に逢奉りしことを、かけてもあるまじき事と、いみじくうき事に思へりし空蟬の、其時のけしき也云々。

はひまぎれ

〔釈〕「はひ」は匍ハビ匍ヒにて、ひそかにものする意、「まぎれ」は、ものに紛れてゆく意也。

れいのうちに

〔岨〕前に「内にのみさふらひようし給ひて」と有。

さるべきかたのいみ

〔釈〕或抄に云、「禁中より退出し給ふ道にて、方ふたがりたるを思ひ出給ひたる体にしておはする也」といへり。かれ然るべき時を待給ひし也。にはかに

〔玉〕「にはかに」は、「おはしましたり」へかかれり。俄にまかで給ふといふにはあらず。「まねして」は、忌の方をたがへにゆくまねをして也。

やり水のめいぼくと

〔玉〕源氏君の、此家にはじめにおはしましたりしも、「水せきいれて、すずしき陰に侍る」と人の申しによりてなれば、又此度おはしましたるも、此やり水の面目といへる也。

〔釈〕この会釈の詞、いとをかし。

〔余〕史記項羽本紀、縦江東父兄憐而王我、何面目見之。

人げなきありさまを

〔釈〕「人ヒト気ケなき」とは、かたちのわるく人がましからぬよし也。

夢のやうにて過にしなげきを

〔湖〕はじめの方違の時、逢まゐらせし事をいふ也云々。

〔釈〕ふたたび逢なば、いよいよ身のすぐせをなげくことの加くはるべければ、といふ意也。

まばゆければ

〔玉〕人げなきさまにて源氏君に見え奉らんがはづかしくて、まばゆき也。

注に「人のおもはくはづかしければ」といへるは、いたくたがへり。

なやましければ云々

〔釈〕「かたはらいたし」といふまでは、空蟬の心に思ふよし也。「なやましければ云々」といふよりは、わた殿にうつるよしを人にいひて、うたがはせじとまぎらはす空蟬の詞也。よく思ひ分つべし。「所労あれば、ひそかに肩腰などうちたたかせんに、源氏の御座ちかくては便なし。ほど遠くあらん」といひて、中将が局へゆくさま也。さて中将をとり出たるは、かの夜の心を知たれば、よろづにたよりよければとてなるべし。いとこまやか也。

かくれに

〔玉〕「かくれ」とは、かくれたる所をいふか、又思ふに、「つぼねしたるにかくれに」にて、かくれんためにといふ意なるを、後の人、にもじの重なれるをいかがと思ひて、上なるをば、さかしらに除きたるか。

〔釈〕初の説よろし。後の説はひがこと也。「かくれ」は体言にて、かくれ所といふ意也。

さる心して

〔釈〕空に逢給はんの心して也。

いとあさましく

〔釈〕空蟬の、女房の局に逃入たるを見て、小君興をさましたるさま也。「つらし」は、つれなしの意也。

なきぬばかり

〔釈〕ほどほど泣ますべきほどにいふ也。俗に「なかぬばかり」といふ意。

く、心ぐるしくも恋しくもおぼしいづ。*おもへりしけしきなどの、キノドクニモ

いとほしさも、はるけんかたなくおぼしわたる。かろがろしくはひ*ハラシヤウモナク

まぎれたちより給はんも、人めしげからん所には、びんなきふるま*フツガフナ

ひやあらはれん、と人のためもとほしくおぼしわづらふ*例れいの

うち*に日かずへ給ふころ、さるべきかたのいみまちいで給ひて、に

はかにまかで給ふまねして、みちのほどよりおはしましたり。きの

かみおどろきて、やり水のめいぼく、とかしこまりよろこぶ。こ君

にはひるつかたより、かくなん思ひよれる、との給ひちぎれり。あ

けくれまつはしならし給ひければ、こよひもまづめしいでたり。女

もさる御せうそこありけるに、おぼしたばかりつらんほどは、あさ

くしも思ひなされねど、さりとてうちとけ、人げなきありさまを見

え奉りても、ゆめのやうにてすぎにしなげきを、又やくはへん、と

思ひみだれて、猶さてまちつけ聞えさせん事のまばゆければ、こ君

が出ていぬるほどに、いとけぢかければかたはらいたし。*空詞なやまし

ければ、しのびてうちたたかせなどもせんに、ほどはなれてをとて、

わた殿に、中将といひしがつぼねしたるかくれに、うつろひぬ。*さ

る心して人どくしづめて、御せうそこあれど、こ君はえたづねあは

ず、よろづの所もとめありきて、わた殿にわけ入て、からうじてた

どりにきたり。*小君心いとあさましくつらしと思ひて、いかにかひなしとお

ぼさん、*となきぬばかりいへば、かくけしからぬ心はつかふものか。

をさなき人の

〔湖〕童のなかだちする事は、世に忘^わむ事ぞといひおどせるなり。
人々さけずおさへさせて

〔釈〕病あれば女房どもを遠ざけず、胸腹など押へさせて侍れば、便なしといへ、といふ意也。「あやしとたれもたれも」は、誰も誰もあやしと思ふらんといふ脈也。

しなざだまりぬる身のおぼえ

〔釈〕受領の妻と品格の定りたる身といふ也。「おぼえ」は、人のおもはくにて、こは身の勢ひ・仕合せをいふ也。

すぎにしおやの云々

〔釈〕逢生の巻にも「おやの御かげとまりたる」とあり。「過にし」は、父母の余波のおもかげに見ゆるやうなるを、とまれるとはいへるなり。いとあはれる詞也。「ふるさと」は、父母の家をさしていへり。

見けつも

〔釈〕さばかりの源氏の御志を思ひしらぬやうに見消^クつも、と也。
いかにほどしらぬやうに

〔玉〕源氏君の、御ころざし御身のほどをしらぬやうに也。

心ながらも

〔釈〕わが心に思ふことながらも、むねいたく也。「さすがに」は、いひはなちたるものの、さすがに也。

いふかひなきすぐせ

〔釈〕既に受領の妻と定まりたる上は、今はいふともかひなき前世の宿縁ぞ、と也。

むじんに心づきなくて

〔釈〕「無心」は、心なくなさけなき也。心づきなくなさけなきものとおぼすとも、かくて止なんと思ふよし也。

ふよう

〔玉〕事かなはざるよし也。注に、不用・不要などの字を出して、其字の意に解れたるは、みなかなはず。字はさも有べけれど、意は然らず云々。

〔釈〕字は「不用」なるべし。仮字ようとかくべし。いたづらなる意也。

めづらかなりける心のほどを

〔釈〕このをもじの下に、必脱文あるべし。このままにては聞えがたし。其故は、「身もいとづかしくこそなりぬれ、と」とあるは、源氏のの

たまふ言なるを、「めづらかなりける心のほどを」とあるは、源氏の思ひ給ふ心なれば、其間に語なくてはとのひがたし。猶考ふべき也。

身もいとづかしくこそ

〔湖〕空蟬にきはるる事をのたまふ也。

いといとほしき御けしき也

〔釈〕これは草子地ながら、小君が心になりていへる也。

ははきぎの云々

〔河〕そのはらやふせやにおふるははき木のあるとは見えてあはぬ君かな
〔余〕坂上是則が歌にて、新古今集にもせたり。くはしくは袖中抄巻十九に見えたり。

〔花〕「ははきぎ」は、空蟬にたとへたり。有とは見れどあはぬ故也。

〔釈〕尋ねよれば見うしなふといへるははき木の心をもしらで、その原の道にあやなくもまどひ来にけることかな、といひて、さてもさてもつれなくくやしき事也、といふ意をふくめたる也。かれ「聞えんかたこそなけれ」とはのたまへる也。

女もさすがに

〔釈〕さはつれなくもてなしし物から、さすがに心にかかりてねられざりければ、かかる歌をよめり、といふ意也。

かすならぬ云々

〔新〕その原のふせやを賤が伏菴^{フセヤ}にいひなして、女の身をよそへたり。さて其「数ならぬ名のうさに」とは、かかる受領のめとなりたる身のいやしさにこそかくにげ隠れ侍れ、昔ながらかからばさもあらじをと、先にいひつる意を一首につづめていへり。

〔玉〕上句は、受領の妻と定まれる賤き名のうさに也。此人の心、始終かくのごとし云々。下句は、あるにもあられず、思ひきゆるよし也。さて四句も「きゆる」も、帚木の縁の詞也。

小君いといとほしさに

〔釈〕この歌の贈答も小君がつたへたるよしをあらはしたるにて、すきまなき筆つき也。

をさなき人の、かかることいひつたふるは、いみじくいむなるもの^幼

を、といひおどして、心ちなやましければ、人々さけずおさへさせ^を

てなん、と聞えさせよ。あやしとたれもたれも思ふらん、といひは^{△侍也} マウシアゲヨ フシギナ

なちて、心のうちには、いとかくしなざだまりぬる身のおぼえなら^{品定}

で、すぎにしおやの御けはひとまれる、ふるさとながら、たまさか^過 親 オモカゲ 留 故郷 ノマニテ

にもまちつけ奉らば、をかしくもやあらまし。しひて思ひしらぬが^{オモシロク}

ほに見けつも、いかにほどしらぬやうにおぼすらん、と心ながらも^消 分際 △ワカ

むねいたく、さすがにおもひみだる。とてもかくても、今はいふか^{サウハイフモノ} 乱

ひなきすぐせなりければ、むじんに心づきなくてやみなん、と思ひ^{宿世} シアハセ 止

はてたり◎君はいかにたばかりなさん、とまだをさなきを、うしろ^果 △小君方 成 未 幼 キヅカ

めたく、まちふし給へるに、ふようなるよしを聞ゆれば、あさまし^{ハシク} 待 臥 △小君参リテ 源心 キモノツプ

くめづらかなりける心のほどを、身もいとづかしくこそなりぬれ、^{レタ珍} 空 △源詞

いといとほしき御けしきなり。とばかり物もの給はず。いたうう^{＊地} △ノタマヒテ シバラク 歎

めきて、うしとおぼしたり。^息 ツライ

ははき木の心をしらでそのはらの道にあやなくまどひぬるかな。^{＊源氏} ワケモノナク 迷

聞えんかたこそなけれとの給へり。女もさすがにまどろまれざりけ^{イのたまへば} ＊ △イハウヤウ 空セミ イけ

れば、^り

かすならぬふせ屋におふる名のうさにあるにもあらずきゆるはは^{＊◆空セミ} 生 消

き木。と聞えたり。小君いといとほしさに、ねふたくもあらでまど[＊] △源ノ △チコチト

わび給ふ

〔**釈**〕これは、源氏君のわび給ふごとく聞ゆれど、なほ空蟬也。さて空蟬に給ふといふは、上に「思ひつづけてふし給へり」とある所の小櫛補遺に、「ここに至りてかく此女君をあがまへいへるは、源氏君の御思ひ人となりしによりて也」といへる意なるべし。

例の人々は

〔**湖**〕御供の人前にも「いぎたなかりける夜かな」とあれば「例の」と也。すさまじく

〔**玉**〕不興におぼす也。

〔**釈**〕独寝し給ふがすさまじき也。
なほきえず云々

〔**湖師**〕「きゆるははき木」と歌にはよめど、つれなき意地は猶きえずと也。〔**釈**〕「たちのぼる」は、ぬけ出たる意也。帚木の梢高きによそへたるか、或は「消る」といふ火の縁に「のぼる」といへるにもあらんか、とにかくに縁語也。

かかるにつけてこそ心にもとまれ

〔**湖師**〕「うちつけのすきずきしさなどは、このましらぬ御本上にて」などある心也。かやうにつれなき故に、源の心もとまるぞ、と也。

〔**釈**〕「かつは」は、ねたき中に且はの意なり。

かしこげにと聞ゆ

〔**玉**〕所のさまむさむさとして、人共もあまたつどひるて侍れば、さる所へ入れ奉らんはあまり恐多きよし申せるにて、所のさまの、源氏君へ恐れあるなり。

よしあこだになすてそとの給ひて云々

〔**釈**〕「よしさらば、せめて汝だに我をすてな」との給ひて、御側に臥しめ給へるなり。これ、上にもいへるごとく、男色をほめかしたる書ざま也。心とどめて見るべし。「ふせ」は、令レ臥なり。

おぼさるぞ

〔**玉**〕細流に、『とぞ』とは、紫式部、わが書たることをしらせじのため也』とあるは、たがへり。しらせじとてにはあらず、ただことさらにおほめきたる詞にて、かやうに語り伝へたりと、昔物語になしたる詞也。

〔**評**〕「とぞ」の説、小櫛のごとし。さて此巻の終と、空蟬巻の始とはつづきたる事なるを、暫ハくきりて別巻とせられたるなり。さてしか別巻と

せられたる意は、今知りがたけれど、大かたは、これは品定、これは中河の段などやうに、あざやかにけにくくかまへんがつつましさに、しどけなくまぎらはさんためにもあるべし。さて又、この中川の事、初は方違のゆくりなきよりふと出来たる事なるを、女のつれなきにわび給ひて二たび事のついでをまちこしらへておはし、つひにはしのびてわたり給へるさま、つぎつぎに御思ひのたへがたくなりゆくころをいどよく書なされたる中に、おのづから法則あり。深く心とどめてあぢはふべし。

ひありくを、人あやしと見るらん、とわび給ふ。＊例 れいの人々はいぎ＊

たなきに、ひとところ、すずろにすさまじくおぼしつづけらるれど、＊

人△源氏にぬ心△兼々さまの、なほ△空ノきえず△似たちのぼれりけるもねたく、＊ かかる△サシテタリ

につけてこそ心もとまれ、とかつはおぼしながら、めざましくつら△サシテタリ

ければ、さばれとおぼせど、さもえおぼしはつまじく、かくれたら△空ノ

ん所にだに、なほ△タゐていけとの給へど、いとむつかしげにさしこめ源詞

られて、人あまた侍るめれば、かしこげにと聞ゆ。＊ いとほしと思へ小君心

り。＊源詞 よし、あこだになすてそとの給ひて、御小君詞かたはらにふせ給へり。傍

わくなつかしき御ありさまを、うれしくめでたし、とおもひたれ△源ノ

ば、つれなき人よりは、なかなかあはれにおぼさる、とぞ。＊ △空セミ カヘツテ △伝ヘキシ